

---

# ネバービリーブ

ジョン&ちー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネバービリーブ

### 【Nコード】

N5495F

### 【作者名】

ジョン&ちー

### 【あらすじ】

ある日学校に侵入者が現れた！その男たちは宙に浮かんだり、空間移動を使ったり、呪文でみんなをおかしくしてしまったりとすごい力を持っていた。その男たちの謎とは？無事に現代の空間に帰ってこれるのか？主人公の津式くんとその友達が織り成す友情SF物語！！ついに登場！

## 第一巻　～6人の子供～

前書き

友達には本当に信用できるものなのか・・・

いまだにその答えは出ていない。

しかし根っから信用してはいけないことは確かだ

そのことをぼくは酷く残酷な形で確かめさせられた。

第1章　～友達～

ぼくの名前は津式光。

埼玉県のとある中学校の2年生で、

1年生の頃は吹奏楽部に所属したがやめて卓球部に入った

成績は中の下位でスポーツはそれなりに出来るけれどヒーローになれるわけでも無い。

しかしバドミントンをやっていて瞬発力や腕の力などは皆より勝るものがあつた。

そんな僕には何人かとても仲のいい友達がいる

まず名屋伊吹、彼はサッカー部所属で学年2位の頭を持っている優等生でもあり、

クラス内でも目立つた存在だ。

さらに田辺蒼生、斉木翼、彼らも仲のいい友達で

田辺は名屋と並ぶ頭の良さを持ち

斉木は卓球部部长でちょっと抜けてるところもあるが頼りになるやつだ。

この二人はクラスのいじられキャラといったところか。

そしてクラスは違うが加賀裕一と久杉優太もまた仲がよく

加賀は僕が一番の友達で加賀本人も僕には素の自分を見せてくれる今までこんな良い友達を持ったこと無いと思うほど僕は加賀を信頼

している

久杉はテニス部部长で頭も良く、頼りになるかなり精神が大人なヤツだ

そんな友達の中、今日もいつも通りの日々が流れるはずだった  
しかし現実では違った・・・

第2章　すべての始まり

良く晴れた日のこと、この日は夏でありながら妙に肌寒かった。

僕はいつも通りに登校し、いつものように授業に励んだ

そして2時限目の社会の授業中、事は起きた。

「ピンポンパンポン」

突然放送が入った

「校内に侵入者複数発見、ただいまA棟に接近中、A棟の生徒および教師は侵入者に備えるように」

突然の放送に皆動揺していた

「ガラガラガラ」

クラスのドアが開いた

と同時にすさまじいスピードで何かが入ってきて先生を襲った。

クラスの女子が何人か黄色いこえで絶叫したが

それ以外は何も音を立てず、皆硬直していた

ふと我に返った男子が何人か先生の元に行ったが

先生はすでに息絶えていた

「外に出てもらおうか」

侵入者の声が静かに響いた。

クラスの空気が緊張感でピンとはりつめる

突然の事に動揺しているせいもあるが

何より皆、侵入者の格好に驚いていた

侵入者はジーンズをはきボロボロの服に炎のような真っ赤なマントを羽織っていて

髪はとても長く、表情は格好とは裏腹にとても落ち着き払っていた  
「何をしている。早く外にでろ」

侵入者がまた言った  
皆がそれに従い外に出た

外に出ると2年生全クラスが校庭に出ている、

(どのクラスも先生がいない)

それぞれ侵入者の仲間と思いき人がついていた。

(その男たちはなぜか全員赤いマントを羽織っている。)

「これで全部だな」

中央にいる太った男が言った

彼はこのチームのリーダーらしく

それぞれクラスについている男に命令をしていた。

リーダーと思いき男が立ち上がり叫んだ

「この学校はわれわれが支配した！！これからはわれわれの命に従  
い雑用から殺しまでさまざまな仕事をこなしてもらおう！！」

みんな「殺し」ときいて震えている

太った男が続けた

「しかし全員じゃない！！」

皆が太った男の声に耳を澄ませる

「今からテストを始める！！それに残り見事合格したやつのみこの  
仕事をしてもらおう」

そしてさらに太った男が静かに付け加えた

「それ以外のヤツには死んでもらおう」

第3章 宣告

皆凍りついた

「死んでもらおう」

その言葉が頭を渦巻いた。ココでふと僕は一つの疑問がわいてきた。

『いったいテストとは何をするんだらう?』

凍りついているみんなの中、僕はその太った男に聞いてみた

「あの・・・テストとはいったい何を・・・するん・・・ですか？」  
皆が僕を見た

（言葉に出さずともみんながぼくに對し何を思ったかすぐ分かった

「こんな状況で・・・頭おかしいんじゃないか？」）

「はははいい質問だ小僧！！」

さも嬉しそうに太った男が言った

そしてその低い声でうなるように言った

「殺し合いさ」

凍り付いていた皆の顔にさらに恐怖が浮かんだ

そんな中、久杉が言った

「殺し合いとは相手は勿論だがこっちもその気になら無きや意味が無い。」

僕はそんなことしないよ」

落ち着いた声だ

「ふふふ・・・嫌でもそうなるのさ」

太った男が言った。

「僕はそんな事はしない！！」

久杉がさらに言った

「黙れ！！」

太った男が叫んだ

「俺に反抗するとはいい度胸だな小童が！！言いか俺の言う事に間違いはない！！」

俺は神になるのだ。その神に反抗するなど許されることではないぞ！！今回は許すが今度やったら絶対に許さんからな」

久杉は何か言いたげだったが相手が本気だと分かったのか、言うのをやめた

「さあ！！話し合いはこれで終わりだ！！そろそろテストを始める  
としよう！！」

そういうと太った男とその一味が突如空中に浮かんだ。皆が一斉に

息を飲む。

(僕の見間違いかもしれないが空中にいる男たちの下の風景が微妙にゆがんで見えた)

そして男たちはそのまま屋上へと上がっていった。

訳の分からない呪文のような言葉を発して・・・

第4章〈開始〉

男が屋上へと上がってから1分位たった

今はまだ何も起きていない

第一殺し合いなどどうやったら始まるのだ？

この中に、誰かを本気で殺したいなどと思うやつがない限り、始まるわけが無い

と、突然後ろから女子生徒の叫び声が聞こえた

何事かと後ろを振り向くと、なんと一人の男子生徒が女子生徒に襲い掛かっていた！！

周りの男子生徒が必死に止めに入った。そのとき

なんと襲い掛かった男子生徒のつめがよきによきと伸びてきて、

止めに入った男子生徒の首を一気に切り裂いた！！

血が噴火した火山のように飛び散った！！

女子生徒が絶叫した

目の前で人が・・・それも首を切り裂かれるという残酷な殺され方をしているのは当然の反応だ

屋上にいた太った男が笑いながら言った

「殺し合いの開幕だあああ」

その声と同時に160人中の70人程度の体に異変が起きた

つめがかなり長くのび、髪の毛が伸びてきて、筋肉が膨れ上がり、目が白目をむいた。

その後、なんと変化が起きた70人が一斉に変化の起きなかった生徒に襲い掛かった！！

「名屋！田辺！斉木！加賀！久杉！」

僕は5人の名前を咄嗟に叫んだ

幸い5人はおかしくならないでいてくれてすぐに僕の元に来てくれた  
「とりあえず校内に入ろう」

僕が言つと皆うなずいてとりあえず校内に入った。

第5章 状況

僕らは今、2階の家庭科室にいる。

ココなら校庭の様子が良く分かるし、いざというときは包丁や伸ばし棒があるから都合がいい。

校内に入った後、しばらく僕らは喋らなかつた。

というより喋れなかつた。

あまりに突然すぎることに困惑し、恐怖しまでもに口が聞ける状態ではなかつた。

そんな沈黙を破つたのは田辺だつた。

「いったい・・・どうなっているんだ？」

不安そうな声で言つた

「何が？」

斉木が言つた

「だからあの男たちのことさ。おかしくなつちまつたやつのも・・・。今こうしてここにいることだつて俺には何がなんだか・・・」

斉木は1回区切つた後また言つた。

「第一何で校内に誰もいないんだよ。1年生や3年生、先生がいてもおかしくねえだろ」

「そんなの俺にもわからねえよ」

名屋も不安そうだ

「焦るな、まず一つ一つ解決していこう」

相変わらず久杉は冷静だ

「俺は今ほんの少しだが分かってきてることがある」



みんなが久杉のほうを向いた

「まず、校内に誰もいないってことだけど、あの太った男が屋上に上がるとき何か呪文みたいなのをいっていたよな？多分アレがこの状況を作り出しているんだと思う。それと関係ありそうなことをさつきココに来る途中みつけたんだ。来てくれ」

僕は言われるがままついていった

そしてたどり着いたのは一階の保健室だった

「ココがどうかしたのか？」

斉木が首をかしげた

「それはだな！！」

名屋が久杉を退け説明し始めた

どうやら名屋は意味が分かっただらしい

その後ろで久杉の舌打ちがかすかに聞こえた

どうやら自分で説明したかったようだ

「見てみるよこの保健室、知ってるか？保健室は前ストープを出すからって模様替えしたんだ。でもこの保健室は模様替えする前の保健室になっている、これがどういふことか分かる？」

そう言われても僕はピンと来なかった

「全くにぶいやつらだナァ……。つまり久杉はこう言いたいんだろ、ここは別の空間だったさ」

「まあそういうことだ」

久杉がいった

「何でそうなるんだよ？」

まだピンと来ない僕はきいた

「はあ？ホント鈍いナァ、だからさ模様替えされたのに何でココはそれ以前の形なんだよってことさ。おそらく奴ら前にもココに来たことがあったんだ。ここが模様替えされる前に、で、ココの空間にそのイメージを付け加えたからこうなった」

でも・・・とぼくはまた質問した

「何でそれが空間移動したってことになるんだよ」

お前見なかったのか？

今度は久杉が言った

「あいつがさつき空中に浮いたとき下の景色がゆがんでいただろ？アレが証拠なんだ。いいかよく聞けよ」

久杉が深く息継ぎをした

「ココの空間に別の時代の空間、つまり別の空間を持つてくるとわずかにゆがみが出るんだ。さらにその別の空間はココの空間と質量が違うからその空間に乗ることも出来る。だから奴らさつきは飛んでいたのではなく、その空間に乗っていただけなんだ。」

なるほど、それなら筋は通る！！

しかし

「そんな・・・空間を持つてくるだなんて・・・そんな神みたいな技が出来るわけないじゃないか。そんな非科学的なこと僕は絶対認めない」

現実主義の田辺が言った

すると久杉が

「それがいるんだよなあ・・・この世にはそういう力を持って生まれてくるやつらが、

数は少ないけどな・・・。それにお前だってエスパーって言葉を聞いたことがあるだろ？

それがまさにあいつらって訳さ。それにこれは国も認めてるから、俺らも認めざるを得ない事実なんだよ・・・。」

そっついわれてもまだ田辺は納得がいかないようだった。

でも・・・と僕が続けた。

「何で2人はそんな空間だのエスパーだのにくわしいの？久杉は勿論だけど名屋だってそれを理解できたってことは相当詳しいはずだよね？」

「それは・・・」

2人が意味ありげに一瞬目を合わせた

「本で見たんだ」

嘘くさい台詞をはいた二人にまた質問しようとした

しかしそのとき加賀が声を張り上げた

「あれ!!!」

加賀は校庭を指差していた。

その指をたどり校庭に目をむけるとそこには信じがたい光景が広がっていた

なんと校庭にいた90人のほとんどがすでに殺されていたのだ!!!  
かろうじて生き残ったり、校内に逃げたものもいるがもうあと数時間  
間でやられてしまうだろう

「僕達はイツタイこれからどうなるんだ?」

加賀が不安そうに言った。

「と・・・とりあえずあいつらが来たら包丁で応戦しつつ屋上にい  
るヤツの元に言って話を聞くしかない」

久杉が答える

「そうだな」

と僕と名屋が相槌を打った

一巻END

## 第一巻 〈6人の子供〉（後書き）

〈編集者後書き〉

ご覧いただき、ありがとうございます。このたび小説を書き始めました。

初めてなのでいろいろあるかもしれませんが、評価、感想などをよろしく願います。

さて、内容ですが、「ネバービリーブ」ということで、友情などをテーマに書いていきたいと思えます。

## 第二巻 戦う者

〔序章〕

今日は誰かが死ぬ予感がした。

目の前にいるのは5匹のスローター

全員爪を光らせ、喉を震わせ、血に飢えた表情をさらに極悪なものとしている。

次の瞬間、スローター達が一斉に僕らに襲い掛かった

皆が応戦している中、僕は1歩出遅れてスローターの下敷きになった。

スローターが勝ち誇ったように吠え、高々と鋭い爪の生えた手を上げた。

するとその手を一気に振り下ろそうとする

今日は誰かが死ぬ予感がした。

第1章 これから

僕らはいま正門が見える窓に近くにいる。

なぜなら屋上に向かおうとしたときに斉木が

「これに生き残っても生き残らなくても、俺らに得なんかねえじゃねえか。」

なんでわざわざ従わないといけないんだよ。それに学校から逃げ出せばこんなもん、どうにでもなるだろ？」

と言った

その話を聞いたときみんな

「それもそうだよな・・・」

と思って正門に向かって足を進めたからだ。

しかしいくまでもなかった。

正門はスローター達によって完全に包囲されていたのだ。

(このスローターとはおかしくなってしまうた奴らの名称で田辺が考えた。どうやらスローターとは「虐殺者」と言う意味らしく、奴らにはちようどいいだろうと僕らはそう呼ぶことにした)

「お・・・おい、どうするんだよ・・・」

田辺が言った

「全然だめじゃねえか。誰だよこんな事考えたやつ」  
名屋も言う。

すると斉木が名屋に怒声を浴びせた

「うるせえ！！俺はあくまで可能性を言ったんだ！！何にも考えてねえてめえにそんなこと言われる筋合いはねえ！！」

するとまたしても名屋が

「なんだとお！！」

と言いかえした。

僕と加賀と田辺があたふたしているなか、

「喧嘩したって何も変わらないだろ。そんなことしてる暇があったら、これからどうするか考えたほうがいいと思うがな」

久杉がたしなめるように言った

(なんて頼りになるやつなんだ！！)

すると名屋と斉木もこれ以上は無駄だと分かったのか、いい争いをやめた。

そしてさらに久杉が言った。

「さて、これからどうするか。外に出て、奴らと戦って外に出るか？でもその場合、もしも奴らに勝っても外に出れると言う保証が無いことが厄介だ。かといってこのまま屋上にいっても同じことになるだろうし・・・でも屋上に行って太った男たちから話が聞ければ確実に帰れる」

皆が考えている中

「ちよちよちよ・・・ちよつといいかな？」

と田辺が言った

「あのさ、このテストに合格できたとしても奴ら、雑用とか殺しと

か色々な仕事をさせるんだろ？そのこと皆忘れてない？」

「あつ」

と、みんながポカーンとする。

「・・・」

何秒か皆黙った。

と、久杉が口を開いた

「で・・・でも、とりあえずこの状況を打開しないと意味が無い。

その後どうなるかは分からないけどさ・・・でもまず・・・まず

奴らに話を聞いてみないか？」

皆難しい顔で考え込んだ。

この問題にはかなり時間が掛かったが、みんなそれしかないと考え

が一致した

「じゃあとりあえずは屋上に向かおう」

久杉がいった

## 第2章〈武器〉

屋上に向かうと決めた僕らはまず、武器になるようなものを集めた。

（幸いスローター達はまだ校内には入っておらず自由に動けた）

みんな家庭科室にあった包丁と投げられそうなフォークは持ってい

たが、それだけじゃ心細い。

なので、僕らはスローター達が入ってくるまでは別行動とし、各自

武器になるようなものを集めることになった。

僕はとりあえず一階を探し回った。

一階には1年生の教室と武道館、体育館、保健室など使えそうなものがありそうところが沢山あるからだ。

まず武道館で剣道部の竹刀を頂戴し、体育館では盾になりそうな板、

保健室では治療に役立ちそうな薬を持っていった。

そのとき「ガシャーン」と後ろで窓ガラスの割れる音がした。

後ろを振り返ってみると

スローターが2、3匹、校内に入ってきているのが分かった。

僕は見つからないうちにそそくさと集合場所にしていた家庭科室に向かった。

家庭科室に行くと、もうすでに名屋と斉木と田辺がいた。

それぞれありとあらゆるものを持ってきていて、全員一致して持ってきてるものと言えば保健室の薬くらいで、ほかは全部バラバラだった。

と、田辺が

「久杉と加賀は遅いな」

といった

斉木と僕も

「どうしたんだらう?」

と首をかしげた。

そんな中、たった一人、名屋は何も言わず、ただただ皆が持ってきた武器を見つめるのであった。

第3章 自分の能力

久杉と加賀を僕らはひたすら待った

なぜか時計が止まっているため正確な時間は分からないが

10分、15分は待った気がする

そんなときだった

「ガラガラバシーン」

突然、家庭科室のドアが開いた。

見るとそこには久杉がたっていた。

相当焦って走ってきたらしく息をゼエーゼエーと切らしながら、苦しそうな声で言った

「みんな!! 早く!! 早く来てくれ!! 加賀が!! 加賀が!!」

皆何事かと思い、急いで持ってきた武器を手に取り久杉についていた。



久杉について行っている途中、僕の頭ではいろんな思いがまざっていた

（加賀にいつたいなにながあつたんだ？久杉の様子からして相当なことだ！！まさか・・・まさか！！）

最悪の状況はなるべく考えずにいたが、それでなかったらいつたい何が起きたと言っのたろう！！

心の奥底ではなんとなく予想はついたが、そうでないように必死に祈り続けた。

しかし・・・その祈りは通じなかった。

久杉に連れて行かれた先は一階の廊下だった

そこでは加賀が5匹のスローター達に襲われていてたくさん怪我をしていた。

どの傷も命にかかわるような傷ではないが痛々しく真っ赤な血を流していた

それを見るや否や、久杉と名屋と斉木と田辺は

「加賀！！」

と叫びながら何の躊躇も無く加賀の元へ走っていった。

皆がスローターと戦う中、僕一人は恐怖に打ちのめされ動けずいた心の奥では動いて戦わないといけないと分かっているのに、体が動いてくれない

きつと頭が恐怖のあまり麻痺しているのだ。

そんな時、目の前に斉木が飛んできた。

胸に爪で切り裂かれた大きな傷があつた。

かなり深く切れている、このままでは大量出血で死んでしまうだろう。

他の皆はスローターと戦うので必死だった。

今ココで僕が斉木を治療しなければ間違いなく斉木は死んでしまう。でもまだ僕は動けなかった

（怖い怖い怖い・・・）

そんな思いだけが頭の中を渦巻いた

そのとき

「津式!!」

と田辺がぼくの名前を叫んだと、次は優しい声で

「斉木を・・・頼んだぞ」

その一言で僕は吹っ切れた

目の前にいる斉木の胸に手を当て、保健室から持ってきた薬や包帯で治療していく。

自分でもナゼそんなに手儀は良く治療できたのか分からなかったがとりあえず心の声に従い治療を続けた。

すると斉木は

「お・・・おお!!すごい!!痛みが・・・痛みがひいてくる!!  
津式・・・お前はいつたい何者なんだ?」  
といった

僕は斉木にニッコリ微笑んで自分でも分からない力に身をまかせ、着々と治療を続けた。

#### 第4章 戦況

斉木の治療も終わり、

すでに吹っ切れていた僕は皆と同じようにスローターとの戦闘に向かった

「ここからが本番だ!」

と、覚悟を決めて戦況を確かめた

名屋は小柄なスローターと互角に戦っていて、爪の攻撃は持っているタイルで防ぎ、

隙を見つけたら包丁で切りかかると言った形で戦っていた。

久杉は人並みの大きさのスローターと戦っていた。彼も盾のタイルと何処から持ってきたのか日本刀のような刀をたくみに操り、応戦していた。戦況は久杉に有利と見える。

この2人はなぜか戦いなれしているような戦い方をしていた。  
次は加賀と田辺だ。

彼らはコンビで戦っていて

加賀は大柄な体を武器とし、スローター3匹の注意を引き寄せていた。

その隙に田辺が家庭科室にあつたフォークやナイフを投げつけスローター達にダメージを負わせていた。しかし流石に3匹は荷が重すぎた。

ナイフを投げつける田辺の隙をみていつきに1匹のスローターが加賀に襲い掛かった!!。

僕は咄嗟に

『加賀と田辺たちの援護をしよう』

とおもい彼らの元へと走っていった

僕は加賀と襲い掛かったスローターとの間に入った。

そして

「2匹なら何とかなるか？」

と田辺と加賀に聞いた。

加賀と田辺は

「勿論さ!!」

と答えた。

とりあえず僕はスローターを加賀と田辺から離れた場所に誘導し戦うことにした。

(ここでは加賀の邪魔になつてしまふ!!)

まず右手に握っていた竹刀で思いつきスローターを叩き注意を引く  
そして3歩くらい右に避け、数歩バックした

『ココなら田辺と加賀の邪魔にならないだろう』

と思った場所で足をとめ

スローターに向き直った。

第5章 初めての戦闘

スローターは僕のほうを向きながら低くうなった。

と、同時に勢いよく僕に飛び掛ってきた

僕はそれを何とか避け持っていたナイフをスローターに思いつきり突き出した！！

それは運よくスローターの足にあたり、深い傷を負わせた。

ところがあるうことかスローターは嬉しそうにけたたましく吠えた  
どうやら僕を出来る相手と分かり喜んでるようだ。

そしてさらにスローターは走って僕のほうへやってきた。

僕はさつき命中して、傷を負っているほうの足に狙いを定めた。

スローターが鋭い爪の生えた手を思いつきり振り下ろす。

僕は避けようとしたが完全には避けきれず腰の辺りにかすった。

かすっただけと言えど、あのとても鋭い爪が僕の肉を切り裂いたの  
だ、

痛く無いわけがなかった。ぼくは思わずうっとなった。

でも動きを止めてはスローターの思う壺だ。僕は痛みをぐっところ  
え次の攻撃に備えた。

スローターはさらに僕に飛び掛ろうとする。ぼくは竹刀を構えた。

スローターが一瞬動きを止めた。かと思うと突然スピードを上げた。

僕はそのスピードについていけず完全に隙だらけだった。その隙を  
スローター見逃すわけもなく僕に向けて思いつきり攻撃を仕掛けた

そしてなんと僕の背中を思いつきり爪で切り裂いたので。

あまりの痛さに僕はもがいた。

それに気づいた田辺が

「津式！！」

と叫んだが僕は

「大丈夫だ！！お前はそっちの戦いに集中しろ！！」  
と言り返した

本当は助けに来て欲しかったがそんなことをしては、ろくに武器を  
集められなかった加賀がやられてしまう

ぼくは背中の傷の痛みになんとか耐え、立ち上がった。

それを見たスローターはまた僕に向かってきた。

僕は目を閉じ心を落ち着かせた。

そして一気にナイフを振り下ろした！！

運悪くナイフは宙を切ったが思わぬ反撃に動揺したスローターに隙が出来た。

すかさず僕はナイフを力強く怪我をしている足に突き刺した！！

スローターはかん高い声を上げた。

なんと僕のナイフがスローターの足を、ももから完全に切断したのだ！！

スローターのももからすさまじい量の血が飛び出る！！

僕はそれを見て心底ビビったがそんなこと言ってる暇はない

早く止めを刺さなければまたいつ襲ってくるか分からない

でもぼくはとどめを刺すのをためらった。

いくらスローターが極悪な殺人鬼とはいえひとつの命を奪うことに変わりはない。

そんなこと僕には出来るわけもなかった。

第一僕がとどめを刺さなくとも大量出血で死ぬかもしれないではないか！！

だがそれを見ていた田辺が戦いながら言った

「津式！！早くそいつにとどめを刺してやれ！！確かにその傷じゃ

もうそいつは死んでしまっただろう！！でもそれはこの上ない苦痛を

伴うんだぞ！！苦しいのは分かる！！怖いのも分かる！！だが・・・

早く楽にしてやったらどうだ！！」

ぼくはどうしていいかわからなかったが、結局とどめを刺すことにした。

命を奪うのは気が引けたがこのスローターのことを考えたらその方がいいかもしれない。

僕は心を決めいっきにナイフをスローターの胸へと押しこんだ！！  
そして一気に引き抜く！！

スローターの胸からそれはもう大量の血がふきだした！！  
そしてかっと目を見開き最後の息を吐き・・・  
スローターは動かなくなつた。

## 第6章 仲間の死

僕が1匹のスローターを倒したのを見て  
久杉が戦っていたスローターが他のスローターに向けて大きく吠えた  
するとスローター達は一斉に後ろへとジャンプし僕らの数メートル  
後ろでかたまつた  
どうやら一斉攻撃を仕掛けるらしい！！  
すると久杉が

「さうて！！どうしたものかな！！一斉攻撃となると、とりあえず  
はこつちの方が数が多いから優勢だが、一人一人の戦闘能力で比べ  
ると相手ののが有利だな！！」

と言つた

本当に、戦いなれした口ぶりだ！！

そしてまたしても久杉が

「皆よく聞け！！こうなつたらこの一斉攻撃は受けてたつしかな  
い。とりあえず武器の少ない加賀と戦闘能力の低い田辺は下からせ  
るとして、後の4人は単純に計算して1人1匹になるわけだが・・・  
おまえら大丈夫か？」

名屋は

「もちろん！！」

と答え

齊木は

「いうまでもないだろ」

といった

なので僕も

「もちろんさ」

と答えた

久杉は皆にニツコリ笑いかけるとスローター達のほうを向いた。  
いよいよ決着のときだ！！

しばらく沈黙が続いた

1秒1秒がいように長く感じる

と、次の瞬間スローター達が一気に吠え一斉に飛び掛ってきた

僕は攻撃に備えるために左足を一步引いた

すると足が何かに当たった

さつき倒したスローターの足だ！！

その足にすっかり気をとられていた僕は

襲い掛かってくるスローターにあつという間に下敷きにされた！！

そしてスローターが勝ち誇ったこえでほえた。

そして僕に止めを刺すべく手を振りかざす

そしてものすごいスピードで振り下ろす。

このとき僕は自分の最後を悟った。

僕はきつく目を閉じ

早すぎる死を受け入れるべく静かに心を落ち着かせた

「グシャ」

耳を覆いたくなるようなものすごい音がした

「・・・僕は死んだんだ」

自分に言い聞かせた

しかしココで僕はおかしなことに気がついた

なんと痛みが全く無いのだ！！

そのとき僕の顔に小さなしずくのようなものが垂れてきた

僕は目を開けた

するとソコには信じられない・・・いいや、信じたくない光景が広がっていた

なんと僕を襲ったスローターの爪が田辺の胸に突き刺さっていたのだ！！

僕は慌てて

「田辺！！」

と叫んだ

その声に気づいた皆が駆け寄ってきた

(どうやら皆はそれぞれのスローターを倒したらしい)

田辺の胸にはスローターの手が丸々突き刺さっている

時間が止まって思えた

と、そのときだった

スローターが田辺の胸に突き刺さった手を一気に引き抜いた！！

田辺がドサツと倒れる

田辺を殺したスローターは周りの仲間の死骸を見て勝ち目が無いと悟ったのか

その場から立ち去っていった。

僕はまた、田辺の手を握り締めながら声をかけた

「た・・・田辺？」

返事は無い

「お・・・オイ返事位したらどうなんだ？」

すると田辺が口を開いた！！

「う・・・うるせえ・・・なあ・・・」

消え入りそうな声で言った

「なんで・・・なんで僕なんか助けたんだ！！」

僕が訳も分からず聞いた

「友達を・・・助けるのに・・・理由が・・・いるのか・・・」

田辺が血を吐きながら言った

僕の目から涙がこぼれる

「ば・・・バカじゃないのかお前！！そんな・・・そんなことのために命捨てるなんて・・・ホントバカだよ！！」

涙が止まらない

「ほんと・・・バカだよな・・・たぶん・・・俺は・・・お前のこと・・・相当・・・大事に思ってたんだろうな・・・」

田辺の一言一言が胸に刺さる



もう僕は声も出なかった

すると田辺が力を振り絞り最後の言葉を静に言った

「み……みんな……いままで……たのし……かつ……た……ぞ……」

田辺の口から、胸から、大量の血が出た

握ってた田辺の手がガクツと倒れる

みんなむせび泣いた

もう泣くしかなかった

あまりの悲しさに皆震えている

「田辺……!!」

隣にいた斉木が絶叫する

田辺は死んだ

僕の腕の中で……静かに息を引き取った。

## 第7章 覚悟

田辺が死んでから

僕らは何時間か口を聞けなかった

仲間が死んだあまりの悲しさと、ショックのあまり口を聞けるものなど1人としていなかった

『田辺は僕を守るために死んだ』

そう僕は自分で自分を攻め続けた

そして数分がたったあと名屋が口を開いた

「田辺は……堂々と死んだ。仲間を守るために……。今ココで俺らが立ち止まってちゃアイツが悲しむ……。ちゃんと前を見て……行こう……」

皆力なくうなづく

と突然久杉が手をパンツとらしいった

「はいはい悲しむのはそこまで!!これが戦うって言うことだ!!戦いにおいて犠牲はつきものだ。田辺はその犠牲になっただけ!!」

その犠牲の上に生き残る覚悟があるもののみ生き残れる。ただそれだけだ!!」

「その犠牲になっただけ」

あまりに軽い口調に僕は久杉を怒鳴った

「ふざけんな!! そんな軽く収まるかよ!! 田辺はもうここにいないだぞ!! 僕を守るために死んだんだ!! それを・・・それを・・・そんな軽く言うなんて・・・お前は悲しくないのかよ!!」

とその瞬間、僕は久杉に思いつきりはたかれた

僕はあまりの怒りに久杉を殺してやろうとナイフを構えた!!

でも久杉の顔を見たたんそんな気はどっかへ吹っ飛んだ

泣き後の残る顔に、さらに涙を浮かべて久杉はこういった

「悲しくないわけ無いだろ・・・お前一人が・・・つらい思いしてるように言うんじゃないやねえ・・・」

久杉の言葉を聞いて僕は前に進もうと思った

多分皆も同じ気持ちだ。

田辺の分まで、僕らは生きて、前に行かなければならない・・・

第2巻 戦う者 END

## 第二巻 〽戦う者〽（後書き）

〽編集者後書き〽

今回の話で、あっけなく田辺が死んでしまいましたね（笑）  
もともと田辺は実際にこんな心優しいキャラではないので、その入  
んはご承知を。

次回から田辺に代わって新しい人物が登場します！

### 第三卷 新たな敵、新たな仲間

〈序章〉

なんと大きな体・・・

なんとすさまじい迫力・・・

スローターなんて赤子のようには見えぬ

これから僕らはこいつと戦うのか・・・

未来への道がゆっくりと闇に飲み込まれていった。

第1章 死を乗り越えて

田辺の死はとても悲しかった。でもその悲しみも、次第に時が癒してくれて

今ももちろんつらいが、前ほどのつらさは無くなった。田辺の亡骸は廊下のはじめのほうに立てかけておいて、上に僕らのジャージをかぶせておいた。きちんと葬ってやれないのがかわいそうだが、今外に出て行ったら死体が増えることになりかねない。

なので僕らはこの騒動が終わったらきちんと葬ってやることにしてとりあえずは目立たないところにおいておいた。

田辺の表情はとても穏やかで、まるで、ただ寝ているだけのようだった

いまにも

「おはよう」

と言い出しそうなその顔を僕らはただただじっと見つめていた

そして簡単な花束や田辺が使っていたサッカーシューズを近くにおいてやった

そんなとき加賀が

「俺前に一度覚えたことがあるんだ」

と、お経を唱え始めた。

それを聞いているうちに僕はなんだか気持ちが悪くなった

加賀がお経を唱え終わると名屋が

「さあいこうぜ」

と、皆を促した

皆がさつと顔をあげる

「さあいこう」

久杉が名屋と同じ言葉を発する

「さあいこう」

齊木も言った

僕と加賀は顔を合わせニツと笑って同時に言った

「さあいこう！！」

第2章 謎の女性

僕らは一階の廊下を後にして屋上へと向かっていった。

屋上に行く途中何度かスローター達に出くわしたが難なく進むことが出来た。

すると齊木が

「なんだかヒーローになったみたいだな！！」

と気持ちよさそうにいった

「そうだね！！さっきまで怖くて怖くてたまらなかったスローター

達を簡単にやつつ

けることが出来るようになったんだ！！ホント気持ちがいいや！！」

加賀もうれしそうだ

「この調子だと案外簡単に屋上につくんじゃない？」

ぼくも弾むように言う

すると久杉が

「あんまり図に乗ってると痛い目見るぞ」

といった

でも久杉も笑っているところを見ると、余裕が出てきているのだろう。名屋がやれやれとため息を吐いた。でも内心では名屋もとても嬉しに違いない。

そんなことを話しながら一階の階段を上っていくと後ろのほうからすごい音がした

「ゴキヤーーー」

数秒皆口を閉じた。するとさらに

「ゴキヤーーー」

と言う声がある

間違いない！！スローターの声だ！！

誰かが襲われているのかもしれない！！

僕らは互いに顔を合わせた

「どうする」

斉木が言った

「行くつきゃないだろ」

名屋が答える

しかし久杉は

「待て！！落ち着いて考えろ！！今行っても俺らに何の得がある！！なるべく無用な戦闘は避けたい！！ココはひとまず無視していい！！！！」

皆が考え込む中、僕が言った

「そんなの嫌だ！！」

久杉が僕を見る

「誰かが襲われているかもしれないのに見逃すなんてぼくは嫌だ！

！誰かが死ぬのはもうたくさんだ！！」

すると久杉が僕に向かっていった

「行ったら俺らがやられてしまうかもしれないんだぞ！！」

それでも僕は「嫌だ！！」といい続けた

「今までは僕らは簡単に倒して来れたんだ！！でもあの音からして今戦ってている人は相当でこずっている！！助けられるのに助けないだなんてぼくは嫌だ！！」

すると名屋が

「よーし！！よく言った津式！！」

と僕に行った

その後、久杉に

「久杉！！津式の言うとおりで俺は思う！！はやく行ってやるよ」

久杉はためらいながらも

「分かった」

と言った

行ってみるとやはり誰かが1匹のスローターに襲われていた

(良く見るとスローターに襲われている人は女性だった)

僕らは一斉にスローターに向かっていった。それを見たスローター

は心底驚いてものすごいスピードで逃げていった。

僕が襲われていた女性に話しかけた

「だ・・・大丈夫ですか？」

すると女性は

「フン！！」

と顔を背けた

女性は全く僕の話の話を聞いてくれないので困り果てた。

とソコへ斉木が来て

「大丈夫ですか？レディー？」

と女性に声をかけた。

僕はプツと思わず吹きだしてしまった。あまりのベタな台詞に笑わ

ずにいられなかったのだ

その言葉を聞いた女性は

「あんなバカじゃないの？」

とピシャリとはねつけた

僕はおもわず声を上げて笑ってしまった。

久杉たちが「なんだ？」とよってきたが

斉木は微妙に目が潤んでいた

(全く単純で健全な男子だ！！)

そこへ久杉が出てきて

「お前は何もんだ？」

と聞いた

すると女性は

「人のことを聞く前に、自分たちが名のつたらどうなの！！」  
と強い口調で言った

これは失敬、と久杉が答えた

「僕は久杉優太、それでこの隣にいるのが名屋伊吹、そしてこのおつきな体をしたのが加賀裕一、そしてあなたに一番最初に声をかけたのが津式光」

バカ丁寧な口調だ

僕らはそれぞれ軽くお辞儀をした。そして・・・と、久杉が続ける  
「あなたがいま突き放したのが斉木翼です」

くすくす笑いながら久杉が斉木を紹介する

斉木はそんな久杉に「フン！！」と鼻を鳴らしてが、すぐに女性に  
向き直りニツコリ笑って女性に問いかけた

「あなたのお名前は？」

すると女性が

「カノンよ・・・カノン・アルビダ・グランツ」

と答えた

僕らは『こんな人、2年にいたっけ』とそれぞれ思った

第3章 ー新しい仲間ー

カノンは結構キレイな僕らと同年くらいの女性だった

あれからカノンは僕らと行動をとみにしている。

最初僕らは訳の分からない女性を仲間に入れることをためらった  
だが斉木が猛プッシュしたので根負けして『一時期だけ』一緒に  
なることになった。

カノンが言うには彼女は別の空間から来たのだという

確かにこんな人、学校で見たこと無いから本当のことなのだろうけど、  
頭がその事実を受け入れようとはしなかった



齊木は

「カノンが何処からこようが関係ない」

と言い張ったが

僕らとしてはどうしても彼女の素性を確かめたかった

しかし何度カノンに聞いても

「だから別の空間から来たのよ!!」

としか答えずそれ以上は明かそうとしなかった

困り果てた末に

「まあそのうちだんだん分かってくるだろう」

という答えに行き着き僕らもそれ以上の詮索はしなかった

しかしカノンはあの太った男のことを知っていて、いろいろ僕らに教えてくれた

あの太った男の名は「スコル・アルビダ・グランツ」

なんとカノンの父親だというのだ!!

僕らはもつと知りたくてカノンに迫った

するとカノンは

「助けてもらった御礼くらいはしないとね」

と言い、スコルのことを教えてくれた

「お父さん、昔はとっても優しくったんだ。私、お父さんのことがとっても好きだったの。でもあるひ、お父さんが経営していた会社が潰されちゃったのよ。そしたらお父さん、怒りに身を任せて会社を潰した新しい会社の社長さんを殺しちゃったの。それでお父さんは逃げ出した。もちろんお父さんは指名手配されたわ……。でも全然見つからなくてね、私もお母さんももう諦めてたの……。でもそんな時お父さんの情報が入ってきたの。どうやらお父さんはテロ組織と繋がっていて、しかもその中でもトップクラスの人間だったらしいの。私もお母さんも絶望したわ。さらにお父さんは、欲や怒り、恨みや妬みなど、人の邪悪な部分だけを増幅させ、理性や愛や友情みたいな人としての善の心をなくしてしまうものを開発したとも聞いた。」

僕は今までのことと結びつけながら一心に聞いた。  
するとカノンが急に涙声になって泣きながら言った

「流石にこのことはなかなか信じられなかったわ。お父さんがそんなことに手を伸ばしていたなんて……。でも現実はそのよね。」

斉木が励まそうとカノンの肩に手を乗せようとしたがパシッと跳ね飛ばされた。

そして彼女は続ける

「でももつと信じられないことが起きたの。その開発途中に不慮の事故があつてお父さんは死んだつて……。」

ま……。待つてくれと名屋が言った

「死んだつて!?!?……。まさか……。じゃあ今いるあの男はなんなんだよ!?!」

「そんなの私にも分からないわよ!?!だからこうしてココに来たんじゃない!?!」

久杉がまあまあとおちつかせ「それで?」とカノンを促す  
するとカノンは

「これだけよ!?!さっきも言ったけどお父さんのことを知るためにココに来たの。そしてら奴らに襲われて……。あなたたちに助けられて……。今ここにいるわ」

そうか!?!そうだったのか!?!やっと話しが繋がった。彼女はそのことを知るために、たったいまココに来たのか!?!それならつじつまが合う!?!

と、そのとき、加賀が口を開いた

「じゃあ……。その開発したものでおかしくされちゃったのがスピーカーで、なぜかココには死んだはずのカノンさんのお父さんがいて……。でもそのお父さんは指名手配されて、つていうことか?」  
「まあそうなるわな」

斉木が言った。

みんながそのことについて考えている中、僕はそれよりももっと気

になることがあった

僕はそれを聞くのをためらったが思い切ってカノンに聞くことにした  
「ねえカノン・・・別の空間からきたってことは、カノンも空間移動が出来るの」

「ええそうよ」

かるい口調でカノンが答える

「それがどうかしたのか？」

斉木が聞いた

「どうかしたもなにも、カノンが空間移動できるならココの空間から出れるじゃないか!!」

みんながあっけにとられ、口をポカーンとあける

「そ・・・そうか!!」

一斉に皆が言った

「カ・・・カノンその空間移動は多人数でも出来るのか？」

斉木が聞いた

「勿論よ!!」

「おっしやああああ!!」

一斉に皆で叫ぶ

「でも!!」

カノンが皆をさえぎった

「ここの空間ではなぜか出来ないの・・・。多分お父さんがここの空間からでられないように特殊な電磁波を流しているのね。悪いけどそれは出来ないわ。もし出来てもお父さんのことが解決するまでは返さないけど」

ああそうか・・・

皆が一気にガクツと肩を落とした。

ところが僕は何か引つかかることがあった。彼女の言葉に何か見落としていた点が・・・

「あっ!!」

僕が突然言ったものだから皆がビクツとする

「こ……今度はなんだよ」

齊木が言った

「ま……まさか他にも思いついたの？」

加賀が期待して聞いた。でも僕の聞きたいことは違う

「お父さんのことが解決するまでって……、もしかして……ずっと僕らという気？」

「当たり前でしょ！！もうあんな危険な思いするの嫌だもん。これからはちゃんと私のこと守りなさいよ！！」

カノンが偉そうに答えた。

みんなが

「はあ！？」

と、そろって言う。ただ齊木だけは嬉しそうに鼻歌を歌っていた。こうして僕らに「カノン」という新しい仲間が加わった。

第4章　オウディウス

カノンが加わってからと言うもの、ぼくらはとても忙しくなった。なんせカノンが

「もっと早く進めないの？」

だの

「お腹がすいたからご飯を頂戴」

だのと、とてもうるさくしていたからだ。

もし1人でもいうことを聞かないならば

「私の力が戻っても返してあげないわよ！！もちろん全員ねえ！！

こういうことは連帯責任で責任取るのが一番手っ取り早いから」

などと言い出すから、いやでも言う事を聞く羽目になった。

でもまあ、田辺が死んでから暗い気分になっていた僕らにとってはちょうど良い気晴らしにもなった。

そしていつものようにそんなことをしているときに事は起きた。

「お前ら……そのものを渡してもらおうか」

背後で凄みのある低い声がした。後ろを振り返るとなんと空間に黒

い穴のようなものが空いていた！！と、その中から見覚えのある姿をしたものが出てきた

ボロボロのシャツのような服に、ジーンズをはき、炎のような真っ赤なマントを羽織り、髪のとても長いもの。そう！！最初にクラスに入ってきて先生を襲ったやつだ！！

その者がまた言った

「カノン様をこちらに渡してもらおうか」

カノン様・・・その言葉をきいて僕はさっとカノンのほうを向いた

「カノン・・・お前・・・何かやらかしたのか？しかも何で様付けなんだよ！！」

久杉が問う

「そ・・・そんなこと知ってるわけ無いでしょ！！」

カノンが言った

「じゃあ・・・どうしてアイツ・・・お前のこと狙ってるんだよ！！」

加賀も言った

「そんなの分からないわよ！！」

カノンも吐き捨てるように言う  
すると男が

「カノン様、早くこちらに来ていただきたい。スコル様がお待ちなのです。でないとそのものたちを殺さなくてはならなくなる。その方たちも殺されたくなければさっさとカノン様を渡しなさい」

だんだんイラついてきてるようだ。

「渡すもんか！！」

斉木が大声を張り上げていった

みんなが「信じられない！！」という顔つきで斉木を見る。

「絶対に渡すもんか」

また斉木が言った

「ほう・・・その方は死を選ぶか、他のものはどうなのだ」

男が言う

「お・・・俺たちは・・・」

久杉が反応した。みんなは久杉の判断に任せようと次の久杉の言葉を待った。

きつと今、久杉はいろんなことを考えているに違いない

と、そのとき、久杉が僕らのほうを見て少し笑った。その顔には間違いなく『戦うぞ』とかいてあった。そして久杉が言葉を放った

「渡すもんかああああ」

僕らは一斉に男に向かっていった。1番早く飛び出したのはモチロ  
ン斉木で、久杉がなんと言おうと飛び出す気だったらしい。ものす  
ごいスピードだ

「フン・・・貴様らは愚か者だな」

そういうと男は黒い穴の中に入ってしまった

「どういうことだ？」

斉木が言う。

僕らは訳が分からずその場で止まった。

そのときだった。

何かが黒い空間の穴から出てきた。

僕らの3倍はあるつかというその巨体がこっちにむかってくる。そ  
いつの肌は不気味なほど光っている紫色の肌で、爪は鍵爪のように  
曲がっていて、口からはキバがでている。

(モチロン足や腕の筋肉の量も半端ない!!)

そして後ろから何匹かのスローター達と、さっきの男が現れた

僕らはその男たちよりも巨大な生物のほうに目が行った

「そいつはな・・・」

と男が口を開いた。みんなが男の言葉に耳を傾ける

「そいつは『オウディウス』と言う生き物だ。お前らの言う『スロ  
ーター』を作るときに普通の人間にくらべて憎しみや怒り、妬みな  
どが大きいとその姿になる。大きさや戦闘能力には個体差があるが、  
鼻のよさや好戦的な性格は『スローター』の非じゃないぞ」

僕らは骨の髄から震え上がった

「さらに・・・」

と男が続けようとしたが、オウディウスという生き物がそれを遮るようにものすごい声で吼えた

「おっと、これ以上はヤツが待ちきれないか・・・暴れてしまっっては取り返しのつかないことになるからな、話はここまでとしよう」

そして男が口の端を吊り上げながらパチンと指をならした。と、その瞬間、スローターとオウディウスが僕らに襲い掛かってきた

男が

「カノン様には傷をつけるな!!」

と命じる、いよいよ戦闘開始だ!!

第5章　VSオウディウス

男が楽しそうに戦いを見物している中

まず僕らは周りのスローター達からかたづけられることにした。

久杉と名屋がオウディウスの注意をひきつけている間に僕と加賀と齊木とでスローターを倒していく。

（カノンはわきにあった安全そうな部屋にいた）

僕らがスローターを次々と倒していつているとき、オウディウスの相手をしている久杉たちはまさに一進一退の攻防を続けていた、初歩的なミスがオウディウスとの戦いの中では命取りになる、脚力もパワーも僕らがかんうレベルじゃない、ただ頭脳だけは僕らのほうが上だ!!この頭脳をフルに使わなければ勝ち目は無い。

とりあえず僕らはスローター退治を終えた。つぎはあのオウディウスだ!!

僕らが久杉と名屋の元に行こうとしたら

「お前らは来るな!!」

と名屋が大声で叫んだ。

なぜなんて聞かなくても分かる。ぼくらじゃ足手まといになるだけで、何のプラスの力にもならない。

そこで僕と加賀と齊木はカノンの元へと行き戦いを見守ることにし

た。

久杉と名屋の戦いは見るだけで冷や汗が出る。

オウディウスが久杉に向かって手を振り下ろした。間一髪のところ  
で久杉は避けたが久杉に隙が出来た。そこを狙いオウディウスが足  
で久杉を思いつき蹴り飛ばそうとする。

そこに鋭いナイフが4、5本飛んできた。名屋が投げたナイフだ！  
！ナイフはオウディウスの足にグサリとすべて突き刺さった。オウ  
ディウスが思わず声を上げる。オウディウスは狙いを名屋に変えて  
突進しようとした！！しかしそんな攻撃の隙を久杉は決して見逃さ  
なかった。オウディウスが方向転換した隙に日本刀を取り、腹をお  
もいつき切り裂こうとする。それに気づいたオウディウス  
は得意の脚力で数メートル後ろに下がり、久杉の攻撃をかわした。  
そして次の攻撃を仕掛けようと身構える

名屋と久杉もその攻撃に備えるべく立ち上がりそれぞれ武器を構え、  
オウディウスのほうを向く。

オウディウスは口元をニツツと吊り上げた。

見たら男も口元がゆがんでいる。

そして次の瞬間、オウディウスが一瞬にして消えた！！僕らは戸惑  
いながらオウディウスの姿をさがした。すると久杉と名屋の後ろに  
オウディウスの姿が見えた。どうなっているんだと僕らは頭をフル  
回転させた。

と、そのとき久杉と名屋の腹からものすごい量の血が噴出した！！  
名屋と久杉がその場にドサツと倒れる。

何が起きたか分からない僕らはその場に立ち尽くしていた。

ふと我に返った僕は久杉と名屋の元に駆け寄った。

「名屋！！久杉！！」

僕が大声で叫びながら名屋たちのもとへ行く

その声に気づき、斉木と加賀も我に振り返りこっちに駆け寄ってきた。

2人ともものすごい傷だが名屋の方がふかだったので、僕は名屋  
に駆け寄った。



そして初めての戦闘のとき斉木を治したように手際よく治療を行った。

久杉はまだもがいていた。加賀と斉木が必死で治療しているが、あいつら2人だけじゃどうにもならないだろう。早くこっちを片付けて久杉のほうへ行かないと！！

そこで男の笑い声が聞こえた。「良くやったぞオウディウス」と言わんばかりに笑い続けている。

「ハハハ！！どうだ！！見たかオウディウスの力！！」

「なんのことだ！！どうやって攻撃したんだ！！」

僕は大声で言った

「ハハハ！！いいだろう教えてやる！！オウディウスはスローターとか言う雑魚とは違い、一体一体、特殊な力を持っているのだ！！このオウディウスの場合は『超高速移動』！！そいつらはその餌食になっただけだ！！」

男が嬉しそうな声で言った

『超高速移動』そんなことがありえるのか？だが空間移動だったんだ。それくらいあってもおかしくない！！

そんなことより早く治さないと！！

そのとき、男がオウディウスに命じた

「やれ！！オウディウス！！」

『まずい！！もうだめだ！！オウディウスにやられ・・・』

僕はこれこそ自分の本当の最後だと思った。もう田辺のように僕を守ってくれるやつはここにいない。もうどんなにもがいたって助かる見込みなど無い・・・そう思ってた。

緊張感が薄れゆく意識の中で僕は何かを見た。

オウディウスの叫びが聞こえ、黒いマントを羽織った人が現れた気がした。

『これは幻覚か？そうだ。頭の中でこうなったらいいと勝手に作られたただの妄想なのだ』

僕は自分にそう言い聞かせた。そしてそんな意識の中、声が聞こえた

「しつかりしろ!!大丈夫か?」

この声には聞き覚えがあつた。

これは・・・確か・・・4組の・・・

そこで僕の意識は完全に闇へと落ちた。

## 第6章 草羅拓人

徐々に意識が回復してきた・・・

『ここは一体何処だろう・・・』 周りではかすかに人の話す声がする。火のパチパチという音や風が吹き抜ける音もしたがとりあえず人の声に耳を傾けることとした

「そうか・・・そんなことが・・・。お前らも苦労したんだな・・・

誰かの声がする

「うん・・・でももう草羅がいれば大丈夫だ!!」

この声には聞き覚えがある・・・斉木だ!!

それより草羅とはどつかで聴いたことのある名だ

「ハハハ・・・そんなこというなよ・・・照れるじゃないか・・・」

草羅という人物の声か?

「そんな・・・でも事実だよ!!こんなに頼りになる人他にいないさ!!」

この声にも聞き覚えがある・・・加賀だろう!!

「ハハ・・・ありがとさん」

どうやらこの人は敵ではないようだ

「ところで津式たちは一体どうなんですか?」

加賀が言った

「津式はもう平気だ。こいつはどうやら気を失っているだけらしいしな。名屋も心配ない。津式の治療が聞いたのかもう完全に傷口はふさがっているよ。まったくあんな大きい傷を・・・たいしたもん  
だ」

草羅という人物が言った

そのあと少し声のトーンを下げてもう口を開く

「問題は久杉だ。傷も深いし処置も全然行われていなかったようだ。たぶん津式もこっちまで手が回らなかったんだろ。でも大丈夫さ！おれが治療しといたからよ！！あとは久杉の生命力に賭けるしかないがな」

ここで僕はむくつと起き上がった

「おお津式！！」

加賀と斉木が言った。

ここは・・・どうやら理科室のようだ・・・

僕はふと草羅と呼ばれていた人物にめをやった

「おつす！！大丈夫か・・・」

その言葉を聴いて僕ははっとした

草羅・・・草羅拓人か！！

「おお！！」

と僕は思わず草羅に抱きついた

草羅は勘弁してくれよ・・・といった様子だが抱きしめ返してくれた。

この草羅拓人という人物は、サッカー部所属で死んでしまった田辺とここに居る名屋の親友だ！！

そのとき、名屋と久杉も起き上がった

「あは！！久杉！！名屋！！」

草羅が声をかけた

すると名屋が嬉しそうに返答した

「おお草羅！！生きていてくれたんだ！！」

2人で抱き合った。ところが久杉はキョロキョロしたまま何も言わない

「どうしたんだ？」

草羅が問いかける

「カノンはどこだ？」

そういえばカノンの姿が見当たらない。

ああそれならと、草羅が机の下を指差した。あろうことがカノンは爆睡していた

ここで草羅が急にまじめな顔になっていった

「斉木と加賀から話は聞いたよ・・・田辺・・・本当に死んじまつんだな・・・」

ああと名屋がうなづく

「ああ見えてあいつ・・・いやつだったのにな・・・」  
泣きながら言った。

僕らはうんうんとただうなづくことしか出来なかった

「でもいつまでたつても後ろ向いてちゃ田辺に叱られる・・・しつかり前向かなきゃな・・・」

草羅は立ち直りがものすごく早かった。この話題が終わったとき僕は草羅に聞いた。

「あの後どうなったんだよ・・・僕達確か・・・オウディウスに殺されたはずじゃ・・・」

『おついい質問だ』と草羅が説明し始めた

「あのときは俺も流石に焦ったぜ。あと俺がコンマ1秒でも遅れてたらお前ら死んでたぜ。」

僕はそんなことよりも一体どのようにあの場を切り抜けたのか気になつて草羅に聞いてみた

「いいだろう教えてやるよ」

草羅が自慢げに説明し始めた

「あのオウディウスの力は『超高速移動』だっただろ？そんな力を持ってたんじゃ普通の人間じゃどうあがいてもかなう相手じゃない。でもな、もしもこっちがそのスピードに目だけでもついていくことが出来たら話は別だ！！『超高速移動』には大きな落とし穴がある。それはいちどトップスピードに達しちまうと方向転換が出来なくなることだ。だから上手くタイミングを合わせてやればたとえ木の切れ端だつて十分殺傷能力を持ったものになる」  
まだ僕は良く分からなかった。

すると草羅が

「じゃあ例えば・・・高速道路を走っている車があるとする。その車が走ってる最中に、前方からその車の窓ガラスめがけてビービー弾の鉄砲の弾を発射したらどうなる？もちろん窓ガラスが割れる。普通、止まってる状態の車の窓ガラスに、何の改造もしてないビービー弾の銃を発砲したってガラスは割れないだろ？それとおなじだ。少ない力でも相手の力を利用すればそれこそ膨大なエネルギーが生まれるってことさ！！」

なるほどそういうことか！！

ところが

「でも・・・」と加賀が言った

「あのオウディウスを倒せたとしてもあそこにいた男はどうしたんだよ！！あんな怪物を従わせていたんだ。相当腕が立つだろ？」

「ああそれはな、逃げてきたんだ。このマントについている睡眠ガスを撒き散らしてな！！」

僕はマントを見た。たしかにところどころ気体が噴出すのにはちょうどいいくらいの大きさの管が通っていた。

「こんなもん・・・何処で手に入れたんだ？」

名屋が聞いた

「これは前に倒した『催眠』系の能力を持ったオウディウスから頂戴したんだ。ヤツは睡眠に頼るだけで、攻撃能力は低かったから簡単に倒せたんだ」

草羅がまた自慢げに言った

「やるなあ」と名屋と久杉が感心する

「あとは・・・」と久杉がさらに言った

「カノンが目を覚ましたら色々聞かなきゃならないな」

僕らは深くうなずいた

そのあとカノンが起きるまで僕らはたわいも無いおしゃべりをしたつかの間の幸せにとっぷりとつかりながら・・・

第3巻 新たな敵、新たな仲間 〱 END

第三卷 〱 新たな敵、新たな仲間 〱 (後書き)

〱 編集者後書き 〱

新しい仲間はとうでしたか？ 田辺以上に活躍していると思います (笑)  
今回はあまり大きな変化はおきませんでした、次回は衝撃的なこ  
とが待ち受けている予定です。  
次話もぜひ読んでくださいね。

## 第四卷 異空間の覇者

（序章）

そんな・・・

僕らの攻撃がすべてはじき返されて・・・

しかもまだ本気ではないだと？

久杉も・・・一体どういうことだ？

それはまだ、

これから僕らの身に降りかかる

不幸の始まりに過ぎなかった

第1章 ｶﾉﾝの話

ここは理科室、バーナーから出る温かい炎、窓から吹き流れる静かな風、こんな幸せがこれからも続いたらいいのに・・・。

僕は心のどこかでそう思った。そんなことただの夢物語なんてことは分かってる。でもそう思わずにいられなかった

そんな考えを頭の中で描いているときに、睡眠ガスで眠らされていたカノンが目を覚ました

「あれ？ここ・・・どこ・・・」

カノンが目をこすりながら言った。ふとそこに、見覚えの無い顔があることに気がつく

「あ・・・あなただれ！！」

眠り中、声を裏返らせて言ったカノンの言葉にはいつもの迫力が無かった

「ああわるいなグランツさん。俺は草羅、今度から君たちと行動を共にすることになったんだ。ヨロシクな」

草羅が簡単な自己紹介をした。カノンが僕らの顔を見た。その顔は紛れもなく『本当なの？信じていいの？』と、僕らに訴えかけていた。僕らがうなずく。するとカノンが

「フ……フン！！今日からあなたも私のしもべになると言うことね。せ……せいぜい私を怒らせないことよ」  
と、偉そうな口調で言った

「ハハハ……。よろしくお願いいたしますよ」  
草羅が苦笑しながら言った  
すると

「さあ！！聞かせてもらおうかカノン。なぜお前は狙われているんだ？」

単刀直入に久杉が聞いた。久杉は回りくどいのが嫌いなのだ  
しかしカノンは

「知らないっいたら知らないの！！さっきも言ったでしょ！！」  
と仏頂面で答えるだけだった

「知らないなんか収まるかよ！！俺たちは狙われているんだぞ！！  
！何で襲われているのかも分からないままで言い分けないだろ！！そ  
んなんだったらカノン！！お前を奴らに引き渡すことになるぞ！！  
厄介ことは避けたいものでな！！」

久杉が罵声を浴びせる  
しかしあるうことがカノンは

「な……。なんであなたにそんなこと言われなきゃならないの！！  
私がいなかったらあんたたち帰れないかもしれないのよ！！それで  
いいの！！」

と、久杉に言い返した

久杉が「てめえ！！」と言いかかろうとしたが、斉木と加賀がまあ  
まあ、と落ち着かせた。

すると斉木が易しい口調で言った

「カノン……。俺たちもこのままじゃお前を守る意味がなくなつて  
しまう。久杉だって本心であんなこと言ったんじゃない。ただ守る  
理由がないんだっただら守りたくても上手に守れないって言ったんだ。  
だからカノン、俺たちに隠してること……。全部言ってもらえない  
か？」



女心を知ってる齊木はこういうときに頼りになる

そしてカノンが口を開く

「分かったわ・・・全部話す・・・」

僕らは話しを聞く体制に入った

「前に、この騒動の首謀者は私の父だつて言ったでしょ？あの人は私が生まれる前からこんな計画を立ててたつて言うの・・・私が生まれる前のあの人の力には計り知れないものがあつたわ。でもお母さんと結婚して、私が生まれるとお父さんに変化が起きたわ、お父さんの力はとても弱まっていたのよ・・・どうやら私が生まれるとき、お父さんの力の一部を譲り受けたようなの・・・だからお父さんは私を狙っているんだと思う。

おそらく私とお父さんの力をまた一つにして何かやらかそうとしているのよ・・・でもその何かが何なのかは私にも分からないわ・

「

カノンが話しを終えたそのとき名屋が口を開いた

「そうか・・・それならカノンが空間移動という力を持っていることも、奴らがカノンを狙っていることもうなずける。でもいったいやつは何をするつもりなんだろうな」

もつともの疑問だ。

一体やつは何をしようというのだろうか？見当もつかない

でも確かなことが一つある、それはカノンの身が危険に晒されていると言うことだ。

それを知った今、僕らはカノンのためにも、自分たちのためにも、カノンを守らなければならない。

カノンの話の後、僕らは今まで以上にカノンを守ろうと言う意識が高くなった。

そのためには命も惜しまないと言うほどだ！！ヤツが何をたくらんでいるのかはいまだに分からないが、いいことではないことは確かだ！！

もしかしたらこの空間を僕達ごと消滅させる気かもしれない、はた

またもともと僕らがいた空間を消滅させるのかもしれない。なんにせよ気をつけるに越したことは無い。

しかしそんな気持ちでいる僕らの中、何にも変わらないのがカノンの悪ガキっぷりだ！！あの話しを聞いて奴らが何をたくらんでいるのか考えているときも

「あなたたちがいくら考えても無駄よ！！」  
といたり

「どうせろくな考えは浮かばないわ」

といたり、まさにやりたい放題だ！！何度僕らはカノンを見捨てようと思ったことか……。でも見捨てては僕らが酷い目にあうかもしれないのでやめといた。

おそらく僕らに対する危険が何にも無かったらとうの昔に見捨てていたことだろう

そんなときだった。黒い穴がまた現れたのは……

第2章～二体のオウディウス～

黒い穴が僕らの前方5メートルくらいのところに現れた。

その中から大型の犬と同じくらいか、それより少し小さいか位の小柄な生き物と、僕らと同じかそれよりもちょっと大きいくらいの生き物が現れた。

そしてその後ろから赤いマントを羽織り、金髪で、ほっそりとやせた男が出てきた。前に見た赤いマントを羽織った男とは別人のようだ。

それを見た斉木が男に向かっていった

「お前はなにもんだ！！そしてその前にいる生き物たちはなんなんだ！！」

すると男が

「こいつらかぁ！！お前ら見たこと無かったけっかぁ！！あつそうか！！お前らはあのデカ物を見たんだっけなぁ！！いいさ！！教えよてやる！！こいつらもオウディウスだ！！」

(こいつの性格はおそらく超ヒステリックな戦い好きの男なのだろ  
う、口を開くたびにドデカイ奇声のような声を発している)

オウディウス・・・その言葉を聞いてみんな一斉に緊張した。

僕らには歯が立たず、ボロボロに負けた上に、深い傷を負わされた。

・・・あの・・・あのオウディウスという生き物・・・

と、突然加賀が言った

「み・・・皆大丈夫さ!! 今回の敵は前の敵よりもずっと小さいし  
・・・何より前のオウディウスのようにあまり迫力が感じられない  
!!きつと・・・きつと大丈夫さ!!」

僕らはうなずいた。

そうだ!! そのとおりだ!!

今回の敵は前の敵と比べて、威圧感も、迫力も、大きさもまるで違  
う!!きつと前のような悲惨な結果にはならないだろう!!

大丈夫だ!! 大丈夫だ!! そう思った矢先、男がまたヒステリック  
な声で言った

「ハハハ!! バカ!! 大丈夫なはずある分けないではないか!!  
確かにお前らが前に戦ったオウディウスとは大きさも、迫力にも大  
きな差がある!! しかしオウディウスであるという事実を忘れても  
らつては困る!! 知ってるだろう!! オウディウスが固体ごとに色  
々な特殊な力を秘めていることを!!」

そうだ・・・そうだった!!

あの男が言ったとおりオウディウスには一体一体特殊な力があるん  
だった!!でも・・・あんな小さいオウディウスの能力とは一体・・・

皆がどんな能力か考えているときに男が声を張り上げて言った

「いっけ!! オウディウス共!!」

その声と同時に僕らと同じくらいの大きさのオウディウスが口から  
ガスのような気体を吐き出した!!

かなり濃い気体で前が何も見えない!! 僕らは慌て、どうするどう  
するとパニック状態に陥った。特にカノンは

「どうなってるのよ!!何も見えないじゃない!!」  
と、わめき散らしていた

そこで草羅が僕らに一言はなった

「落ち着け皆!!これはただの霧だ!!何の害も無い!!」

その声を聞き、僕は静かに目を閉じた。徐々にパニック状態から開放される・・・そして落ち着いてきたと思ったときに目を静かに開ける。そのとき隣にいた久杉の声が聞こえた

「霧・・・霧か・・・だが一体何のために・・・」  
と、いきなり久杉が声を張り上げ皆に呼びかけた

「みんな!!今俺の声がするところに集まってくれ!!離れていると誰かが襲われたときに分かりにくい!!おそらくこの霧は姿を隠すためのもの!!集まればそれなりの防御になる!!」  
その声を聞いて皆が徐々に集まってくる。

そして皆が一箇所に集まった。まだ誰もやられてはいないようだ。皆が円を書くように内側に背を向けた。カノンを中心に周りを固める。そして外側に目を向けそれぞれ武器を構える。

それぞれが後ろの人を信用していないと出来ないポジション配置だがこれが一番安全な配置と言えるだろう。僕も僕で前方に目を凝らし、後ろは皆に任せる。

1秒、2秒・・・、時間が着々と過ぎていく。1秒1秒が妙に重い、空気がピンと張り詰めた時後ろで加賀の声が聞こえた

「いたぞ!!いま津式のほうに向かってる!!津式!!気を付けるよ!!」

「ああ・・・」  
僕は目を閉じ神経を尖らせた、と、その瞬間かすかな空気の流れを感じた

僕はカッと目を見開く、目の前に大きいほうのオウディウスが現れた!!

ぼくは「おおおおお!!」と声を上げ、ナイフをえいやつと前に突き出した!!

しかしあるうことかオウディウスは僕の頭上はるか上にジャンプして、僕を飛び越した！！そうか！！そうか！！最初から僕でなく僕の後ろの人物・・・斉木を狙っていたのか！！僕は咄嗟に

「斉木！！後ろだ！！」

と叫んだ！！しかし斉木は前に集中していてすぐには後ろの敵には反応できなかった

オウディウスが隙だらけの斉木に攻撃を仕掛けた！！

オウディウスが勝ち誇ったように高々と吼える！！

そしてふつと腕を振り下ろす！！しかしオウディウスの手は何かとぶつかり「ガキーン」と派手に音を立てた。

そのぶつかったものの正体は草羅が握っていた太刀のような武器だった！！

なんとあの一瞬で草羅は斉木のピンチを感じ、斉木を守ったのだ！！草羅とオウディウスが取っ組み合った。その隙をすかさず斉木が突こうとする。

しかしオウディウスはさっとそれを交わし、また霧の中へと消えていった。

### 第3章 策

その後もオウディウスは出てきてはさっと霧の中へ戻り、また出てきては霧の中へ入ったりとその繰り返しばかりしていて、みんなイライラしてきていた。

すると斉木が

「くそお！！じれったい！！もっと真正面からぶつかってこないか！！この腰抜けが！！」

と、大声で撒き散らした。その声を無視して名屋が言った

「ったく！！一体やつらはどうやって俺らの居場所を掴んでいるんだ！！この霧じゃ目は意味ないし、いちいちこつちに来てるといえど、多少は俺らの配置も変わっている！！なのによつは正確に俺らの位置を掴んでいる！！なぜだ・・・なぜなんだ？」

と、ぼやいた。その名屋の疑問に加賀が答えた

「多分・・・嗅覚・・・じゃないかな？ほら、前のオウディウスを操っていた男が言ってたじゃないか。オウディウスは嗅覚も優れているって・・・、嗅覚なら目が見えなくても何の支障もないよね」

「ほう・・・加賀！お前もずいぶんと成長したもんだな！！」  
齊木が言った

「そんなのんきなこと言ってる場合か！！すっかり目の前の戦いに集中しろ！！」

草羅が湯を入れた。

すると名屋が、

「嗅覚・・・嗅覚か・・・それなら合点がいく。でも分かったところでこちらはどうしようもないな・・・」

それもそうだ、こつちにも嗅覚が優れたやつがいれば何とかなるが、あいにくそんな奴はいない。

聴力も・・・だめだ・・・、気づいたとしてもそれは相手が近づいてきた後だ、こつちから先に攻撃を仕掛けることは出来ない・・・。皆が難しい顔で策を考える・・・でもなかなかいい策が思いつかない・・・。

そのとき、草羅が言った

「ああ！！そうだ！！なんなんだよ！！俺らはバカか！！こんな簡単なこと思いつかないなんて・・・」

なんだなんだと皆が草羅をせかす

「まずは元から断ち切れってね！！この霧を吹き飛ばしちまえばいいんだよ！！」

ああそうか！！と、皆が言った

と、そこに名屋が

「おいおい・・・吹き飛ばすって・・・一体何で吹き飛ばすんだよ！！こんな濃い霧、そう簡単には吹き飛ばせねえぞ・・・」

ああ・・・そうだった・・・

と、全員うなだれる

「そんなの簡単さ、グランツさんの力を使えばな」

草羅が言った

「えっ・・・あたし？」

カノンが調子ハズレな声を上げる

「ああ！！グランツさんの空間移動を使うのさ！！」

へ？とみんなが声を上げた

するとカノンが

「バ・・・バカじゃないの！！あんた理科室での話し聞いてなかったの！？あたしは今、空間移動は使えないのよ！！」

と、あほらしいと言わんばかりの口調で言った

しかし草羅は

「でも、空間に穴を開けるくらいなら出来るだろ？」

と、笑いながら言った

「それくらいなら出来ないこともないけど・・・」

とカノンが言った

すると斉木が

「あのさ・・・いまいち話の筋が読めないんだけど・・・」

と草羅に疑問を投げかけた。皆もうんうんとうなづく

「分かった説明するよ。みんな、ここの空間に別の空間を持ってこれると言うのは知っているよな？ここに空間を持ってくるっていうのは言い方を変えれば『ここの空間と別の空間をくつつける』ということなんだ。そしてその空間同士をくつつけたときにはものすごい威力の風がおきるんだ。それを空間の穴から流しだせば・・・」

そうか！！そうか！！とみんなの顔が明るくなる。

でも僕は良く分からなかった。

それに気づいた斉木が分かりやすく説明してくれた

「津式、卓球部なら分かるよな。折りたたみ式の台を閉じてしまうときにさ、横にいと閉じたときに結構な風が来るだろ？あれと同じことだ！！物と物がぶつかったときに起きる風って言うのはさ！！草羅が言うには空間同士でも同じことが言えるようなんだよ、そ

れを空間の穴を通じて外に出せればこの霧は吹き飛ばせるって草羅は言ってるんだよ!!」

なるほど・・・草羅はとてもキレるようだ。

「そうと決まったら早速作戦開始するか!!」

と、久杉がカノンをせかした。するとカノンは分かったわよと、言っただけで空間移動の準備を始めた。

第4章 見えない敵

カノンが空間移動の準備をしている間、僕らは襲ってくるオウディウスからカノンを守り続けた、何回か傷をおったがそこまで深い傷ではない、時間は何とか持ちそうだった

そしてカノンが言った

「準備できたわ・・・いつでもいいわよ・・・」

そしてそれに乗っかるように草羅が言った

「よしっ!!やるぞ!!皆準備はいいな!!霧が晴れたら一斉にオウディウスに飛び掛るんだ!!オウディウスは2体いることを忘れるなよ!!なぜか小さいほうは攻撃してこなかったが、それはおそらく、もしものとき奇襲を仕掛けるためだ。絶対に気を抜くな!!」

「お前に言われなくても分かっているよ」

と名屋が笑みを浮かべながら言った

そして草羅が

「カノン!!やるんだ!!」

と合図をかけた。そしてカノンが空間の穴を開け始める。「ジジジ」と言う耳に障る音が流れた、数秒たった後、完全に穴が開いた

!!  
と、同時にものすごい量の風が穴から出てきた!!そして周りの霧を一気に吹き飛ばして行く!!霧が完全に晴れた!!

僕らはオウディウスに向かって一気に向かって行った!!あっけにとられていたオウディウスは身構える余裕もなくただ呆然と立っただけだった。



そして僕らがそのオウディウスにナイフを突き出す！！ナイフがオウディウスの腹に、胸に、腰に、背中に・・・いろいろなところに深々と刺さった。そして僕らは突き刺したナイフを引く！！オウディウスの体から一気に血が噴出した！！

オウディウスは何も声を立てずただただ苦しみを顔に浮かべ静かに息絶えた。そしてドサツと床に倒れた・・・

「もう1匹は何処だ！！」

久杉が叫んだ！！しかし周りの何処を見てもいない。僕は目の端に赤いマントを羽織った男を捕らえた。そして

「もう一匹は何処なんだ！！」

と、男に向けて言葉を放った

しかし男は

「さあ・・・どこかねえ」

と僕らをおちよくる様に言うだけだった。

僕は男に怒声を放とうとした、しかしそのとき後ろで斉木の叫び声が聞こえた！！みると斉木の背中から大量の血が出ている！！

「斉木！！」

と叫んで僕は斉木のほうへと走っていった。

しかし斉木の元へと行こうとしたとき、背中に激痛が走った！！僕は僕自身の背中を見た、すると・・・なんと僕の背中からも大量の血が出ているのだ！！僕は床に倒れた！！そして背中の中からも大量の痛さにもだえ苦しむ！！見ると加賀と名屋も背中に大きな傷が出来ていてそれぞれ血が噴出していた！！

そんな中、草羅と久杉とカノンは無傷でいた。草羅は驚いた顔で僕らを見渡している。久杉はなぜか下を見て細く笑みを浮かべていた（カノンはあまりの恐怖に、泣きながら床に座り込んでいる）そしてそのとき男が声を張り上げ笑い、そして僕らに声をかけた

「ハハハ！！いい眺めよのお！！全員いい顔をしてるじゃないか！！」

僕は何が起きたのか訳が分からず男を見つめた。すると男が

「ホウ・・・何がどうなってるかわからんといった顔つきだな！！  
いいだろう教えてやるさ！！」

そう言った後、男は  
「もうでてきても構わないぞ」

と、ものすごい笑みを浮かべて言った。するとさつきまで何もいなかった男の隣にあの小さなオウディウスが徐々に現れてきた！！僕は目を丸く見開いた！！

一体どうなっているんだ？さつきまで何もいなかったのに・・・なんで突然あそこに・・・頭が痛みと訳の分からないこととで混乱していく。そんな時、男が言った

「だからさつきも言っただろう！！オウディウスは一体一体特別な力を持っていることを忘れるなと・・・こいつの力は「光学迷彩」つまり体を透明にすることが出来るのだ！！」

「そうか・・・だから・・・いつの間にか・・・こんなにでかい傷が・・・」

「そのとおりだ！！」

ハハハハハと大きく男が高笑いした

「しかしまあまだあるぞ！！」

と男が付け加えた

「フッフ、これを言い終わった後にはお前らの絶望の顔が見られることを期待している！！」

僕は男の声に耳を傾ける。と、突然久杉が大きく笑い言った

「てめえはそれ以上言うんじゃないねえ・・・ヒースト！！」

すると男は久杉をにらみつけながらも「はい」と、口を閉じた。

#### 第5章（情報）

僕らは何がなんだか分からなくなった。

ヒースト？それがあの男の名なのか？でもそうだとしたらなぜ久杉が知っているんだ？第一、アイツ・・・あんなに強そうなやつに上

からものを言ってるし・・・それになぜアイツは久杉の言うことを聞いたんだ？

本当に何がなんだか分からない

すると斉木が言った

「一体・・・どうなってるんだ・・・？」

僕は訳が分からず久杉の方を見た

「フンツッ！お前らに教えるつもりは無い」

ますます僕は訳が分からなくなる。

しかし久杉は「でも」と続けた

「おしえなければならぬこともある。でも『資格』があるかどうかは別だ。その資格があるかどうかこれから見極めるとしよう。」

「資格・・・？それは一体？見極める？何のことだ？」

名屋が言った

でも久杉はそんな名屋を無視してさらに言った

「資格があるかどうか、見極める方法はいたって簡単だ。ここにいるヒーストに勝てばそれでいい。勝てたら俺らの要求を教えてやる。ついでにこの状況と脱出の仕方もな。それに戦闘中に俺らの謎も次第に解けてくるだろう。もし負ければお前らはここで殺す。必要な人間以外はな」

やはりあの男はヒーストという名前なのか？これから戦う僕らの敵・・・

そのとき草羅が言った

「必要な人間とは、やはりカノンなのか？」

「もちろんだ」

と、久杉が答える

「でもカノン様だけではないぞ。ほかにも1人必要なやつがいる。この戦いが終わってそいつがこちらに来たくないのならそれはそれでかまわないがな。しかしカノン様は絶対だ」

しかしもう1人とは一体誰だ？第一来たくないならそれでもいい

て・・・？この中に進んで奴らの仲間になりたいなんて思っているやつは一人としていないだろう。一体何が目的なんだ？

僕は頭が混乱してきた。

「さてと、そろそろ始めるか。俺はこの戦いには手を出さない。やるのはヒーストただ一人だ。と言うことで」

と、久杉が言った。

かと思うとヒーストという男の隣にいたオウディウスを久杉が思いつきり蹴飛ばした！！するとオウディウスはその蹴り一発でひっくり返って動かなくなった。

「なんてこった！！オウディウスをただの蹴りでしとめやがった！！」

草羅が大声で言った。その時！！ヒーストという男が大声で喚き散らした！！

「バルキー！！！！てめえ！！よくも俺のオウディウスに！！ちよつと待つてる！！今そこに行つてぶつたおしてやる！！！！」

すると、久杉は（バルキーとは一体何のことだろう）

「やれるもんならやってみる、『ノーノ』のお前が『セースト』の俺に勝てると言うのならな！！！！」

僕らにはもちろんその会話の意味は分からなかった。でも久杉の言葉は相当強力なものだったのだろう。ヒーストは急におとなしくなった

「さあヒースト！！あいつらをぶちのめすのだ！！！！」

と、ヒーストが僕らめがけて突進してきた！！その時草羅が

「どうやらやるしかないみたいだな・・・みんな！！絶対勝つぞ！！！！」

と、僕らを勇気付けるように言った。そして皆で「おお！！！！！！」と叫ぶ

そしていよいよ戦闘が始まった

草羅がヒーストに、持っていたナイフを投げた。僕もナイフを投げる、斉木と名屋はヒーストに向かって走っていった。

僕らが投げたナイフはすべてかわされてしまった。

が、斉木と名屋は自分の持っているナイフでヒーストと戦っている。僕と草羅は2人を助けるべくその辺の石やガラスの破片を投げ続けた！！

加賀はカノンを守っていた。

僕らが投げた武器の何発かはヒーストに命中したがとてもダメージをあたえられるものではなかった、そのとき！！斉木がヒーストに向かって持っていたナイフを振り下ろした！！するとそのナイフはヒーストの腹に深々と刺さった！！僕らはあっけにとられ呆然と立ち尽くした。ヒーストの近くにいる斉木と名屋もまた、立ち尽くしている。と、その時！！草羅が大声で言った

「名屋！！斉木！！そいつから離れる！！ナイフが刺さっているのにそいつ・・・血がででねえ！！」

僕らはパツとヒーストの傷を見た。

確かに血が出てない、それどころか傷口が黒くなり、徐々に治っていつているではないか！！

それを見るや否や斉木と名屋は逃げ出そうと駆け出した。しかし！！2人は後ろから飛んできたナイフに足や手、数箇所さされ動けなくなつた。するとヒーストはさらに僕らに向かって石やガラスの破片を体から猛烈な勢いで発射した！！僕と草羅は想定外の攻撃をかわしきれず床に突っ伏した。

するとヒーストが高笑いしながら言った

「どうだ！！見たか我が能力！！これでお前らは動けまい！！お前らが私に勝つなど無理な話なのだ！！」

「いったい・・・どうなっているんだ？なぜ・・・やつの体から俺らが攻撃したものが・・・」

草羅が苦しそうに言った

するとヒーストが自慢げに喋り始めた

「フン！！教えてやるう！！我が能力は『吸収』！！相手の攻撃で受けたダメージを我が体内に吸収し、それを一気に相手にぶつける

事が出来るのだ！！今は石やガラス片だったからお前らのダメージもそこまでではないと思うが、これがピストルや弓矢だったらお前は今の攻撃で死んでいたはずだ！！」

「畜生・・・力の差がここまでだったとは・・・、だがまだ戦える・・・」

名屋がまたヒーストの元へ駆け出そうとした。しかし

「さて・・・アイツの力が計り知れない・・・もう少し様子を見よう」

と、斉木に止められた。ふと僕は草羅のほうを向いた。すると草羅は「そんなこと絶対にありえない」とでもいったそうに顔を強張らせていた。そしてそのことをヒーストに告げる

「そ・・・そんなのありえない！！今の攻撃をすべて吸収しただと？そんなことできるわけが無い！！実際、俺が前戦ったオウディウスにも吸収の能力を持ったやつがいた。しかしそいつは7本のナイフを吸収するだけで精一杯だったんだぞ！！それを50はある石やガラス片を吸収したなんて・・・そんなのあるわけねえ！！」

するとヒースト叫んだ

「俺をそんな低級オウディウスと一緒にするな！！お前らは知らないようだから教えといてやる！！俺らはオウディウスではないのだ！！ここではない空間の人間なのだ！！」

人間と聞いて僕が言った

「じゃあなぜそんな力を持っているんだ！！」

「人間といてもただの人間ではない。その空間の王者だ！！いいか、よく聞け！！スコル様はオウディウスという莫大な力を持った生き物を作ってしまった。さらにオウディウスは人間の憎しみなどから生まれる、人間は憎しみを持ちやすい生き物だ。故にオウディウスの数はそれはもうとてつもなく多い！！実際この学校でも40体出来たほどだ！！流石のスコル様といえどそれを制御しきることとは不可能だった！！」

ヒーストが言葉をつなげるために息を吸い込む。(どうやらこれは

明かしてもいいことのようにだ、後ろにいる久杉は手を出そうとはしていない)

そしてヒーストが続ける

「だからオウデイウスを従えるだけの力を持った生き物、空間の王！つまりは覇者をおおうと考えたのだ！そしてその生き物が俺らだ。さらにスコル様は色々な空間に行くことでさまざまな力を持った覇者をより集めた。スコル様が集めたそれぞれの空間の覇者をまとめてこう言う『シャイターン』と、そしてさらにそのシャイターンにもランクがある。それはローマ数字の9〜1の数字で表され、9から順にIX、VIIII、VIIII、VIIII、VI、V、IV、III、II、Iノーン、Iとなる！！さらに！！お前らが久杉と呼んでいたそいつはコードネームバルキー！！セーストシャイターンだ！！そして俺はそのうちノーノシャイターン！！シャイターンの中では最弱の数字だが、お前らが今まで戦ってきたオウデイウスと比べればはるかに強いぞ！！さあどうする！！ここで降参するか？お前らに俺を倒すことは不可能！！」

僕らが慌てふためく中、珍しく斉木は冷静だった

「へっ！！それがどうした！！いまし戦ってみたがソコまで差は感じなかった！！俺らの倒せない敵じゃねえ！！」

するとヒーストは

「今までは本気を出していなかったただけだ」

と言った

「そんなの嘘に決まってる！！」

斉木も反論する。だがヒーストも言い返す

「お前はバカだな。さっきの話で言っただろう。ピストルの弾や弓矢ならお前らは死ぬと・・・今までに俺が何発分そういったものを吸収して来たと思っっている。」

さっと僕らの顔から血の気が引く、僕らが絶望するなかヒーストがピストルの弾を飛ばしてきた。僕の見間違いかもしれないがそのときの久杉は悲しい表情をしていた。

第四卷へ異空間の覇者へEND



#### 第四卷 異空間の覇者（後書き）

（編集者後書き）

久杉が実は敵だったのは皆さん驚きましたでしょう。

こんな展開が待ち受けていたのはしょうがないことです。ここで初めて題名の「ネバービリーブ」(never believe/決して信じない、決して信じられない)の意味が分かってきたと思います。これが最終的にどうなるやら・・・

次回は仲間が一気に減ります！（予言です）

## 第五卷 目覚め

（序章）

そんな・・・

信じてたのに・・・

僕はもつとも失いたくなかったものを

一気に3個も失ってしまった

攻めることも、止めることすらできなかった

残るのは無力感のみ・・・

強くなりたい・・・

強くなりたい！！

第1章 ーテストクリアー

青ざめていく僕らにヒーストが高笑いしながらピストルの弾を打ち出してきた

もう助からない！！恐怖で動けない！！

半分僕は諦めていた

しかし、僕は隣から漏れでる光にはっとした

隣を見てみるとなんと斉木の体が光り輝いていた！！

おそらく斉木自身、半分意識が無いのだろう

うつろな目をしている。

と、思うとさらに光が増ってきて円盤状に広がり僕らを包み込んだ！！

するとなんとなんと！！

ヒーストが打ち出した弾がそれにはじかれ『カランカラン』と音を立てて床に落ちたのだ！！

「一体今のはなんだ」

ヒーストが素っ頓狂な声をあげた

僕らも訳が分からず斉木をまじまじと見る

斉木の体から光が引いてくる

どうやら光が引いてくるにつれて斉木の意識もちゃんとしてくるようだ。

うつろだった目が徐々に生氣を取り戻してくる

そして斉木の体から光が完全に消えた

すると斉木が

「一体・・・俺はどうしちゃったんだ？・・・何が・・・起きたんだ」

と不思議そうに言った

「それはこつちの台詞だぜ・・・一体何が起きたんだよ・・・」  
名屋が言った

「俺はただ・・・皆を守りたいって・・・死にたくないって・・・ただ・・・そう思ってた・・・」

斉木がおどおどしながら言う

すると久杉が『パンパン』と手を鳴らしながら言った

「おお！！なんとという力だ・・・最弱と言えどシャイターの砲撃を防ぎきるとは！！みごと！！誠にもって見事！！よしお前ら！！テストは合格だ！！私の秘密を明かしてあげようではないか！！」  
僕らはきよとんとした。それはヒーストも同じだ

そしてヒーストが

「バ・・・バカ言うんじゃねえ！！俺はこいつらを倒したくてうずうずしているんだ！！何でお前にそんなこと決められなきゃならぬんだ！！」

と、叫んだ

すると久杉は

「うるさい！！立場をわきまえろ！！お前は俺より格下なんだ！！何度も同じ事を言わせるな！！それとも本気で潰されたいのか！！」  
と、ヒーストに怒声を浴びせた

ヒーストは『チッ』と言いながらも久杉の言うことを聞いた

そして久杉が「さて」と話しの続きをし始めた

「先ほどのヒーストの話で私の地位は分かっただろう!! 私のコードネームはバルキー、V<sup>ヒースト</sup>Eシャイターンだ。そして……」

何か久杉が言いかけたが僕はそれを遮って言った

「久杉さん!! なんで……なんでそつち側についたんだよ!!」  
皆もうんうんと僕に相槌を打つ

すると久杉は

「全く……津式は相変わらずだな……人の話を最後まで聞こうとしないその態度、良くないぞ」

と、僕をたしなめるように言った

でも僕はそんな久杉をピシヤリとはねつけた

「そんなことはどうだっていい!! 僕は『何でそつちの味方になつたんだ』と聞いたんだ!!」

しかし久杉は聞く耳を持たなかった

でも僕があまりにも

「どうしてだ、どうしてだ」と

しつこく聞くので久杉は

まったく……といいながら説明し始めた

「そうだな……『何でそつちの味方になつたんだ』というのは間違った表現だな。こつちの味方になつたのではない、『もともとこ

ちら側の人間だった』ただそれだけの話だ」

「だけど!! と僕が続けようとしたが、僕よりも先に加賀が口を開いた  
(カノンは加賀の横でさっきのヒーストの攻撃で死んだかと思い、

シヨツクのあまり気絶している)

「でも久杉さんは僕らを守ってくれたじゃないか!! いろんなことを教えてくれたし……僕が危ないときは助けてくれた……。第

一なんでそつちの味方なのに僕らと行動をともしていたんだよ!

!!」

(加賀は久杉と同じクラスだっただけあってなにか感慨深いものがあるのだろう)

でも久杉は

「さてさて・・・だから今それを話そうとしているんだろう。俺がお前らと行動をともしなくちゃいけないなくなったわけ、それを今から話してやる。だから黙って聞いてろ」  
と、受け流すように言うのだった

第2章 敵の要求

久杉の言う通りに僕らは黙って話しを聞くことにした  
すると久杉はよし！！と、話しを始めた

「加賀の言うとおり、俺がお前らの仲間になったことは実に不思議なことだろう。確かに、俺はお前らの仲間になる事なんて無かった。だがそれはお前らが周りの奴らのようにあっさり死んでくれたらの話だ。お前らは知らないようだから言っとくが、この『西中を襲う』と言う計画はかなり前から決まっていたんだ。その理由はお前らには言えないがいずれ分かるだろう」  
久杉がにやつと笑った

（どうやらその計画は僕らにとっていいことではないことらしい）  
そして久杉が続ける

「さつきも言ったがお前らが死んでくれれば何の支障もなかった。だがお前らの中には不思議な力を持ったやつがいた。俺らのようにそう・・・それは」

と言つてある人物を久杉が指差した。

久杉の指の先にいる人物・・・僕だ！！

「津式！！お前だ！！お前には人を治す才能・・・つまり医術関係、ケア系統の力がある！！お前も心当たりあるよなあ！！斉木を治した時、名屋を治した時、アレがそれだ！！しかもその力は未知数！！これからもその才能は伸び続けるだろう！！だから俺らはお前が邪魔だった、お前を見張り、変な動きをされないように気をつけた！！これがお前らと一緒にいた訳だ！！」

久杉が高らかに笑った  
すると草羅が

「ちょ……ちょっと待て……じゃあカノンのほかにつれてきた  
い人物つて……」

と疑問を投げかけた

すると久杉が笑いながら言った

「そう……津式さ!!」

そんな……と、僕は口を大きくあけた

そして久杉に向かって言った

「で……でもお前らなんか僕はついていけないぞ!!」

すると久杉が言った

「ああ……別にかまわない……もうお前なんか要らない……」

僕は意味が分からなくなった。皆も混乱しているようだ

そしてその時、久杉がさらに言った

「俺は気が変わったんだ……。津式……お前の力よりも……  
斉木の力のほうがよっぽどでかい!!そして強力!!津式の一人一  
人治していく能力に対して斉木の能力はその一帯、治したい、守り  
たいと思うものすべてを治すケア能力を持つてる!!」

そして久杉が身震いしたくなるようなおぞましい笑顔を浮かべなが  
ら言った

「斉木をわたせ」

僕らは数秒間黙りこくった。

そしてその沈黙を破ったのは斉木だった

「嫌だ!!俺はお前らの仲間にはならない!!」

と、覚悟を固めるように言った。

そつだそつだ!!と、皆も口々に言う

すると久杉は

「なら……カノン様の末路は見えたな」

と静かな声で言った

僕らははっとなり黙った

そして斉木が言った

「それは・・・一体どういうことだ!!」

ヒヒヒと久杉が笑って言った

「お前を勧誘するためだ。スコル様もこれくらいのことには許してくれるだろう。我らの大きな目的は3つある。その一つが別々になっ  
てしまったスコル様の力を元に戻すことだ。それはすなわちカノン  
様に受け継がれてしまった力を無理やり元に戻すと言うことになる。  
そのときは力の強いものの方に力が注がれ、力の弱いものには相当  
なダメージを負う事になると聞く。カノン様とスコル様ではどちら  
の力が強いかなんてもう歴然としているだろう。故にダメージを  
負う方も決まっている。そのときに負ったダメージを放っておけば  
間違いなくカノン様は死ぬ。残念ながらわれわれの仲間にもそういっ  
た治療能力を持った奴はいないのだよ。だから斉木がいないとカノ  
ンは死ぬと言うことだ」

斉木が愕然とする

それは僕らも同じだった

斉木は今ものすごく悩んでいるだろう

僕らをとればカノンは死ぬ。カノンを取れば僕らの身が危険に晒さ  
れる

こんなの、心の優しい斉木に決められるはずが無い

と、その時

ヒーストが耳につけていた無線機から音が聞こえた

僕らは何を言ってるか良く分からなかったがヒーストがその内容を  
バルキー  
久杉に告げた

「おいバルキー!! スコル様からの伝言だ。そろそろけりをつける  
だよ」

「ほう・・・そうか・・・ならば急がなくてはな」

と、久杉が言った

そして

「さあ!! やることは沢山ある、だが時間が無い。早く決断するん

だ斉木！！」

と、久杉がせかす

斉木はまだ悩んでいた

すると、久杉は

「たくつ！！じゃあ先にカノン様をいただくとするか」

と、いつて加賀とカノンのほうへ向かっていった

僕らは焦って止めに行った

だがかなうわけも無くヒョイヒョイとかわされていつてカノンを奪われてしまった

カノンは完全に敵の手に落ちたのだ・・・

### 第3章 斉木の選択

斉木が悩み、苦しんでいる中

僕らはただただ見守っていることしか出来なかった

斉木は本当に苦しそうだ

どちらかを選ばなくてはならないという圧迫感

どっちを選んでも結局どちらかは死んでしまう、つまり人の命を委

ねられた責任感

そんな感情が渦巻いているのだろう

そんなときに久杉が言った

「さあ！！早く決断しろ！！いつまでも悩んでいるのではない！！

あと十秒だ・・・後十秒で決断するんだ！！」

その言葉を放った後、久杉は「10、9、8・・・」とカウントを始めた

僕らはまた斉木に目をやった

斉木は頭を抱え、必死に答えを見つけようとしている

「4、3」久杉のカウントが聞こえてくる

斉木がついにうなり出してしまった

だが久杉はそんなことお構い無しに



「2、1」

と、カウントを続けたそして・・・

「0」

久杉が言った

と、その時！！

斉木が「ウオオオオオオ」と大声で叫んだ！！

皆がビクツと震える

そして斉木が、顔に涙を浮かべ自ら下した決断を僕らに告げた

「分かったよ久杉、お前らに・・・着いて行く・・・」

誰も斉木を止めなかった

と、言うより止められなかった、攻めることすら出来なかった

斉木が苦しみを乗り越えた末に下した決断だ。

いまここで僕らがまた何か言ったら斉木の決断が揺れてまた苦しませることになりかねない

すると久杉が「フフ」と笑って言った

「利口だな。流石は斉木だ、世の中の渡り方つてのをちゃんと理解してる。まあお前のことだからそんなこと考えないでただ純粋にこのカノンを救いたかっただけだろうがな」

そんな久杉に斉木は言った

「うるさい、早く連れて行け、事は早くても何の問題は無いんだろ？」

「それはそうだ、とつとと行こう。おいヒースト！！移動の準備を！！」

久杉が言った

僕には斉木が早く行きたがってる訳がなんとなく掴めた

おそらく僕らのいるところから離れたいのだろう

理由なんてものもすぐ分かった、自分が見捨てると決めた友の姿など見ても苦しくなるだけだ。お互いに・・・

そんな考えを頭の中で浮かべている時

あの「ジジジジ」という音がした

そして敵の後ろをくつついて今まで守ってきた仲間と、頼りにしていた仲間、一緒にいてとても楽しかった仲間が穴の中へ入っていった。それらは僕が一番失いたくなかったもの、なによりも一番大切なものとの別れだった。

#### 第4章 開放

斉木たちの姿が見えなくなった後も僕らは動けなかった

あまりに突然の事にみんな悲しみを隠せずにいた

なにせ一気に3人も友を失ったのだ、悲しむのも無理は無い

空気がとても重く、冷たく感じる

未来がもう無いかのようだ

僕は自分がとつてもちっぽけに思えた

斉木をとめる事のできなかった無力感、久杉とヒーストに手も足も出なかった不甲斐なさ、守ると決めたものも守れずにただ見てることしか出来なかった自分への怒り

どれをとつても情けなく酷くちっぽけとしか言いようが無い

みんながドヨンとしている中

最初に口を開いたのは名屋だった

「ちくしょう……なんで……なんでこんなことに……。田辺だけじゃなく久杉と斉木とカノンまで……」

悔しそうに口をかみ締めながら言った

「ほんとだよ……。なんでこう……。僕達はみんながばらばらになるんだろう」

これは加賀だ

僕も僕で悲しみに囚われていた

そんな時、草羅がこういった

「みんな……。元気だそうよ……。いくら悲しんだってあいつらはもう敵の手の内にあるんだ、過去を悲しんで生きる希望をなくすんじゃない、これからのことを……。みんなを連れ戻すように動こう

よ!!!」

僕はハツとした

前に久杉に言われたことがある

まだこんな事起きてないときに・・・

そうか、そうだったのか、やっと今までの謎が解けた

何で久杉があんな事言ったのかあのころは見当もつかなかったが今なら分かる

久杉はやつらの仲間だからこうなることは知っていた

だからいったんだ「復讐に生きるな、前を見る」と

でもなんでそんな事いったのだろう、僕らに忠告したのか？

だったら今からでもまだ久杉を仲間に戻すことが出来るかもしれない!!!

そう考えると俄然元気が出てきた

ふと、僕は自分に力が無いことを思い出した

そして何を考えるでもなくただこう口にした

「強くなりたい」

これは今、心の底から思うことだ

それを聞いた皆も口々にこういった

「強くなりたい、なってみせる」

みんなこれが一番望んでいることなのだろう

全員の言葉がしっかりしてる

と、そのとき!!!僕らの体から溢れんばかりの光が出てきた!!!

その光はこの辺一体を取り囲む

だめだ!!!光が強すぎて目を開けてられない!!!意識が・・・意識がどんどん遠のいてく!!!

.....

数分間静かな時が流れた

そしてゆっくりと目を開けた。

まだ光はやんでいないが目が開けられなくなるほどではない  
気持ちいい光だ。

僕は僕自身の体を見た  
するとなんと！！僕の手から足から腹から・・・ありとあらゆる体  
の部位から炎が出ているではないか！！不思議なことに火が出てい  
るのにちつとも熱くない。

ために隣の壁を触ってみた、するとみるみる壁が溶けていくでは  
ないか！！

僕は慌てて壁から手を離れた。そしてふと周りを見る  
すると僕以外のみんなの体にも変化が起きていた！！

加賀は腕と足の筋力が並大抵のものではなく膨らんでいる！！  
草薙は風みたいなものに取り囲まれていて髪の毛が摩なひいている

名屋は体そのものの変化は無いものの名屋の足元の床が凹んでいた  
り、周りの水滴がまるで雨のように降っていたりとそれぞれおかし  
なことが起きていた。

そう思っていると、ふと光がしぼんでいった

それと同時に僕達の変化も治まっていく

そして完全に光が消えた

第5章 己の力

「いつたい・・・何が起きたんだ？」

名屋が言った

加賀も

「今のは一体・・・」

と口にした

僕も何が起きたのか訳が分からずあたふたしていた  
すると草薙が目を丸くして言った

「い・・・今のは・・・アビリティーズキャンセルか？」

「なんだよ・・・そのアビ・・・何とかって」

名屋が聞いた

「アビリティーズキャンセル、直訳で『才能の解除』って意味だ」  
草羅が言った

「才能の・・・解除？ いったいなんなの？ それ・・・」  
僕が草羅に聞いた

すると草羅は分かりやすく説明してくれた

「アビリティーズキャンセルは・・・それぞれの人物が持つ力が解放されたときに起こる現象なんだ。人間は普通体の奥底に1〜2つくらい未知なる能力を持っている。その力は信念、心の揺らぎ、強い思いなんかに対応して発動できるようになるんだけど、その力がどういった物なのかを見極められるように最初の時のみ自分の意志でなく力そのものが最大値の力が発動するんだ。その現象をアビリティーズキャンセルというんだ」

草羅は言葉を選んで僕らに分かりやすく伝えようとしたつもりなのだろうが

僕らには何のことだか良く分からなかった  
でもなんとなくは掴めた

ようは僕らにも不思議な力が使えるようになって、その力がどういうものなのか分からせるといふ事なのだろう  
するとまたしても名屋が言った

「強い思いに対応するってことは・・・今の『強くなりたい』って感情に対応したってことか？」

草羅はうんと頷く

「じゃあ僕らは強くなれたのか？」

名屋が顔を輝かせながら言った

草羅も笑顔でうんと頷いた

そしてさらに名屋が顔を輝かせていった

「じゃああいつらとも互角に戦えるのか？」

ところが草羅は難しい顔をしてこう言った

「それがそうとも限らないんだよ・・・アビリティーズキャンセルは一

時的なものでそれも一回しか起きない。アビリティーキャンセルが起きても力を自由に自分の意のままに操るのは普通1年はかかる今の僕達じゃ修行しようにも出来ないから難しいな。」  
名屋がガクツとうなだれる

ところが草羅はでも・・・と続けて言った

「でも今までより希望が出てきたのは確かだ。戦闘中に何かのきっかけで力が使えるようになるかもしれないし、それに人より長けた才能があったり奇跡が起きれば力を使いこなすのに1時間もかからないって言う噂もある」

名屋は顔に輝きを取り戻した

そしてこういった

「じゃあもしかしたら奴らよりも強くなれるかもしれないのか？」

「それはもちろんさ!!」

草羅が調子のいい声で言った

ここで今まで黙りこくっていた加賀が口を開いた

「アビリティーキャンセルって言うのが自分が持つてる力がどういうものなのか見極めるための現象ってことは僕らの力がなんなのか分かったんだろ？一体僕らの力は何の力を持っているんだ？」

僕もそれは言おうと思ってた

だって自分も不思議な力が増えて、しかも奴らに勝る力かもしれないなんてうずうずするではないか!!

「今の現象を見る限り・・・津式は『熱量増加』だと思っ・・・、これは自分が指定した体の各部位の熱を最大限まで引き上げることなんだ。そして熱量がMAXになったときには体から炎が出せる。お前に起きたアビリティーキャンセルを見るとソコまでの増加が可能みたいだな」

草羅が僕の力について説明した

『熱量増加』・・・炎人間・・・すごい!!!!すごい!!!!僕にこんな才能があったなんて!! 僕がニヤニヤしながら笑う中  
草羅は加賀と名屋の力について説明した

「加賀はおそらく『肉体強化』の力だ。これも自分の指定した体の各部位に変化が起きるタイプで、指定したところの筋力が半端なく増幅させることが出来る。この力のMAX値は自分だけでなく味方の筋力も増幅させられると言うことなんだけど、今のアビリティークンセルを見るだけじゃそれが出来るかどうかは良く分からない。次に名屋だがお前の力はかなりシビアで使いにくい力だと思う。お前の力は『物質の変形』、これは発動中に自分の体に物が触れるとその物の形状を変えてしまうものなんだ。この力をMAX値まで上げると形状だけでなく物質そのものを消滅させることが可能となるんだ。しかしこの力はずっとは発動してられないんだ、ずっと周りのものを変形し続けてしまつては世界を破壊することに繋がつてしまふからな。そのため発動のON OFFを常に制御しなくてはならなく使いこなすのには相当な鍛錬が必要だろう」

加賀は顔を輝かせて喜んでいるが名屋はあまりパツとしない顔つきだった

すると加賀が草羅に質問した

「じゃあお前じしんの力はなんなんだ？」

「俺の力はおそらく『気流の誘導』だろう。この力は周りの気流（空気）を思いのままに動かすかとが出来るようになる力で、風を起こしたり、空気中の水滴を風の力でまとめて雨を降らせることなんかも出来るんだ。この力に基本MAX値は無いんだけどしいて言うなら力の放出を絶えず行えば竜巻や台風を起こせると言った事かな？」

草羅が答える

僕らは自分自身の力について深く考え始めた

今までは敵に不思議な力があつてこつちは何も太刀打ちできるものが無い

と言う状況だったが、今は違う。

草羅は『力を使いこなすのは難しい』と言うがそれはあまり深く考えないでいた

頭の中でそんな考えを張り巡らせているとき、加賀が素朴な疑問を草羅に言った

「前々から気になってたんだけど・・・草羅は何でそんなにこんなことに詳しいの？」

この質問はもつともだ

なぜ草羅がこの状況についてこんなにも詳しいのかはとても気になった

今までこの状況を説明する立場にいた久杉が敵だったというのだからなおさらだ

この質問を受けた草羅は

「そのことについて、僕も皆に話そうと思ってたところさ。いいよ、聞かせてあげる。まずは僕自身の話をしよう」

## 第6章 新たな刺客

加賀の質問を受けた草羅は

この状況をなぜこんなに理解しているのか、なぜこんないろいろなことを知っているのか話し始めた。

「実は僕はもともとこの空間の人間じゃないんだ。」

みんながえええと動揺する

「僕はこの空間じゃないところの生まれで4〜5年向こうで暮らしてたんだ。ソコの空間はこと違って戦いで勢力や地位、富を手にする時代だったんだ。ついでに言っとけばグランツさんとスコルも俺と同じ空間で生まれたって話した。」

草羅とカノンと同じ空間出身・・・訳が分からなくなってくる

「その空間に生まれて育ったものは出来心つくころには戦いを教えられると言う精度があった。だから嫌でも戦闘能力はつく、そしてさらに僕達の空間でも今言った「アビリティーカンセル」が良く起きるんだ。で、今僕達がいるこの空間はお前らが育ってきた空間とは別の世界だってことは知ってるよな？実はここはスコルが作った



空間なんだ。そしてこの空間は僕が生まれた空間に良く似てる、おそらく僕達の空間がモチーフになっているんだろう、アビリティーカンセルが起きたのがその証拠だ。だからこの状況や仕組み、起こる現象が分かるのさ」

そうか・・・

草羅は僕達の空間出身じゃないのか・・・

僕らが納得している中、一人だけふに落ちなさそうな顔をした人物がいた、名屋だ！！

どうしたの？と僕が聞くと名屋は草羅にこう言った

「じゃあ・・・小学校らへんときはお前はいなかったことになる・

・お前・・・まえに田辺と一緒にの小学って言ってなかったか？」

「待て待て焦るなよ・・・今するから・・・」

草羅が名屋を落ち着かせるように言った

そして名屋の質問に答える

「それはだな・・・僕のいた空間は『君たちのいる空間』の存在を知っていて『真の世界』と呼んでいたんだ。さっきも言ったとおり僕のいた空間は絶えず争いがあったからその『真の世界』はまさに樂園そのものだった。そして『真の世界』に行く技術が僕の空間にはあった。それが「空間移動」だ。でも突然空間移動してしまうと向こうで矛盾が生じてしまう、だから僕らは政府の許可を得て空間移動と同時に『タイムスリップ』もするんだ。でもタイムスリップはいつでも出来るわけじゃなくて、僕の空間からは100年に一度、10人がこの空間に来れるんだ。」

タイムスリップ・・・そんなこといきなり言われても実感がわかない。

でもまあなんとなくなら想像がつく

おそらくその10人のうちにカノンやスコルがいて、スコルがこの空間で問題を起こし、それがたまたま草羅のいる学校と一致したというところか・・・

偶然に偶然が重なりすぎているような気もするが

そこはあまり気にしないでおう、もう友を疑うのはまっぴらだ！！  
草羅の話しを聞き終えた後、僕は少しの間黙っていた  
久杉たちのことはモチロンのこと

草羅のことや、これからどうなるのか、何をすればいいのか  
そんなことを考えていたからだ。

ひと時の静かな時間が流れる

でもこの状況においてそんな静かな時間が続くわけも無かった  
なんと、また僕らの後ろに黒い穴が現れたのだ。

第五卷　目覚め　END

## 第五卷 〽目覚め〽（後書き）

〽編集者後書き〽

今回の作品は、すこし急展開すぎたかもしれませんが仲間が一気に減ってしまいました。

今後、久杉たちとの関係がどうなるかなどもお楽しみください。

次回からは新しい人物が出てくる予定です！

## 第六卷 目的

（序章）

頭が・・・こんがらがってくる

というか・・・訳が分からない・・・

なんで・・・

なんでシャイターンが？

何でシャイターン同士が戦ってるんだ？

意味が・・・分からない・・・

第1章 同士討ち

僕らが考えに耽っている中

突然アノ黒い穴が現れた！！

「ジジジ」という耳障りな音が辺りに響き渡る

そして穴が完全に開いた！！

と、同時にすさまじい勢いで黒い？物体（速すぎて色も分からない）が飛び出してきた

スピードが速すぎて目でも追いきれなかった

だが前に戦ったオウディウスのスピードの比じゃないことは確かだ！！

そしてそのすさまじい勢いで出てきたものが

後ろのコンクリートの壁に派手な音を立ててぶつかった！！

コンクリートの壁が砕けて砂煙（いや、コンクリ煙か？）がたった数秒、数分・・・時間が止まったような気がした

そして徐々に煙が晴れてきて、黒い穴から出てきたものの正体がハッキリしてきた

出てきたものは赤いマントを羽織っていて、毒々しいまでの紫の肌に髪の毛は燃えるような赤い色をしている

絵に描いたモンスターののような色合いだが、赤いマントを羽織っていることからおそらく・・・シャイターンだ！！

だがそのシャイターンは僕らには目もくれず一心に壁に手を当てている

さらに煙が晴れてきた

と、僕らは信じがたい光景を目にした

なんとシャイターンは壁に手を当てていたのではなく、人の首を手で抑えつけていたのだ！！

そして煙が完全になくなるとその押さえつけられている人物もハッキリ見えてきた。

髪は黒と落ち着いていて格好も僕らと同じくらい、服装もそんな目立つ服は着ていない。顔に仮面をしているものの

全体としては僕らとさほど外見に違いは無い

しかし、その人物はあるものを身につけていた

シャイターン独特のあの赤いマントだ！！

おそらくこの人物もシャイターンなのだろう

しかし、なぜシャイターン同士が戦っているんだ？

見るからして冗談やスキンシップではないことは確かだ

少なくとも紫肌のシャイターンは本気でもう一方のシャイターンを殺めようとしている

紫肌のシャイターンはさらに手を押し当てる

手を押し当てられているほうのシャイターンはバタバタともがいている

足や手をばたつかせ、手を振り払おうとやっきになっている

見ているこつちが苦しくなってくるほどに紫肌のシャイターンが手を強くを押し当てた

黒髪のシャイターンが本当に苦しそうにもがく

と、その時

黒髪のシャイターンが、持っていたコンクリートの破片を紫肌のシャイターンに投げつけた！！

そんなことしても、ただのコンクリートの破片なんだから状況は変わらないだろうと僕は思った  
しかし!!

以外にも紫肌のシャイターンはダメージを食らったらしく手を緩めたその隙を見逃さず、黒髪のシャイターンが手をどけて紫肌のシャイターンに頭突きした!!

すると紫肌のシャイターンはうつとうめいて床に膝を付いた  
そしてさらに黒髪のシャイターンがかかと落しを食らわせようとする  
しかし紫肌のシャイターンはちつと舌打ちして一瞬で空間の穴を開けその中へと飛び込んでいった

## 第2章 敵の三番手

黒髪のシャイターンのかかと落しは外れたものの  
床を粉々に砕いてしまった  
僕らはさつと身構えた

(さっきの敵がいなくなった今、おそらくこのシャイターンは僕らに敵の目を向けるだろう)

あんなかかと落しをくらっては生き延びられる訳が無い  
かかと落しで死ぬなんてまっぴらゴメンだ!!

黒髪のシャイターンは床に食い込んだ足を引き抜き、周りを見渡した  
そして僕らと目が合った

ああ・・・気づかれてしまった・・・また戦いに・・・また皆が傷つくことに・・・  
と、僕は思った

しかし黒髪のシャイターンは目が合っても数秒は何もせず、ただただじつとしていた

そして数秒がたった後、思いもよらぬ言葉を口にした

「津式？加賀？草羅に名屋？」

名前を呼ばれた僕らは目を丸くして動きを止めた

名屋が

「おまえ・・・だれだ？」

と言った

すると黒髪のシャイターンが

「おい・・・俺だよ・・・カオ・・・いや、荒口・・・荒口佑介だ・・・」

荒口佑介・・・どこかで聞いたことのある名だ・・・確か学校で・・・

と、僕は彼の存在を思い出しはつとなった

「荒口・・・荒口佑介か！！2年4組の！！」

僕は言った

「その通りだよ！！」

荒口はなんだか楽しそうだ

「荒口！！」

そう言って

加賀、草羅、名屋が荒口のほうへと歩み寄っていき4人で抱き合った

(今気づいたのだがこの5人の中でサッカー部でないのは僕だけだ。

加賀、草羅、名屋、荒口は同じ部活なので会えてとても嬉しいのだから)

思い思いに4人が抱き合ったり握手したり雑談しているとき

僕は一人ぼっちだったので少し寂しかったが我慢した。

4人の喜びに水をさす気はさらさら無いし、そんなのかわいいそすぎる。

4人の雑談やらなんやらが一段落したのを見計らい

僕はおずおずと切り出した

「本題に入るけど・・・なあ荒口・・・何でお前はシャイターンの象徴であるその赤いマントを身につけているんだ？」

僕の質問に荒口は

「そんなの・・・シャイターンだからに決まってるだろ」

と、それが当たり前かのように言った

すると名屋が

「シャ・・・シャイターンって・・・お前・・・そりゃあ一体・・・

と、口をあんぐりとあけていった

「一体ってそりゃあ・・・」

荒口が言いかけたその時！！

後ろで「バリーン」とガラスの割れる音がした

振り返ってみると

血に飢えた獣がなんと7体も血走った目でこちらを見据えていた

僕らはスツと武器を構えた

「ありゃあ・・・オウディウスか？それともスローターか？」

と、草羅がつぶやいた

すると獣が不気味に笑い言葉を口にした

「あれかあ？ファンデ様が言ってた『獲物』ってのは」

すると別の獣が

「ああ・・・間違いないのお。アイツには見覚えがあるぞよ。あの

草羅ってヤツはよお」

と、その獣は調子はずれな特徴な口調で言った

（あいつらは草羅を知っているのか？）

僕は疑問に思い草羅に聞いてみた

すると草羅から思いもよらない答えが返ってきた

「アイツは・・・前に俺が倒した、睡眠ガスの力を持ったオウディ

ウスだ」

そんなバカな！！

と、僕らは仰天した

「そんなの嘘だろ？」

と、名屋が草羅に言った

しかし草羅は

「いいや！！間違いない！！あの独特の喋り方は・・・」

そんな・・・



僕は呆然と立ち尽くした  
すると加賀が

「まさかそんなことって・・・第一、オウディウスって知能の関係で言葉喋れないんじゃないかなかったっけ？」  
と、言った

しかし荒口は「いいや・・・」と否定した  
「あれは間違いなくオウディウスだ。おそらく・・・スコルが蘇らせたんだろっ」

### 第3章 複数の敵

「蘇らせた・・・だと？」

名屋が信じられないといった様子で言った

「そんな・・・蘇らせるなんて・・・もう神の領域だろ」  
加賀も言った

すると荒口は

「ああ・・・神だ・・・アイツは・・・神になったんだ」  
と、言った

(どうやら元シャイターンだったらしい荒口も、スコルがこんな力を取得していたことは知らなかったらしい)

と、そんな時、オウディウスの一体が

「なにぐだぐだ言ってるんだ！！お前から来ないんだったらこつちから行くぞ！！」

と、怒声を放った

「どうやら俺の状況とその他諸々を話すのは少し後になるみたいだな」

荒口が言った。そしてさらに

「相手は7体、こつちは俺を含めて5人！！誰か2人が二体受け持つ計算だな。とりあえずこの戦いはどれだけ短い時間の中で敵を倒せるかにかかっている。気い引き締めていけえ！！」

と、僕らを後押しした

しかし僕は

「お前も戦うのかよ・・・荒口・・・」

と、荒口に睨みをきかせて言った

「もちろんだ」

荒口が答える

僕はさらに睨みつけて

「信用できんのか？」

と、言った

荒口は少し驚きながらもスツと真面目な顔になり

「ああ」

と、答えた

僕はとりあえずその言葉を信じることにした

そして拳を握り締め、おたけびを上げながらオウディウスの方へと  
敵意むき出しで向かって行った。

いよいよ戦闘開始だ！！

第六卷 目的

END

## 第六卷 〱 目的〱 (後書き)

少し遅いですが・・・  
あけましておめでとございます。今年もよろしくお願いいたします。

皆さま、このたびも「ネバービリーブ」を読んいただきありがとうございます。

ところで、この本を愛読してくれている友達から「長いと読み終わるまでに飽きてしまう」という意見が出ましたので、誠に勝手ながらこれからは3章～5章までにとどめて書き、巻そのものを多くして書いていきますのでご了承ください。これからもなにとぞよろしくお願いいたします。

第七卷 　　〜底知れぬ力（前編）〜

（序章）

スコルはいつたい

どこまですごい力を持っているんだ？

生物その物の意志や姿を改造できるなんて・・・

なぜヤツはここまでの力を・・・

どうやって手に入れた？

どうやって使いこなしている・・・

第1章　　7体のオウディウス

僕らは7対のオウディウスに勇ましく突っ込んで行った

一番に飛び込んでいった僕はとりあえず

すぐ目の前にいるオウディウスと戦闘を開始した

（良く見るとこいつはあの『高速移動』の力を持ったオウディウスだった）

僕は不思議に思い戦いながらオウディウスに向かって叫んだ

「何でお前がここにいるんだ！！お前は草羅が倒したはずだろう！！」

するとオウディウスはあざ笑うように答えた

「ハッ！！そんなのスコル様に蘇らせてもらったに決まっているだろう！！」

そう答えたオウディウスに僕は

「蘇らせてもらったただあ？そんなことが出来るのか？スコルは！！」と、さらに質問した

するとオウディウスはものすごい形相で僕に怒鳴った

「スコルだとお！！あのお方を誰と心得ているかあ！！あの方は偉大なお方だ！！それを呼び捨てにするなど・・・断じて許されるこ

とではないぞお！！」

その言葉を最後に僕らの戦いに会話は無くなった

これからが本番だ！！

オウディウスがものすごいおたけびを上げた

と、思うと高速移動の力を使い、ものすごいスピードで僕の周りぐるぐる回りだした！！

僕はそのスピードについていけず後ろから攻撃をしてきたオウディウスに気づけず反応が遅れた

でもこの程度でやられる僕ではない！！

アレから僕も成長してきたのだ！！

僕は本能的にサツと右にずれた

そのおかげで重症は負わずにすんだ。

しかし軽く足を痛めてしまい少し動きが鈍った

オウディウスはまさかかわされるとは思っていなかったらしく、まえにつんのめった

僕はそのチャンスを見逃さなかった

僕はそれを見るや否やオウディウスの方へと一気に近づいていき、えいやと前にナイフを突き出した！！

しかしオウディウスもそこまで簡単にやられてくれる奴じゃなかったなんとオウディウスは後ろから近づいてきた僕に向かい

鋭い爪の生えた手で串刺しにしようとしてきたのだ！！

僕は咄嗟にナイフで防御しようとした

しかし防ぎきれぬわけも無くナイフは真っ二つになってオウディウスの爪がこちらに向かってきた！！

僕はしゃがみこんだ

（こうすれば背中に怪我を負うだけで致命傷となる腹部の怪我は避けられる。もつとも背中への傷は重症となるだろうが・・・）

オウディウスの手がぐんぐんこちらに向かってくる

と、横から光線のようなものが飛んできてその手に直撃した！！  
オウディウスが

「ギヤアア」

と、絶叫する

光線が飛んできた方を見ると別のオウディウスがいた  
姿はまるでケンタウロスだ！！鬣が赤く、蹄は紫、体全体としては  
黒っぽい色をしている。

おそらくしゃがみ込んだ僕を見てチャンスだとおもい攻撃してきた  
のだろう

しかしそれは思い違い、絶好のチャンスを潰してしまったのだ！！  
高速移動の力を持ったオウディウスはまだもがいていた  
そんなに効くものなのだろうか？

と、おもってオウディウスのほうを見たら思いがけない光景を目に  
した

なんとオウディウスの手が光線の当たった手首から上が無くなって  
いたのだ！！

僕は心底震え上がった

今にも頭がおかしくなりそうな位だ

あの光線を自分が食らっていたらと思うと・・・

僕は思わずブルブルっと身震いした

片手のオウディウスが光線を当てたオウディウスを怒鳴った

「なにしてやがる！！ふざけんじゃねえ！！俺の手を！！てめえ殺  
すぞ！！」

しかし光線を当てたオウディウスは何処吹く風でこういった

「突然出てきたお前が悪いんだろう」

すると片手のオウディウスは高速移動で光線を当てたオウディウス  
の後ろの方へと行き、残った手の爪を首に押し当てた。

そしておぞましい声でこう言う

「死にてえか？」

その次の瞬間！！

なんと突然片手のオウディウスがドシンとゆかに倒れたではないか  
！！

良く見ると今度は足がなくなっている

僕はギョツとして目を丸くした

僕が驚きを隠せずに突っ立っているとき、横から荒口の声が出た

「津式！！気をつける！！そいつはオウデイウスじゃない！！<sup>セツデ</sup>VI

<sup>イモ</sup>Iシャイターン、バイスト・・・」

突然荒口の顔が曇った

「『消滅』の力を持ったヤツだ・・・」

第2章（vsバイスト）

『消滅』の力・・・

僕はさらに恐怖に顔を歪めた

でも・・・

僕はひとつ気になることがあったので荒口に質問した

「でもあれはシャイターンじゃないって・・・蘇ったオウデイウスなんだろう？」

すると荒口は

「ああ・・・あの中にいたヤツはな・・・よくこの戦況を見てみな」

僕は言われたとおりに周りを見てみた

名屋が1対のオウデイウスと戦っている。

力は互角といったところで一進一退の攻防戦が続いている。

加賀はすでに一匹オウデイウスを倒したようだ。

今はかなりの巨体のオウデイウスと戦っている。草羅も1体倒したようでは今は2対目と戦っている。

いや・・・後ろにもう1匹いる！！あの睡眠ガスを吐くというオウデイウスだ！！2対1で戦っているのか！？

荒口も荒口で1匹のオウデイウスと互角にやり合っている。

あとは僕の隣で横たわっているオウデイウスとシャイターンだと言われたヤツ・・・。

ん？

1、2、3、4、5・・・なんと8体もの敵がいるではないか！！  
確か最初は7体だったはず、なのに今は8体いる  
どういうことだ？

気づきかけている僕を見た荒口が言った

「おそらくそいつは戦ってる最中にここに来たんだろっ」

そうか・・・そういうことか

僕は頭の中でことごとく合致してなんだか気持ちよくなった  
でも今はそんなこと言ってる場合ではない！！

するとバイストが口を開いた

「まったく・・・シャイターンにオウディウスがかなうわけ無いだ  
ろっ」

やれやれといった表情を浮かばせて僕に視線を移す

「お前も、こうなりたいのか？」

バイストが僕に問いかけた

僕は「いいや」と、首を振る

荒口がこちらを見た

「そいつの相手は俺がやってもいい、シャイターンとしては俺の方  
がランクが上だ！！」

(荒口はすでにさつき戦っていた敵を倒していた)

その言葉を聞いたとたんバイストの顔が変わった

怒りに満ちているような顔だ

そしてこう言う

「あまりふざけているんじゃないぞ！！カオス(どうやら荒口のコー  
ドネームのようだ)！！確かに俺はお前よりランクは下だがお前  
に力で劣っているとは思わねえ！！第一、お前はかなり前からいた  
シャイターン、プレシャイターンだから残されただけだろう！！そ  
れにラストフォートレスということもあるしなあ！！それさえなけ  
れば俺の方がランクは上だったはずだ！！」

プレシャイターン？ラストフォートレス？

意味の分からない言葉の羅列に僕は頭がこんがらがってきた



でも間違いないく荒口の痛いところを突いてきたのだろう

荒口の表情が曇っている

そして低くうなるように僕に声をかけた

「なあ津式・・・、あいつ・・・俺にやらせてくれないか？」

僕はまだ1度もまともに戦っていない

皆に遅れをとるのだけは絶対にいやだ！！

なので僕は荒口の言うことを否定することにした

「いやだ！！僕だけまだ戦ってないんだ！！アレは僕の敵だ！！」

しかし、その言葉は荒口にピシヤリと言いつ返された

「バカ！！そんな軽い気持ちでシャイターンを相手にするんじゃない！！アイツはV E I E シャイターンなんだ。お前らが戦ってきたノ<sup>セッティモ</sup>とは比べ物にならないほど強い！！シャイターンのランクの1の差はとてつもなくデカイ！！お前じゃ無理だ！！」

そう言われても僕は納得がいかない

「じゃあ2人で戦うのは？それなら・・・」

言い終わる前に相手が攻撃してきた

僕は気配にも気づかず絶好の的となっていた

「ハハハ！！1体はもらったあああ！！」

バリストが言った

チィ！！と、荒口が瞬時に前に出で手の爪をよきによきと長く伸ばした！！

そしてバリストが打ってきた光線をはじき返した

僕は呆気にとられ目をパチクリさせた

荒口の爪はボロボロになっていた

そんな僕を見かねた荒口が僕に怒声を浴びせた

「なにやってるんだ！！2人で戦うだと？そんなの足手まといになるだけだ！！さっさとここからどけえ！！邪魔なんだよ！！」

僕は『足手まとい』ときいてとても悲しい気分になった

おそらく僕の目が潤目になっていたのだろう

荒口がため息をついて僕を離れたところまで運んでくれた

そして

「ここなら大丈夫・・・絶対離れるなよ」と、言った

周りの皆は共戦して他のオウディウスを全部倒していた  
どうやら皆個々の能力を使ったらしく疲れきっている

そして近くにいて僕と荒口のやり取りを聞いていた加賀がこう言った  
「まあ・・・黙ってみてよう・・・今の僕達じゃ・・・本当に足手  
まといになるだけさ・・・」

僕はまだ自分だけ戦いに貢献できていないことにあきらめがついて  
いなかったが

仕方なく加賀の隣にしゃがみ込み、戦いを見守ることにした

### 第3章 観戦

先手を取ったのはバリストだった

消滅のあの光線を出す

それを見事にかわした荒口は一気にバリストの懐目指して突進した  
しかしバリストもそう甘くない

2本の前足を高々と上げ、荒口を踏み潰そうとする

しかし荒口はそれももの見事に交わし、後ろ足に攻撃を仕掛けた  
持っていたナイフで切りつけたのだ！！

しかしバリストは咄嗟に後ろ足で地面をけって宙にジャンプした  
しかしそれを予測したかのように荒口はすぐさま上にナイフを突き  
出した

ナイフはバリストの右後ろ足にヒットした

しかしそこまで深手を負わせることは出来なかった

バリストはすぐさま体勢を直して少し荒口と距離をとった

沈黙が続く・・・

ピリピリと辺りの空気が張り詰めて緊張感がピークとなってくる

2人は半歩ずつ右回りに回りながら

互いに威嚇したり隙を見つけるべく集中力を極限まで高めたりしていた

まさにプロの戦いだ！！

その間は気を抜けばこっちが緊張感で気絶しそうなくらいで戦いから目をはずす事が出来なかった。

もちろん喋ることも事も・・・

そんな空気が一変したのは荒口が決死の覚悟でバリストに突っ込んで行ったときだ！！

バリストはそれを真っ向から受けると決めたのか

人間の部分の上半身をかがめて日本刀のように長い武器を両手に持ちその切っ先荒口に向けて突進した

僕はてつきり2人が正面衝突して勝負が決まるのかと思ったしかしなんと！！

荒口は突然バリストに向けていたナイフを逆向きに持ち

後ろを向いてナイフを持った手に力をこめているではないか！！まるで何かを正面から串刺しにするかのように・・・

僕は「荒口！！」と思わず叫んでしまった

そんなことをしては正面からくるバリストにやられてしまうではないか！！

僕はバリストのほうを見た

しかしそこにはバリストの姿は無かった

何が起きたのか訳が分からなくなった僕はとりあえず荒口を見たすると！！

荒口の後ろから空間移動したバリストが出てきたではないか！！

荒口はニヤツと笑って渾身の一撃をバリストに食らわせた

なんと身をかがめて攻撃しようとするバリストの頭を貫いたのだ！！バリストの頭から大量の血が出てくる

目を覆いたくなるような光景だ！！

血を噴出したままバリストはその場にドサツと倒れた

そして自身の返り血で真っ赤に染まった荒口をひたと見据えた

それにしてもなぜ荒口は後ろから来ると分かったのだろうか？  
それも1度だけではない

バリストがジャンプしたときも踏み潰そうとしたときも  
それがくると分かっていたかのようにかわしてみせた

荒口もシャイターンと言うのだから戦いは五万としてきただろう  
その戦いで培った経験なのか？

それとも何かの能力で・・・

そんなことを僕が考えているとき

「ギヤアアアア」

という荒口の悲痛な叫びが聞こえてきた

何事かと思い荒口に目をやると荒口の体のところどころが半透明に  
なり『消滅』しかけていた！！

そして

「フフフフ」

と、バリストの笑い声が聞こえてきた

まさかと思い僕はバリストが倒れているはずの場所を見た  
するとそこにはバリストが無傷の姿で立っていた！！

あまりのことに僕は

「まさか・・・」

と、絶句した

そしてバリストが言った

「掛かったな・・・テイルツォ イェイさんよお！！」

第七巻 底知れぬ力 (前編)

END

第七卷 〱底知れぬ力（前編）〱（後書き）

いつもご愛読いただきありがとうございます。

前話で、一巻の文字数を少なくするとは言ったのですが、それだと最初のほうと狂いが出てきてしまうようなこともあるので、『前編』や『後編』をつけることにしました。もし見にくくなったらコメントください。

さて、前回出てきたカオスこと荒口ですが、さっそくピンチに陥ってしまいました！荒口の運命は！

次回もご期待ください。

第七巻 〱底知れぬ力（後編）〱

〱序章〱

スコルの能力はソコまで・・・

もしかしたら勝てないんじゃない・・・

皆をおかしくした理由

『思い込み』の力・・・

スコルの能力の大きさを

あらためて感じた・・・

第1章 〱力の使い方〱

「ギヤアアア」

断末魔のような叫び声を聞いた僕はサツと荒口の方を見た

するとソコには倒れてもがき苦しんでいる荒口とそれを笑いながら

見下ろすバイストの姿があった！！

しかも荒口のやられ方が普通じゃない

なんとバイストの返り血を浴びた荒口の体が半透明になり消えかけ

ているではないか！！

そしてバイストが言った

「掛かったな！！テイルツォIEEEさんよお！！」

すると荒口が苦しそうな声で言った

「一体・・・何を・・・した・・・」

その言葉を聞いたバイストはフフフと笑った

そして徐々に笑い声を大きくして最後には高らかと笑った

そんなバイストを見ていた僕はバイストに

「なにをしたんだ！！」

と、大声で言った

バイストはまだ笑っていた

そして笑いが一区切りしたときバリストが答えた

「力にはいろんな使い方があるのさ」

いろんな使い方？

僕は良く分からなかった。バリストの力は『消滅』そのほかの何物でもない

バリストが続けた

「俺の力は『消滅』だ。その力は俺が光線を出すことで発動する。」  
バリストが自分の力の説明をした。

そしてそのあとまたしても笑いながら言った

「しかし頭の良い俺はこう考えたのさ。『光線じゃなくてもこの力を発動できるのではないか』とな！！そこで俺は必死に自分の力を操作して力を意のままに操れるようにした。そしてついに完成したのさ！！」

その言葉と同時にバリストの体表が何かもやもやした白い煙のようなものに包まれた

そしてこう言う

「俺は自分の血液に消滅の力を流すことで、敵が俺の体の何処の部分でも触れると触れた部分が消滅するようにしたのさ！！」  
皆が啞然とする

「お前は俺の血液に直で触れた！！もう助かりはしないさ！！」

バリストが言った

そしてまた高らかと笑う

荒口は絶望感に打ちのめされ言葉も発せなかった

しかし草羅がこういった

「じゃあ・・・触れなきゃいいんだろ？」

バリストは、ん？と不思議そうな顔をした

僕は草羅のほうを見た

すると草羅は目を閉じた

草羅が意識を集中させる・・・、1秒、2秒と、時間が流れる  
すると草羅の目の前に徐々に竜巻が出来てきた

間違いない！！草羅は『気流誘導』の力を使っている！！

どどん竜巻は大きくなつていくそして竜巻が天井を突き破った！！  
オオオオオと、草羅が叫ぶ

そして竜巻をバイストのほうへと移動させた！！

バイストが竜巻に飲まれていく

「ウオオオオオ」

バイストが苦しそうに声を上げた

しかし竜巻はバイストを少し浮かせて数メートル飛ばしたただで大きなダメージは与えられなかった

みんなの動きが止まった

そしてバイストがあざ笑った

「ははははっ！！なんだ！！お前の力はその程度なのか！！まだパワーが足りないな！！いいか！！よく聞け！！風の力だけで誰かにダメージを与えるなんてそれはものすごいパワーがいる！！そのパワーがねえお前はただのゴミだ！！」

そんな・・・

みんな硬直した

そしてさらにバイストが言った

「さあ！！次はお前らだ！！」

第2章〈コンボ〉

荒口はまだ苦しそうにしている

でもまだ助けに行けない

いまは僕らに向かつてきている敵に集中しなければ！！

バイストが大声を上げて突っ込んできた！！

草羅は必死に風の力で応戦しようとしている

しかし無駄だ

でも名屋、加賀、僕は敵に触れないと力の意味が無いため何も出来ない！！



バリストが僕らに突っ込んだ！！

僕らは何とか交わしつつも徐々に追い詰められていった  
そしてついに廊下の隅に追いやられてしまった

(もうだめだ)

僕は思った

だがそんな時！！僕はパツとある作戦を思いついた！！

その作戦を草羅に告げる

草羅は

「お前も戦闘慣れしたのか？」

といった

周りの皆は

「なんだよ・・・」

と、作戦を聞きたがったが無視した

ことは一刻を争うのだ！！

バリストがまた突進しようとするに二歩下がった

「いまだ！！」

僕は草羅に合図をかけた

それと同時に草羅が集中して竜巻を作った

バリストも猛スピードで突っ込んでくる

竜巻が最大級にまで大きくなった

そして僕も集中する

そして僕が『熱量増加』を発動した！！

僕は発動させたまま竜巻の表面の風に触れた

するとみるみる竜巻が赤みを帯びていった！！

そしてついには熱と熱とが混ざり、ぶつかり、溶け合い、炎を帯び

た竜巻へと姿を変えた！！

その姿は美しくもあり、恐ろしくもあった

なんともいえない姿だ

そんな姿を見たバリストは止まってこうつぶやいた

「キレイな・・・炎だ・・・」

(何で言ったのかわからないがおそらく自分の最後を悟ったのだろっ)

そして草薙が炎を帯びた竜巻をバリストへと投げつけた  
バリストが炎に包まれていく

そして真っ黒な灰となつて空中へと舞い上がった

僕らは数秒動かずにいた

皆はモチロンのこと、僕も今の現象には驚いた

僕はまだ自分の力で炎は起こせない

それどころか熱で鉄板を曲げることでさえ出来ないだろう

でも今は炎が起きた

僕はてつきり熱を加えても熱風の竜巻になる程度だと思っていた  
熱風になればバリストの消滅の力も消えると思つたからだ  
何せアイツは自分で「血液に消滅の力を混ぜた」と、言つた

だから体温を上げ、血液の中の温度を少しでも上げればバリストの  
操作も狂つと僕はそうよんだ

でももつとすごいことになつたので本当に、本当に驚いた

そんな時僕はフツと我に戻つた

そつだ！！荒口を手当てしないと！！

僕は荒口の方へと駆け寄つた

もう体の5分の1くらいが消滅している

僕は気を集中させもう一つの力、『治癒』の能力を使った

しかし僕の治癒の力じゃ、なくなつた体の部分をおおよそ元に戻せ  
ただけで他の傷の治癒までは出来なかつた

もつと力をこめようとした僕に荒口が言つた

「もういい・・・十分だ」

そついつて荒口は体を起こし、その場に座つた

そしてニツコリ笑いながらこついう

「さあ・・・俺の身の上話をしないな」

### 第3章 荒口の話

まず・・・

テイルツォ

「俺はIEEEシャイターンなんだ」

それは僕らもなんとなく悟っていた

バイストがそんなことを口走っていたからだ

荒口が続けた

「そうだな・・・どう説明すればいいのか・・・、とりあえず俺の話しよう」

すると荒口は腰についていたドクロが掘られている木彫りのキーホルダーのようなも取り出した

「これはシャイターンの中でもプレシャイターン（最初の、最古のシャイターン）と呼ばれるシャイターンの証だ。プレシャイターンは、スコルが仲間を集って、最初に力で手に入れたシャイターンだから俺はこういう状況を周りのヤツよりもより深く知っている」  
荒口がまた髑髏のキーホルダーを腰につけた

「そして俺の力は『透視』。この力は壁の向こう側が見えるとか言うものはモチロン、相手の動きや急所、どうやったら相手に深手を負わせることが出来るかということが大体なら瞬時に分かるんだ。だからさっきの戦いでもバイストの動きが分かったんだ。でもこの力はずっと発動していると頭をやられちまう。それに頭で分かっても体がついてこないなんてこともあるから結構厄介なんだ。」  
なるほど

それならば筋は通る。

「さあてと、今度はシャイターンの話しをしよう。」  
荒口が話しを切り替えて、また説明し始めた

「このシャイターンと言う地位は100年も前からある制度なんだ。そのときはスコルに仕えるのではなく、個々の空間を統制して空間のものが戦争をしないようにつかさどると言う任務の元動いていた。そしてEシャイターン・フリーモIEEシャイターン・セコインドIEEシャイターン・テイルツォIEEシャイターンのことをまとめてラストフォートレス（最後の砦、最後の要塞）

というんだ。この3体のシャイターンは力も威圧感も全くの別物だった」

そこで荒口は一息ついた

そして声を震わせながらこういった

「そんなあるとき、スコルがやってきた」

ここからが本番のようだ

「突然やってきたスコルは、最強とも謳われたラストフォートレスを負かし、己がその頂点の座に着いた。それから・・・空間の中で色々なおかしなことがおき始めたのは・・・」

そして荒口は一息ついていった

「スコルは次々と強いものをチームに入れて・・・だんだんシャイターンの制度を崩してきたんだ・・・」  
さらに荒口の声が震えた

「スコルは空間のものたちをけしかけて、わざと戦争を引き起こした。そうすることでその空間最強のものを見つけようとしたのだ」  
戦争・・・そんなことがなんだか身近に感じられた  
でも・・・と名屋が言った

「でもどうしてそんなこと・・・」

それは、と荒口が答えた

「それは・・・あいつには大きな目的があるからだ」

「大きな・・・目的？」

名屋が聞いた

「ああ・・・アイツは空間の『時間』をも支配しようとしているんだ」

それを聞いた名屋が声を裏返らせていった

「時間を支配なんてそんなの『神』だろ!!」

「ああ・・・『神』だ!!あいつは『神』になろうとしてるんだ」  
名屋の質問に荒口が答えた

神・・・神だなんて・・・正気なのだろうか・・・

そんな時加賀が言った

「でも・・・スコルは草羅がいた空間からタイムワープしてきたんだろ？だとしたらもうアイツはタイムワープを使えるんじゃない・・・」  
「本当に加賀はたまに核心を突くことがある」

「ああそれは・・・」

荒口が言葉につまった

「どうやら荒口も詳しくは知らないようだ」

すると草羅が

「それは荒口の話がすんだら俺が話すよ」

と、言った

「それより・・・」

と、草羅が荒口に話しをふった

「何でお前はアノ黒い空間の穴からシャイターンと戦闘して出てきたんだよ」

「ああそれは、俺がちよつと調べ物をしててな」

「調べ物？」

草羅が聞いた

「ああ俺は前々からスコルのやり方には賛成してなかったんだ。だからアイツの裏の顔を調べてたんだ。目的、方法、能力etc・・・そしたら<sup>セコーン</sup>IEにかぎつけられてな・・・それで・・・ああなった」と、荒口が答えた

すると名屋が言った

「で、どうなんだ？目的と方法は草羅から聞くとして・・・能力は？」

「スコルの能力・・・それは『精神錯乱』だ」

「これだけ調べるのでも大変だったんだぞ」という口ぶりで荒口が言った

それを聞いた草羅が

「『精神錯乱』か・・・厄介だな・・・。となると、スローターやオウディウスはスコルの手によって作られたと解釈していいんだな？」

と、言った

荒口はああと、うなづく

「でも待って」

僕が割り込んで入った

『精神錯乱』だけじゃ辻褄の合わないことがあるからだ

「みんなの性格がおかしくなったのは分かった。でもなんで姿や形が変わったり能力を身につけたりしてるんだよ」

その質問に荒口が答えた

「それは思い込みなんだ」

「思い込み？」

僕は訳が分からなかった

「なんで思い込みだけで力とかを手に入れられるんだよ」

僕はさらに質問を投げかけた

「『精神錯乱』というのは頭の支配、つまり『頭脳を支配する』ということと同じことなんだ。人間は頭脳を使い、体に命令を出して動いたり、考えたり、喋ったりする。スコルの力はそんな頭脳によい『思い込み』をさせるんだ。だから頭に『爪が伸びて刃物のようになる』という強い『思い込み』をさせれば体がその通りに動く。超高速で動くことやガスを噴射させるというのも同じことだと考えていい。そして『スコルはえらい、絶対に逆らってはいけない』という思い込みをさせれば頭がそう考えて体が支配される。言動も同じだ。」

と、荒口は答えた

そして

「まあもつとも思い込みも相当強くなきゃそうならないから、一つの固体で2つの能力は持たせられないし、考え方を変えるのもそういう人間相手には出来ない。だから1番重要なシャイターンは他の空間からつれてくるといった方法をとったのだから」

と、付け足した

すると名屋が

「それじゃあこの学校全部の人間をおかしくさせなかったのはそういうことなのか？」

と、聞いた

ああと、荒口が答える

「よし！！皆をおかしくした方法、スコルの力は分かった。後は・

・目的だな。草羅、頼むよ」

名屋が言った

第7章（後編）〜底知れぬ力〜

E N D

第七卷 〱底知れぬ力（後編）〱（後書き）

いつもご覧いただきありがとうございます。

今回の後編でだんだんスコルの能力が明らかになってきましたね・

・  
次回で草羅からの説明があり、もっとわかってくるでしょう。

詳しいことは次回で。次回もどうぞご期待ください。



## 第八卷 修行の日々の始まり（前編）

### 序章

いよいよ

最後の戦いの幕が開く

僕はこの長い戦いを

『リセットフアイト』

と呼ぶことにする

思えばあの戦いは

それまでの戦いを無にするものだったのかもしれない

### 第1章 草羅の話

荒口の話が一段落した後

草羅が僕らに説明し始めた

「アイツの目的はさつき荒口が言ったとおり『時間の支配』だ。あいつはこの力で時間を意のままに移動して世界を混乱の渦へと陥れようとしているんだ。そしてその方法は俺のいた空間が使っていた装置をそのままここに再現するというものだ。あいつはものすごく頭がいい。再現なんてことは朝飯前だろう。でもその装置を動かすには膨大なパワーと、それを集める時間がある、どうしてもな。そのパワーはスコルとグランツさんの力を足しても遠く及ばないはずだ。そこでシャイターンを集めた」

草羅の顔がキリツとなった

そして少し声の音量を上げて言った

「やつはシャイターンの力まで自分の中に取り込む気だ。無論、シャイターンなんかよりもスコルの方が力が上だ。そんなことしたらシャイターンもまた、死に絶えるだろう。さつき荒口は『最も大切な位置にくるからシャイターンは自分の力でなく、別の空間から集めた』と、言ったがそれは間違いだ。ヤツはシャイターンを吸収す

るために別の空間から集めた。自分で操っているものを吸収しても、もともとあつた力を自分に戻すだけだからな」

僕らはなんにも言葉を発さなかった

こんなにも突然、こんなにも大きいスケールの事を言われても実感がわかない

というか、

これで完璧に理解しろなんて不可能だ！！

そのなかでも一番シヨックを受けていたのは荒口だ

もしも何にも知らないまま

スコルに仕えていたら死ぬことになっていたなんて

シヨックを受けないわけが無い

だがシヨックを受けている暇など僕らには無かった

また黒い穴が現れたのだ

第2章 長き戦いの元

ジジジジ・・・

音を立てながら正面に現れた黒い穴には6人の人がいた

また戦闘か・・・

僕はため息をついた

その6人が同時に黒い穴から足を出した

と、その瞬間

一気に空気が重くなった！！

まるで周りの重力がのしかかかってきてるようだ！！

僕らは荒口以外、床に寝そべる形になった

あまりの重みで立っていられないのだ！！

喋ることもままならない

そんなか、草羅が声を絞り出した

「なんて・・・威圧感・・・、オーラ・・・なんだ・・・」

僕は必死に顔を出してきた6人に向けた

なんとその6人は全員赤いマントを羽織っている

全員シャイタンなのか！！

荒口が顔を引きつらせながら言った

「ようよう・・・みんなおそろいで・・・パーティーですか？コノヤロー」

するとその中の一人が

「ふざけたこといってんじゃねえぞ！！」

と、怒声を放った

だがもう一人が

「よせディオル、見苦しい」

と言った

こいつには見覚えがある

最初に荒口と戦っていたやつだ

ということは・・・セコントIIか！？

僕はまたザット6人を見た

するとそこにはセコントIIよりも見覚えのあるヤツがいた

というか

もともと仲間だった・・・

久杉だ！！

「久杉！！」

僕は大声で叫んだ

皆も久杉の姿を目で捉えて

「久杉！！」

と、叫んだ

久杉は冷たい表情で僕らをひたと見据えた

とても冷たく、軽蔑するような目だ

僕はなおも叫び続けた

だかそれに久杉が答えることは無かった

そしてセコントIIと思われる男が言った

「さあ・・・そろそろ本題に入ろうか」

本題・・・いつたいなんなんだ？

「カオス、戻ってくるんだ」

「やっぱりそうか」

荒口が言った

「分かっているならなぜ来ないんだ」

セコンド  
「アイと思われる男が言った」

「そんなの決まっているだろ。スコルに仕えたくなくなった、ただそれだけの話だ」

荒口が答える

セコンド  
これには流石にアイと思われる男もキレると思ったが意外にも冷静で

「ほお・・・それはなぜだ？かなり前からスコル様に仕えていたプレシャイターンのお前が」

と、いった

「やり方が気に食わないだけだ、自分の欲のために中学校を襲って尚且つ、俺の友達を必要に付き回し、殺そうとするなんて・・・」

お前こそなんでアイツなんかには仕えるんだ！！」

荒口が少し強い口調で言った

すると今まで冷静だった男が敵意むき出しにして怒声を放った

その間はさらに威圧感が強くなって、体がつぶれるくらいな感じで声を聞くのも一杯一杯だった

「アイツなんかだと！！あの方は偉大なお方だ！！あの方が時間を統べることで世界は平和になっていくんだ！！」

それにも負けずに荒口はさらに言った

「なんだそりゃあ！！アイツが世界に平和をもたらすわけ無いだろう！！現にアイツは俺たちの力をも吸収するつもりなんだぞ！！そんな事俺らには告げずになあ！！そんなヤツが平和をもたらすと思うかあ！！」

男は少し驚いた様子だったがすぐに

「そんな事あるわけない！！お前が何を吹き込まれたかは知らんが俺はスコル様に仕える。ここにいるお前以外のシャイターンはみな同じ気持ちだ！！」

と、言った

周りの奴らもうなずいた

「だが……」

荒口が何か言おうとしたが男にさえぎられた

「うるさい。お前には何を言っても無駄なようだ。力づくで……  
連れて行く」

第3章 逃走

「ざんねんだ」

荒口が答えた

その後すぐIIの男の後ろにいたシャイターンも構えた

そして男がこういう

「俺ら全員を敵に回して……勝てると思うのか？」

荒口は

「チツ」

と舌打ちした

荒口が舌打ちしたのと同時にシャイターンたちが突っ込んできた

荒口はポケットから煙幕の玉を取り出した。

すると荒口の目が変わった

薄い緑色をおび何もかもを見透かすような透き通った目になった

間違いない、『透視』の能力を使っている

そして煙幕の玉を投げつけた！！

シャイターン達が咳き込む音がする

ここでもうやく僕らは威圧感から解放された

そして荒口が僕らの元に歩み寄ってきてこういった

「さぁ……逃げるぞ。俺の力も弱まってきてる。おそらくスコル  
が邪魔してるんだろ。だがまだもう少しなら力がある。煙幕は一  
番長くもつ角度、一番濃くなる強さ、一番空気の流れが分からない  
粒子の大きさで出来ている。だから空間の穴を開けても飛ばない。  
校内のどこかまでならまだ移動できる。さぁ行くぞ」

そういつて荒口が空間に穴を開けた  
そして皆で一気に穴へと流れ込んだ

第八巻了 戦いの始まり (前編)

END

第八卷 〽修行の日々の始まり(前編)〽(後書き)

更新が遅れてしまってすみません。

さて、このネバービリーブもやつと終わりが見えてきました。それより、久杉が久々に出てきましたねえ。斉木はどうなったのだから…。そんなことで、次回もご期待ください！

## 第八卷 修行の日々の始まり（後編）

（序章）

シャイターンたちに

そこまでの力があるのか

強大で強い力が・・・

その力に対抗するべく

僕らは修行の道へと進んでいく

『リセットファイト』、修行編の幕が開く

第1章 逃げてきて

シャイターンたちから逃げてきて僕らはいま3階の音楽室にいる

ここはドアや窓やらに鍵をかけていられるので少しは安全だ

でも完璧とは到底いえない

だから話している最中も気は抜けない

そんな中

加賀が口を開いた

「なあ荒口、あいつら全員シャイターンなんだよね？」

「ああ」

と、荒口が答える

「それがどうかしたのかよ」

名屋が言った

「あのさ、空間移動できたのって6人だったよね？僕らが倒したバ  
イストと今ここにいる荒口を抜いたら、シャイターンはEX<sup>（イ）</sup>までい  
るんだから7人はいるはずだよな？あと一人は何であそこにいな  
ったの？」

と、加賀が皆に質問を投げかけた

「それもそうだな・・・」

名屋と草羅が言った



「ああそれは」

と、荒口がその問いに答えた

「あそこになかったのは何を隠そう<sup>フリーモ</sup>Iだ。アイツは相当なことが無い限りスコルの元を離れないんだ」

「ふう〜ん」

加賀が言った

第2章〜シャイターンたち〜

すると荒口が続けた

「じゃあせつかくだからシャイターンたちのランクと名前とそいつの能力をいつとくか？」

「うんうん」

と皆でうなずいた

「まずEX<sup>イノ</sup>だけど・・・こいつのことはもう知ってるよな？」

荒口が言った

「ああ」

名屋が荒口に代わってEX<sup>イノ</sup>のことを説明し始めた

「アイツのコードネームはヒースト、能力は『吸収』でアイツのダメージや飛び道具なんかを吸収して敵にぶつける事が出来る。しかもその吸収したものはストックしておくことが可能で、その戦闘で吸収して無くても前の戦闘で吸収しておいたものを相手にぶつけることも出来る」

ここで一区切りさせて名屋は

「あの時は斉木のおかげで助かったな・・・あいつがいなかったら間違いなく死んでいた」

と、言った

すると加賀が

「うん・・・でもその後、斉木もカノンも行ってしまった。久杉にいたってはシャイターンだっことが判明した。あの時・・・俺・・・マジなにがなんだか分からなくなったよ・・・」

と、胸のうちを明かした

一気に空気がドヨンとした

しかし荒口は

「おいおい・・・そんなに落ち込むなよ・・・まだまだ説明続くから・・・」

と、少し引きつった笑みを浮かべていった

無論、皆からの応答は無い

「はあ・・・」

と、荒口はため息をついて説明を続けた

「つぎにVIEIEIのデイオルだ。」

デイオル・・・

パソコン下あのIEIに注意されてたヤツか？

「デイオルは『分身』の能力を持つてる。一人で突っ走る性格と荒々しさはシャイターンの中でも1、2位を争そう、まさに特攻隊みたいなものだ。ヤツは分身を作つてめつたに本体の姿では現れない、まあでもあの時は本体がきてたな」

「なんでそんなことが分かるんだよ？」

名屋が聞いた

「ああ、アイツの分身には影が無いんだ。まあどこその本にも書いてある設定だな。」

荒口が笑いながら言った

「つぎはVIEIEIのバーストだがこいつはいいだろう」

次はだな・・・

荒口が僕らの目を見た

何事か分からなかったがすぐに理解できた

「VIEIEI・・・久杉か・・・」

僕はつぶやいた

「ああ」

と、荒口が言った

「アイツのコードネームはバルキー、能力は『硬化』だ。アイツは

体のどの部分でも一瞬でコンクリートより、鉄板より硬くする事ができる。」

「ああそれなら見たことがある」  
今度は僕だ

「久杉がオウディウスをただの蹴りで倒したのがそれだろ？あの時はただ、シャイターンとオウディウスの差がもの凄くあるもんだとばかり思っていたけどそういうことだったのか」

と、僕が言う

「そうだ」

と、荒口が言つて続ける

「アイツはV<sup>キャスト</sup>Eと、シャイターンの中ではソコまでランクは高くないが、頭の良さや直感、冷静さや非情さ、どれをとってもあいつに勝るものはないと思う。まあそのぶん、仲間が出来たときは甘さや優しさが出てきてしまうからあのランクなんだろう」

少し荒口が間を空けて続けた

「次はV<sup>クイント</sup>のフーガで、能力は『高速移動』にある。こいつの高速移動の速さは天下一品で、見ることも感じることもままならない。戦つて気づいたときにはもう死んでいた、なんて話は良くあるもんだ」

「そんなヤツ・・・あいたくねえな・・・」

名屋が言つた

ハハハと、僕も笑つておいた

「そしてEV<sup>クォールト</sup>シャイターンのマイストだ。こいつはシャイターン唯一の女性のシャイターンでスコルでさえ頭が上がらないほどの強気なやつだ。能力は『超能力』で指定した相手の頭をおかしくしたり、敵の体を振れずとも背骨までポツキリとねじ曲げてしまつたりする恐ろしいヤツだ」

荒口がブルブルツと身震いした

「そんなやつ・・・絶対あいたくねえ！！」

名屋が言つた

僕もこんどは真顔でうんうんとうなずいた

「それで次が俺でその次のIEセコイント、さっきのヤツがスモールだ。やつ  
の能力は「気体verガス」だ。アイツは毒ガスなどのありとあら  
ゆるガスを使うヤツでやつの手には掛かれれば数分・・・いや、数秒で  
戦いのけりがつく」

あいつはそんなにすごいヤツだったのか・・・  
セコイント

IE・・・敵の2番手の実力を知った

「さあて、次が一番厄介なIEフリーモだ。ヤツのコードネームはファンデ、  
能力は『爆発』で敵が体に触れると触れた部分がものすごい爆発を  
起こすというものだ。やつに突っ込んでいったら最後、もう跡形も  
残らないだろう。それにやつが持つ武器は特殊な加工がしてあつて  
やつの爆発の力を溜めておけるんだ。だからこつちが武器や飛び道  
具で応戦しても全く意味が無い。こいつと殺り合ったら生きてはい  
られないだろう」

敵の一番手は相当厄介な相手らしい。

「これがシャイターン全員の名前と能力だ」

荒口が締めくくった

シャイターン・・・聞けば聞くほど恐ろしい

こんな化け物じみた奴らを敵に回していたとは・・・

今更だが、自分がどれほど恐ろしい奴らを敵に回しているのを知  
った

第3章 修行

「・・・、どうするんだよ・・・そんな奴らに勝てっこないじゃん」

僕が言った

「それもそうだよな」

草羅が言った

「うん・・・」

これは名屋だ

すると荒口は

「ああモチロン今のお前らじゃ絶対に勝てないな」

と、駄目押しをした

「じゃあどうするんだよ!!」

ついに名屋が怒鳴った

「まあまあ落ち着けよ、俺は今のお前らじゃ勝てないと言っただけだぜ」

荒口が言った

すると加賀が

「じゃあ・・・どうするの?」

と、言った

繰り返しただけが加賀が言うとなんだかもつたいぶれない

「お・・・おお・・・修行するの?」

荒口がちよつと戸惑ったような口調で言った

「修行?」

皆が一緒に言った

「ああ修行だ」

荒口は笑いながら言う

「どこで」

また皆でいった

「俺の作った空間でさ」

「お前の作った空間って・・・」

名屋が言った

「ちよつと待て、今ちゃんと説明するからよ」

荒口が話す準備をした

そして喋りだす

「俺は、お前たちに会ったときからずっと、お前らの修行場を作っていたんだ。お前らの能力にあった修行場をさ。そこで修行すればシャイターンたちとも互角にやりあえるようになるさ」

「それを早く言えよ」

と、名屋が笑いながら言った

するとそこへ加賀が

「ちよちよちよ・・・ちよつと待ってよ！！修行なんて・・・どこにそんな時間があるのさ。もう後2時間か3時間くらいしたらまた奴らが来るかもしれないよ！！2〜3時間でどこまでできるものなの？」

と、慌てて言った

「そりゃそうだ」

草羅も言った

「どうするんだよ」

名屋も言う

「ああ・・・その心配なら要らない」

「なんで」

僕が聞いた

「俺の作った空間はこの空間の時間の流れと比べて遅いのさ。その遅さ、実にこの空間の約50倍！！実際はもつと多い！！だからこつちの空間で言う1時間は向こうだと約50時間にもなる。だいたい2日分だ！！だから時間の心配は要らないのさ」

「そうなのか？」

名屋が言った

「それなら・・・」

僕らは口がにやけた

「よしやるぞオオオオ！！」

皆で叫んだ

すると荒口が

「よし！！じゃあ空間に穴を開けるぞ！！みんな！！覚悟はいいか？」

「もちろん」

僕が言った

「ああ」

草羅も言った

「当たり前！！」

名屋も言う

「僕も平気だよ」

加賀も言った

そして荒口が

「よし！じゃああけるぞ！最初はいつこの穴が入ってちよつと経つと道が分かれる。そしてそれぞれの方角に進め。というより勝手に進む！そして修行を始めろ」

と、皆に言った

「分かった」

名屋が言った

「ついたらなにをすればいいの？」

加賀が聞いた

「うん・・・とりあえず自分の能力を使って生き残れ」

「生き残れって・・・まさか死ぬかもしれないの！？」

加賀が言った

「さあ？」

荒口はとぼけたように言ったが間違いない！！

口元がにやけている！！

死ぬかもしれないのだ！！

僕らはあたふたあたふたした

と、その時

空間の穴がものすごい量の空気を吸い込んだ！！

僕らはそれにのまれて一気に空間の穴へと入っていった

空間の穴に吸い込まれているときに荒口の声があった

「時間になったら自動的に出てくれるからあゝ！！それまで死ぬんじゃないぞあゝ」

はあ・・・

またこういう展開か・・・

僕はこの修行を終えた後強くなることはなるが、精神的にボロボロでもう2度とこんな方法の修行はやりたくないと思った

第八卷　修行の日々の始まり（後編）　END



第八卷 〽修行の日々の始まり(後編)〽(後書き)

昨日に引き続き今日も更新させていただきました。

今回は修行の始まりでした……。まったく先がどうなることやら……。

さて、修行に行ったみんなの運命やいかに！

## 第九卷 修行（前編）

〔序章〕

激しく噴火する山々

燃え盛る炎

流れ出す溶岩

吹き荒れる熱風

こんなところでどう生き抜けばいいんだ？

人が・・・いや

生き物が生きていける環境ではない！！

第1章 修行の場へ

今、空間の穴の中に僕はいる

皆は今どうしているだろう

見当もつかない

でも確かなことが一つある

皆今の僕と同じように修行の場へとすさまじいスピードで真っ逆さ

まに落ちていつてるはずだ！！

空間の穴はとて長くてかれこれもう5〜10分くらいは落ちてい  
るだろう

これだけ落ちていると体も慣れてくる

と、僕はふと下を見た

するとある場所から向こうは黒い壁が赤く染まっている

僕は何かと思った

修行の場へと近づいているのか？

僕は黒い穴から赤い穴へと落ちていった

するとなんと！！！！

そこは灼熱地獄で下手をしたら体が丸コゲになってしまいそんな感

じだった!!

『熱い!!熱い!!』

気が狂ってしまいそうなほどの気温だ!!

『熱い!!熱い!!』

『もうだめだ!!!!!!!!!!』

そう思った瞬間、僕はバンツと地面にぶつかった

『やっと着いたのか・・・』

僕は体を起こしてあたりを見渡した

するとソコには驚くべき世界が広がっていた!!!!!!!!

なんとまさにソコは炎の世界で黒煙が黙々と立ち上り、山々が轟々と音を立てて噴火していた

「うそだろ」

僕は思わずつぶやいた

『こんなところでどうやって過ごしていくんだよ』

そう思った

しかし、僕は妙なことに気づいた

『何でここは熱くないんだ?』

そうである

周りは悲惨なまでに空も地面も真っ赤に染まっっていていかにも

『灼熱地獄』

という感じなのに僕がいるこの場所では全くといっていいほど熱さを感じないのだ

僕はふと下を見た

するとなぜか僕が立っているこの3畳くらいのスペースだけ地面が緑色だった

僕は状況がつかめず頭をかしげた

するとソコに荒口のアナウンスが入った

(何処から音が出ているのだろう)

「津式!!そこは火の世界、「ファイヤーワールド」だ。その気温は約500度!!普通の人間が生きていける環境じゃない。しか



どれもこれもそれまでの人生とは大きく違うことばかりだった  
喧嘩（戦い）一つとってもスケールが違う

誰かの下につくとかいうのでも忠誠心というものが感じられる

僕達が生半可な気持ちでやっていることなんて『お遊び』に過ぎないが、ここではその生半可な気持ちが命取りになる

僕は改めて、今いる現実と平凡だった過去の違いを感じた

その時だった

徐々にセーブエリアの緑の地面が普通の地面の色に変わってきた

「よしっ！！！！！！」

と、僕は自分に渴を入れて『熱量増加』の力を発動した

いよいよ修行開始だ！！！！！！！！！！

12時間の最初の2時間くらいは何も起きなかった

ただ、ずっと立っていなければいけないのと力を発動し続けなければならぬのとで結構疲れた

3〜4時間後くらいになると立っているだけでもつらくなってきた  
5時間後にもなると足が震えだしてきて力の発動に集中できなくなってきた

そして5時間30分後、周囲の山々が噴火し始めた！！！！！！

流れ出した溶岩がこちらにぐいぐい迫ってくる！！！！！！！！！！！！！！！！

『まずい！！このままだと溶岩に飲まれてしまう！！』

僕は必死で逃げた

足が疲労で思うように進まない

だが進むしかない

息が切れてきた、だが周囲の気温が高すぎて一気に空気を吸い込むと肺が炎症を起こし咳き込んだり、むせたりする

そんな息もまともにも出来ない状態の中、僕は走り続けた

ふと、横を見ると大きな洞窟のようなものがあつた

僕は何も考えずに一目散に洞窟の中へと入っていた

『はぁ・・・これで溶岩からは逃げ切れた』

僕はここで一息入れた

(洞窟の中といえど気温が気温なので座ることは出来ない)

一体何分くらい溶岩から逃げていたのだろうか

想像もできないほど長く感じる

こんな足の状態では1キロ歩くのでも1時間はかかってしまうだろう

『もうこんな修行うんざりだ』

僕は心のソコから思った

こんな修行しても死んでしまったら意味ないしここで生き残れという方が無理だ!!

だがここから出る手段など無いし、皆も強くなろうと必死に修行しているに違いない!!だから僕だけがこんなところで諦める訳にはいかない

僕はこの修行に専念しようと心に誓った

そしてひとしきり休んだ後、僕は洞窟から出た

『何でも来い!!なんにでも打ち勝つてやる』

そういう気持ちだった

### 第3章 V S 大蠍

すると地面がゴゴゴゴと音を立ててゆれ始めた

『火山がこれだけあれば大きな地震が起きるのは当たり前のことだ』

そう思ってこのゆれのことは気にしないようにした

しかし、気にせずにはいられなかった

ゆれ方が普通の地震とどこが違うのだ!!!

僕は自信で感じた「普通の地震」と違う点を必死に探した

心を落ち着かせてゆれに集中し、何か危険が起きてもサツとかわせ

るように・・・

と、僕はピンと来た!!!間違いない!!!!!!このゆれは僕に

近づいてくるように大きくなっている!!!!!!

僕は足の裏ですこし地面が盛り上がるのを感じた

僕は咄嗟に後ろ方向に思いっきりジャンプした!!!!!!

すると僕のいた地面から何かがものすごいスピードで出てきた  
何か生き物のようだ!!

尻尾の先にはドデカイドリル、体はまるで蠍スコーピオンのようだ  
体の表面は真っ赤に燃え上がり、とても太く強靱ゴツそうな足  
その風貌に僕はつばを飲んだ

こんどはこいつと戦わなければならないと心で分かったからだ  
しばらくにらみ合った

そして僕は僕の体の数十倍はあろうかという巨体にむかって走り出  
した!!

大蠍もグウウとうなって僕に近づいてくる

大蠍が巨大なドリルのついた尻尾を僕に向かって振り下ろした

僕はそれをひらりとかわして大蠍の懐なつかしへと一気に攻めた

そして僕の熱量増加の力を手のひらに集中するイメージをして思い  
つきり大蠍に押し当てた

『決まった』

僕はそう思った

しかしダメージを受けたのは僕の方だった

大蠍の体に触れた瞬間、僕の手の方が真っ赤に燃え始めたのだ!!!

僕は慌てて大蠍から手を離し、距離をとった

僕は自分の手のひらを見た、酷い火傷だ

薄い皮膚は完全に溶けてしまつて手のひらの中心の肉があらわにな  
っている

モチロン痛みも半端じゃない!!

痛くて痛くて手の震えが止まらない!!!

だが今はそんな悠長なことはいってられない

目の前には無傷の大蠍がいるのだから!!!!!!

僕は大蠍に向き直った

そして倒す方法を必死に考えた

考えている間にも大蠍は何度も何度も攻撃してきた

だが幸い、大蠍はその巨体ゆえにすばやい攻撃は出来ない

威力は一発一発、それはもの凄いものがあるがスピードがないので避けるのはいたって簡単だ

当たらないようにさえ注意しとけばあまり脅威ではない  
考える余裕もある

僕はさつきは何で僕の熱量増加の力が押し負けたのか考えた

だが考えるまでもない、ただ純粹に力の差だ

ヤツの甲羅はものすごく熱い、その熱さに僕の力が負けた。ただそれだけだ

では一体どうやって勝つ？力のぶつかりあいじゃまず勝てない

とすると間接的な攻撃か？熱量増加の力を手に集中して使えばその辺の石をもつことは可能だろう。その石をヤツに投げつけて攻撃するか？

僕は試しにやってみた

手のひらに力を集中させて石を持ち上げた

案の定石は持てた。だが投げつけるのは不可能だった

石を持つと石が僕の熱に耐え切れずに粉々になってしまふのだ……！

これでは投げつけることが出来ない……！

僕はチツと舌打ちをした

そしてまた大蠍の攻撃が来た

僕はそれをひよいとジャンプでかわした

僕は空中に浮かびながら思った

『敵の攻撃は当たらないのにこれじゃあ勝てない……！……！』

すると僕は横からものすごい衝撃を感じた

見るとなんと大蠍の尻尾がヒットしているではないか……！！

僕は横に思いつきり吹っ飛ばされた……！！

そしてそこにあつた岩に激突する

僕はドサツと地面に倒れた



『熱い熱い』

地面がものすごい熱を帯びているため僕は地面に倒れることさえも許されない

しかし起き上がろうとしてもあまりの痛さで起き上がれない

一体どうすればいい!?

それにしてもなぜ大蠍の攻撃があつたのだらう

さっきまでの攻撃を見た限り、僕がジャンプするときにくぐ力の向きを変えて僕に攻撃を当てるなど出来なかつたはずだ。それがなぜ今になって出来るようになってる・・・

僕は大蠍を見た

するとなんとなんと!!!

大蠍の尻尾が3本に増えているではないか!!!

両脇からさっきの尻尾に比べ一回り小さな尻尾が2本!!!

『畜生・・・、まだ手の内を隠してやがったか・・・』

僕は思った

そして最後の力を振り絞って立ち上がる

しかし立ち上がったはいいものの、僕は深い絶望に苛まれた

今までは攻撃をかわして来れたがこれからはそうはいかない

2本の動きの早い尻尾を交わしつつ、主本の尻尾も交わさなくては・

・

だがこの体力ではそんなことできるわけがない

やはり勝つには、こちらの攻撃を当てなくては・・・

僕は自分の手を見た

さっきの攻撃で中央の肉が丸見えの手、とてもみすばらしい。しか

もその肉が見えている手の中心に何か刺さっている。さっきの粉々

に砕けた石か・・・

僕はじつと自分の手を見続けた

その時!!!僕はある策を思いついた

そうか・・・そうか!!!!!!

僕は大蠍に勝てる方法を思いついたのだ!

『いける、いける！！』

僕は心のそこから思った

大蠍が大きくうなつてこちらに向かってきた

僕は大蠍をにらみつける

そして大蠍に向かつて思いつきり走つた！！

大蠍の2本の尻尾が襲い掛かってきた！！

僕はジャンプしないように、なるべく無駄な動作をしないようにヒ

ヨイヒヨイとかわした

しかし敵の尾のスピードは予想を超えていた

かわしてもかわしてもまたすぐ向きを切り替えてこちらに向かつてくる

しかし僕も必死だった

その攻撃をすべてかわしていく

そしてついに主本の尾が来た！！

僕は間一髪、その攻撃を回避した

そして、再び熱量増加の力を手に集中させた

そして一気に大蠍の甲羅へと押し当てる！！

最初はさつき同様こちらの手の方がダメージを受けて燃えてきた

しかし僕はへこたれずにさつきよりも強く押し当てた

そしてさつき思いついた方法で手に力を集中させていく

するとなんとなんと手が真っ赤な光に包まれていくではないか！！

火の光ではない何かが・・・

そして一気に大蠍の甲羅を貫く！！

数秒・・・時が止まった・・・

そして・・・大蠍が派手に音を立てて崩れ落ちた

体が頭と胴で2つに分かれている

『やっぱり』

僕は思った

一番最初に手が燃えたのは力の強さが違ったのではない

力の鋭さが違ったのだ

最初、僕は手のひら全体に力を集中させて攻撃していた  
しかし、それでは相手の密度の高い熱を破ることは出来ない  
でもそれを破る方法をさつき手を見たときに思いついた

手の火傷は『中心』こそ肉が見えたり石が簡単に刺さってしまっ  
どダメージを受けているが、側面や手のひらの周りにはそれほどダ  
メージがなかった。

ということは敵の熱が一点に集中しているということだ

ならばこちらも一点により鋭くより高密度に熱を練ればよかったんだ

僕はこれが熱量増加の力の使い方なのかと感じた

そしてこの修行での初めての成果を手にした

高い熱ではなく鋭い熱を・・・

第九卷↳修行（前編）↳

END

第九卷 〱修行（前編）〱（後書き）

読者の皆様、1ヶ月以上も更新できなくて大変申し訳ございませんでした。

これには学校行事などのとても深い理由があったわけなので、別にサボったわけではないのでご了承ください。

さて、今回から修行編に突入しました。

次回もご期待ください。

## 第九卷 修行（後編）

（序章）

鋭い熱……

力の応用……

近距離攻撃……

遠距離攻撃……

すべてをバランスよくもつものだけが真の強さを手に入れられる  
僕も、それに少しずつでも近づいていきたい

第1章 力の応用

大蠍との死闘を潜り抜けた僕の疲労はすでにピークだった

一体ここに来てから何時間たったのだろう

そろそろ12時間くらい経つ気がする

そしたらセーブエリアで20分間ゆっくり休めるのに……

僕はため息をついた

全部で5日分くらいある修行時間の中で半日も経ってないのにこんなにしんどいなんて……

先が思いやられる……

僕は暗い気分になった

でも今からそんな気分になっていたらこの先やっていけない!!

僕は無理やり暗い気分を振り払い

『力の応用』

について考えることにした

力の応用とはその名の通り力を応用してさらに強力な力とすること  
だと前に荒口が言っていた

ヒーストの場合、『吸収』の力を応用して『吐き出す』という強力なものに変えた

バーストも『消滅』の力を血に流すことで体の何処を触っても敵が消滅するという力の応用をした

僕の場合は『鋭い熱』だが、これは応用というよりも基本戦術に近い気がする

力を手のひらの一点に集中させていき、一気に相手に押し当てるこれも応用といえは応用なのだろうが、バーストやヒーストのそれとは何か感じが違う気がする

一体力の応用とはなんなのだろう？

そして僕のこの『熱量増加』の力はどのように応用してどのような力にすればいいのだろう？

見当もつかないが考える価値はありそうだ

そんなことを考えていると僕の真下の地面が緑色に変色してきた

『やつとか』

と、僕は肩を落とし、地面に這いひたひた蹲るようにして寝た

一瞬の静寂

ひと時の休息にどっぷりとつかりながら寝た

こうして僕の最初の12時間が終わった

第2章～VSオオワシ～

少し熱くなってきた

そろそろセーブエリアがある20分間が終わるのだろう

僕はムクツと、起き上がった

どうやらセーブエリアで休んでいると体の傷や体力が回復するらしいさっきまでよたよただった足取りが今はしっかりしている

セーブエリアが消えた

と、同時に僕は『熱量増加の』力を発動した

またあの地獄の12時間が始まるのかと思うとホントに嫌になってくる

5時間半がすぎた

どうやら火山の噴火はこの辺りの時間帯から始まるらしい  
この時間をすぎるとやたら火山が火を吹くし、火山灰や石も飛んでくる

流石にそうなつてくると力を発動させていてもそこそこの暑さは感じる

石や火山灰はどうにかなるものの、問題は溶岩だ

溶岩が来てはもう避けるしかない！！

この12時間はさっきのような大蠍のような化け物は出てこなかった  
ただ疲れることに変わりはない

暑さのせいで頭がおかしくなりそうなこともたびたびあった

もう立っていられなくなり地面に倒れてはまた起き上がりの繰り返し  
こんな事やっていたら気がおかしくなりそうだ

ただその後のセーブエリアはまさに天国だった

疲れはほとんどん抜けていくし傷は消えていく

これほど幸せな時間は無いだろうとまで思った

そして2度目の12時間も無事終わった

つぎの3度目の12時間もさっき同様

5時間半くらいをすぎると山々噴火してきた

でもさつきと違う点があった

敵が現れたのだ！！！！！！！！！！

今度の敵は空から現れた！！！！！！！！

オオワシのような風貌をしているが、体全体が赤く燃えていて鍵爪も相当な熱を帯びているらしく降りかかった火山灰が一瞬にして溶けていく

あれを食らったらただじゃすまないだろう

僕はそいつをみて思った

こいつは相当強い！！大蠍とは別の強さを持ったやつだと

本能で感じた、オオワシの姿と目を見れば分かる

誇り高き精神を感じる

だが・・・倒さなければならぬ、越えなければならぬ壁だ！！！！

オオワシが高々と啼いた

そしてものすごいスピードで僕の方に向かってきた！！

僕はそれをやつのことで交わした

しかしオオワシはすぐに方向転換してきて爪を僕に向けてきた

僕は咄嗟にかがんだ！！しかし運悪く背中をかすめた

「ギャアアアア」

僕は思わず叫んだ！！

かすっただけなのになんて威力なんだ！！！！！！！！

僕は地面に足を突いた一度体制を整えなければ！！

しかしオオワシはそんな暇を与えてはくれなかった

なんとオオワシは口から火の玉を吐いたのだ！！！！

僕はそれをもろに食らった！！

ドサツと倒れる

『なんだいまのは？なんでオオワシがあんな攻撃が出来る！！！！』

### 第3章 地の利

オオワシはさらに僕に畳み掛けた！！

火の玉を吐きつつその鍵爪で攻撃を仕掛けてくる

僕はされるがまま、やられるがままだった

抵抗なんて出来ない、する暇を与えてはくれない

オオワシの猛攻撃の中、僕を苦しめたのは火山灰だった

叫ぶたび、息を吸い込むたびに口に入ってくる

飲み込もうものなら内側から肺が焼かれる

目にも入って目の前をさらに暗闇にしてくる

ただでさえオオワシの攻撃で意識が朦朧もうちゅうとしているのにこれではど

うしようもない

薄れていく意識、体に蓄積されていくダメージ

そうか、これか、スピードでほんろう翻弄しながら抵抗の隙を与えずいつき

に倒す



これがオオワシの強さか・・・

このスピードじゃあ『鋭い熱』を食らわせることは出来ない  
意識が完全に落ちようとしている中、僕はある作戦を思いついた  
こうすればオオワシを倒せるかもしれない

しかし自分もダメージは相当ある

逃げ切れればいいが・・・

それに確立はごくわずか、オオワシが動いていては絶対に無理だ  
一瞬だけ、一瞬でいい、オオワシを止める方法は無いか？

僕は周りを見た、そしてオオワシの隙をさがす

これだこれならいける！！！！

オオワシは方向転換するときに一瞬隙が出来る

そのときに火山灰を投げ当てればもっと大きな隙が出来る！！

僕は火山灰を手で強く握り締めた

『絶対に当てる、当てるんだ！！』

そう意気込んでオオワシが方向転換するのを待った

オオワシが僕に突っ込んできた

僕はそれを躲かわす

オオワシが方向転換してこちらに戻ろうとしてきた

「今だ！！！！！！！！」

僕は叫んでオオワシめがけて火山灰の塊を思いっきりオオワシに投  
げつけた

オオワシが苦しそうに叫ぶ！！

それと同時に僕は多くの火山灰を上へと向かって投げた

撒かれた火山灰の中央にはオオワシがいる

上空に舞い上がった火山灰は降ってきている火山灰と合わせるとも  
のすごい数になった

そしてその火山灰の一つめがけて『鋭い熱』を使った

火山灰に火がついた

僕は慌ててその場から遠く離れた場所に走った

火のついた火山灰から別の火山灰へ、そしてそれからさらに別の火

山灰へ

それが四方八方で行われた

中央にいるオオワシが目を見開くのが見て取れた

と、次の瞬間！！火のついた火山灰がいつきに爆発した！！！！

あまりの爆風に僕まで吹っ飛ばされた

ここにいてもそれだけの衝撃を受けるんだ

中心にいたオオワシはひとたまりもないだろう

爆発は10秒間くらい続いた

そして爆発がやんだ

爆煙がたちこめる、黙々と上空に上がっていく

僕はほっと一息ついた

僕の思いついた作戦、それは

「粉塵爆発」

可燃性のある粉塵が周囲に充満していて尚且つ、粉塵と粉塵が重な

り合っていないと出来ないこの作戦はまさに賭けだった

もしかしたら粉塵の層からオオワシが逃げていたかもしれない

上手く充満していなくて爆発していなかったかもしれない

爆発しても自分が巻き込まれて死んでいたかもしれない

いろんな不安要素はあったけどやって損はないと思っただ

現に結果オーライだった

爆煙が晴れてきた

案の定、中央には丸コゲになったオオワシがいた

僕は本当に疲れ果てた。大蠍のときよりも体力を使った気がする

というか、頭を使った気がする

今回は頭脳で勝ったって感じた

意外とこの戦いは早くけりがついた

だから疲れててもなかなかセーブエリアが現れずに本当にしんどか

った

でも得るものはあった

徹底的にすばやく相手を倒す

そして地の利を生かした戦術

これを今日の戦いで知った

今回の戦いはそれなりに意味のあるものだったらしい

それから1時間か2時間後、やっとセーブエリアが現れた

僕はそこでゆっくり休んだ

#### 第4章 悪魔の溶岩

セーブエリアでゆっくりした後

また僕は12時間の耐え難い時間を送っている

この暑さにもそろそろ慣れてきたが限界に近いのも確かだ

セーブエリアに入っても少しダメージが残るようになってきた

しかもなんだか今度の12時間は他のと少し違っていた

5時間半くらいたっても全然山が噴火したりしないのだ

少し不安も覚えつつ僕はとりあえず修行に専念した

まず『鋭い熱』を打つ練習

その辺にある石に向かって『鋭い熱』をつかって砕いていく

自分で時間を計って決められた時間に何個正確に砕けるか

正確さと速さが求められる修行だ

それを3時間くらいやったときことは起こった

なんと、それまでなんでもなかった山々が突然噴火したのだ!!

僕は呆気にとられ呆然と立ち尽くした

しかし目に入ったあるものを見て我に返った

流れ出す溶岩だ!!

一気に噴火したため溶岩のスピードも大きさも今までのものとはグンチだった

あれをまともに食らったら間違いなく死ぬ

僕は逃げて逃げて逃げまくった

体に当たる石も、たまにであったここに住んでいるらしい生き物たちも、すべてを無視して一目散に逃げた

そんな僕を見てか生き物たちも駆け出した

中には大蠍もいたが今回ばかりは相手をしてもらえない  
とりあえず今は走るのだ!!!

しかし、人の走るスピードでは溶岩の早さにはかなわなかった  
徐々に僕と溶岩との差が縮まっっていく

僕はふと、鹿のような生物に目が行った

あの生き物に乗れば!!!

僕は鹿の方へと駆け出したそしてえいや!と鹿にまたがった

鹿は驚いて僕を振り落とそうとしたが僕も必死だ

絶対に落ちるもんか!と鹿の首元を思いつき掴んだ

すると鹿は喚き散らして全速力で駆け出した

『よし、これなら逃げ切れる』

僕は確信した

しかし甘かった

なんと前から横から・・・

四方八方から溶岩が流れてくるのだ!!!

どうやらここは土地が低いらしく溶岩が皆集まってくる

しかも鹿が飛びのきがむしやりに暴れまわった

僕はとうとう振り落とされてしまった!

僕は体を地面に打ちつけ『うっ』となった

でもそんなことしている余裕なんて何処にもない

僕は体を思いつきりひっぱたき体を起こした

周りを見ると溶岩がもうすぐそこまで迫ってきていた

まわりで生き物達が飲まれていく音がする

泣き叫ぶ生き物の鳴き声、飲みこまれていくグシャグシャという嫌

な音、走り回る生き物の足音

すべてが僕に恐怖を押し付けた

頭がおかしくなりそうだ!!!!!!

後ほんの数メートルで溶岩が僕を飲む

逃げ場もない

僕は

『これで終わりか』とあきらめた

僕は修行中に死亡というかつこ悪い死に方をするのだ

第九卷了修行（後編）了

END

第九卷 〱 修行（後編）〱 （後書き）

本日2話目の投稿です。1ヶ月休んだ分をがんばって取り戻していきますのでよろしくお願ひいたします。

さて、ついに津式くんが大ピンチに！

このあと、津式くんはどうなってしまうのでしょうか！

普通の小説なら助かるところですが、この小説では何人も死んでいくし、裏切っているのです、何が起こるか分かりません！！

次回、ご期待ください！

第十卷 　　〈突如の帰還（前編）〉

〈序章〉

なんだこの生き物は？

さっきの幻に出てきた生き物に似ているが・・・

今まで見てきた生き物とはなんというか・・・

風格が違う！！！！

底知れぬ強さも感じるし

オーラも全くの別物だ

大蠍のような荒々しさも

オオワシのような強さを秘めた感じも兼ね備えている

なんなんだ・・・こいつは・・・

第1章 　　力のMAX値

迫りくる溶岩が目の前にはある

もう助かる道など何処にもない

ただたじろぐばかり・・・

周囲を溶岩に囲まれ死を覚悟せざるを得なかった

僕は心を落ち着かせた

もう助からないと自分で分かったからだ

周りでは他の動物達もがき苦しむ声がある

どうせ死ぬなら一気に死んでしまいたかったがもつどうつすることも出来ない

僕は修行中に、しかも溶岩に吞まれて死ぬという最悪の死に方をするのだ

溶岩が足元まで来た

『もう・・・終わりだ』

僕は死を覚悟した

生という意識を完全に消す

そして………

溶岩に僕は呑まれた

自分の肌が、骨が、内臓が……焼けていく感じがひしひしと伝わってくる

意識も遠のいていく

頭が真っ白になった

僕の心が絶望という真っ暗な闇に満たされていく

溶岩に呑まれる前に覚悟したつもりが

まだ生きたいという意志があつたらしい

涙が出てくる

無性に悲しくなる

いままでの記憶が走馬灯のように流れていく

人間死ぬときはそれまでの記憶が蘇るといふ話しは本当らしい

もう意識も保てなくなった

ついに……終わりのときが来た

意識が完全に闇に落ちようとしていたとき、まぶたの裏で一匹の虎

のような姿をした生き物が見えた

その生き物には王たる風格を感じた

堂々としたその姿に僕は圧倒された

そしてその生き物が言葉を口にした

「お前は……生きていかなければならない」

僕は虎のようななりをした生き物を食い入るように見た

「お前は運命を……悲惨な現実を変える力を持っている。ここで

死ぬようなうつわの小さき男ではない、生きるんだ!! 諦めてはな

らん!! 生きて、運命を変えるのだ!!」

その言葉を最後にその生き物の姿は消えた

しかしその虎のたわいもない言葉が

僕の心の中に希望という光を植えつけていった

「生きる」



心の中で1度、言った

普通の何の変哲もない言葉だがそう思った時に希望があふれ出てくる  
すると僕の体の中からやさしくて温かい光があふれ出てきた

僕は拳を強く握り締めた

そして自分に言い聞かせるように言った

「僕は・・・生きるんだ」

光がさらに眩しくなった

そして次は大声で言った

「僕は！！！！生きるんだああ！！！！！！！！！！」

そういうと体全身をまばゆい光が覆った

周りの溶岩がどどんひいていく

というより、溶けていつている！！！！

僕は僕自身の体を見た

すると僕の体はどこもかしこも炎に包まれていた

この炎にはなにか安心感を覚える

荒々しさや強大な力もものすごく感じるが守りたいという意志が炎

から感じる

まるで炎が生きているみたいだ！！！！

そして周りにあつた溶岩がすべて、完全に溶けた！！！！

それと同時に僕の周りにあつた炎も消えた

僕は何よりも先にホッとした

何せ自分が生きているんだ

本気で死を覚悟した僕が生きているんだ！！！！

皮膚も、骨もすべて異常なし！！

足も手も頭もすべてちゃんと付いている

しっかりとした人間の形をしている！！！！

僕はあまりの喜びに走り回った

今を生きていることが、今ここにいることが何より嬉しい

僕は、生きているんだ！！！！！！

## 第2章 僕の手

ひとしきり走って喜びを感じたところで僕はさっきの現象について考えた

さっき現れた虎のような生き物は自分が見た幻として

なぜさっきの溶岩から僕が抜け出して来れたかだ

あの溶岩は生き物の骨をも溶かすほどの高熱だった

現にここ一帯には溶岩に飲み込まれたはずの生き物の痕跡が全くない！！

ということはずべて溶かされたということだ

それなのになぜ僕は助かったのだろう

ふと、僕はさっきの体の周りにあった火のことを思い出した

さっきの火はなんだったんだ？

僕が焼かれて出ていた火ではないし・・・

僕ははっとなった

まさか！！！！まさか！！！！

僕はおもむろに熱量増加の力を発動させた

最初は何の変哲もないただの力だ

だが僕が僕の出せる限りの力をその熱に加えていくと・・・

なんと体から炎が出た！！！！

さっきの炎とは似ても似つかない炎の威力が出ることには出た

おそらくコンクリートを溶かすくらいのは出来るだろう

やっと僕の力のMAX値に到達したのだ！！！！

しかし威力がまだまだ弱い

おそらく力のMAX値にはその中でも弱いものと強力なものがあるのだろう

おそらく今の僕の力は強さで言うと『弱の弱』といったところか

このままでは戦力にはならない

もっともっと強力な火が出せなければ！！！！

僕はセーブエリアが現れるまで必死で特訓した

力のコントロール、力を集中させる練習、火を帯びるまで熱を加えていく練習

さまざまな練習をした

おそらく5時間くらいはやっていただろう

しかし強力な炎を出すことは出来なかった

セーブエリアが現れた

僕は休みがてら修行のことについて考えた

『何か間違った修行方法で修行しているのか？まあ自分が即席で決めた修行方法だからその可能性も十分あるだろう。しかしそうじゃない気がする。それよりももっと根本的な何かが・・・足りない気が・・・』

僕は考えに考えた

しかしいい案など思いつくわけもなかった

何せ僕はこの自分の力についてほとんど何も分かっていないのだ！！

こんな力が僕に眠っていたことでさえ知らなかった

「その力を一体どうやって強力にすればいい」

という問いに答えられるわけがない

そもそもこの修行方法はおかしいと思う

何度も何度も死にかけたし・・・

まあそりゃあこういった灼熱地獄でも耐えるすべを学んだし、ほかにも色々な成果はあった

しかし、それは偶然、僕が思いつくことによつてなしえた成果であつて荒口がそこまで見通せるわけがないのだ

いくらあいつが『透視』の能力を持っているといつてもここまでの人間の考えを読めるわけがない

だとしたらなぜ荒口はここに僕らを送り込んだのだろう

どのような形であつても僕らが成長して出てくるという確信があつたのか？それとも僕達の強くなりたいという意志を受け取つて信じさせているのか？

よく言えばこんなところだろう

しかし悪く言えば何とでも言える

スコルの目的の邪魔だった僕らをここで殺すつもりかもしれない  
はたまたここに閉じ込めておくつもりかもしれない

もしかしたら最初から帰るすべなどないのかも・・・

いいや、荒口はそんな卑怯な奴じゃない

僕が信じなくてどうする!!!

悪い方に考えたらきりがないではないか!!!

いいほうに、前向きに考えよう!!!

荒口を信じよう!!!

そうやって僕は前向きに、前向きに考えるようになった

しかし心のどこかでは悪い方の可能性もずっと感じていたのかも  
しれない

### 第3章 最後の敵

僕はセーブエリアが解けた後もそのことについて色々考えていた

しかしそれでは修行に集中できないため考えるのはやめた

『今は修行をするべきときだ!!! 余計な考えはいらない!!!』

と、自分で自分に言い聞かせた

そんなときだった

新手的敵が現れたのは・・・

僕が修行していると前方に生き物らしい影が見えた

僕はナンだろうと思いついその生き物の影の方をじつと見た

するとそこには思いもよらない生き物が立っていた

さっき、幻で出てきたあの虎だ!!!!!!

僕はあまりの驚きに口を大きく開けた

その顔がとてもあほらしくかったらしい

虎は口をゆがませながら僕に近づいてきた

そしてこう言う

「ほう・・・やはり生き残れたか、たいしたヤツだ」

僕はポカーンとしていたが首を振って我に返り

「お前は・・・一体なんなんだ」

と、言った

すると虎はこう言った

「我はこの空間で食物連鎖の頂点に立つ生き物・・・この空間での王だ」

「王だなんて・・・その王が僕に何の用だよ」

僕は単刀直入に聞いてみた

「我は貴方に勝負を挑みに来た」

虎は堂々とした声で言った

僕は慌てて

「そんな・・・突然勝負だなんて・・・」

と、勝負することを否定した

しかし虎は一步も譲らなかつた

なので僕は聞いた

「なんで僕なんかと戦いたいんだよ!!」

すると虎は

「貴方の力と我の力、どちらが強いか見てみたい。さっきの溶岩から抜け出した貴方の力はすごかつた、久しぶりに体がうずいたぞよ。この空間の頂点に立つものとして貴方と戦ってみたいのだ」

と、口にした

僕は

「溶岩から抜け出した力つて・・・やつぱりあんた見ていたのか!!じゃあまさか・・・あの重症の火傷を治してくれたのはお前なのか!？」

と、ありえないとは思つたが一応聞いた

しかし虎からは「YES」という予想外の答えが返ってきた

僕は言った

「自分が助けた相手を殺そうとするなんて・・・一体僕に何の恨みがあるんだよ!!!」

虎は

「貴方に恨みはない。それに我が施したのは本当に簡単な処置のみ。大部分は貴方が本能で治していた、溶岩から抜け出したのだから貴方の力だ。我が助けたという表現は間違っている……」

僕は言葉につまった

こいつとは絶対に戦いたくない

しかしなぜだか体がそわそわする

本能ではこいつと戦いたいのか？それともこいつを倒すと強くなる  
と本能で分かっているのに戦いたくたしょうがないのか？

僕は決断するまでに時間が掛かった

その際虎は、何も言わずにただただ僕の決断を待っていた

僕ははあとため息をついた

そして一気に空気を吸う

そして下した決断を虎に言った

「分かった、戦おう……！」

虎はにんまりとした

そして僕から数メートル下がった

戦いにおいてこの数メートルの間は戦いが始まったことを意味する

僕は手をきつく握り、拳を作った

山が噴火した

と、同時に僕と虎が走り出す……！

相手はものすごいスピードだ……！！！！

僕を睨みつけて向かってくる姿はまさに猛獣

食物連鎖の頂点に君臨するこいつは今まで戦ってきた動物の強さの  
比ではない

大蠍のパワーと、強固な体

オオワシのスピードと頭脳

それを併せ持った真の強さを持った虎

今、僕はそんなやつと戦おうとしている

この戦いが終わった頃にたっ  
ていられるのは  
僕か虎か

二つに一つ、戦場では生と死ど  
ちらかしかない  
僕は覚悟を決めて

「オオオオオオ」

と叫んだ

そして神経を尖らせ非情な自分  
へと身をゆだねていく  
この真の強さを持った敵と全  
力で戦うために・・・。

第十卷 突如の帰還（前編）

END

第十卷 〽突如の帰還(前編)〽(後書き)

本日も投稿させていただきました。

また、裏切りムード(?)になっけてきてしまいましたねえ

津式くんはこのあと虎とどうやって戦うのか!

次回もご期待ください!!



第十卷 突如の帰還（後編）

（序章）

まだ・・・

時間にはなっていないはずなのに  
なぜ僕はここにいるんだ？

僕達が一番たどり着きたかった場所  
憎き相手が構えている場所

この屋上に！！！！

第1章 虎との死闘

「オオオオオオオ」

僕は思いつきり叫んだ

虎もその威厳溢れる声で吠える

耳が千切れそうなほどの声だ！！！！

徐々に徐々に僕と虎の間が狭くなっていく

僕は手に力を集中させ鋭い熱を発動した

そして・・・

僕と虎がぶつかった！！！！

僕は鋭い熱を虎の腹部に押し付けようとした

しかしそれはあっさり交わされてしまった

そして今度は虎が僕の肉を食いちぎろうとする

僕は咄嗟に身をかがめて避けた

虎が僕の頭上に行く

僕は

「えいや！！！！」

と、虎の腹を思いつきり殴った！！！！

虎が不意をつかれた攻撃にうっとなるしぐさを見せた

僕はその隙をのがさぬように虎にたたみかけようとした

しかし虎もそんなに甘くない!!

虎は僕がさらに殴りつけようとした手を、その爪で思いっきり切り裂いたのだ!!!

幸いかすった程度だった。僕の手からどつと血が溢れた。

しかも外れた虎の手は地面に当たり、地面に50センチくらいの穴が出来ていた!!!

あんなのをまともに食らったら生きていられない!!

僕は虎との間合いをとった。

しかし虎は僕に向かって思いっきり走ってきた!!

そして手を振り下ろす!!

背中に直撃した!!!

地面に思いっきり叩きつけられる。

しかし僕はめげなかった。

僕も虎に向かって鋭い熱を発動した!!

しかしそれを虎は軽々とかわしてさらに僕に攻撃してきた。

僕はさっきの攻撃を食らったショックで動けず、いた

まさに格好の的となっていた。

僕は虎にされるがままに攻撃されていた。

オオワシのときと同じだ。

また何も出来ずに攻撃を食らっている。

オオワシと違い虎の攻撃は一打一打が重い。

攻撃を食らうたびに吐き気がする。

足が、手が・・・

力が入らなくなる。

意識が朦朧もうちろうとしてくる。

僕は白目をむきながら、手にも力をためていった。

そして攻撃してきた虎の手に、一気に押し当てる!!!

虎がけたたましく叫んだ。

虎が僕からほんの少し離れた。

僕はさらに間合いをとろうと、精一杯の力で地面を蹴った。

そして数メートル下がりとりあえずの危機は脱した

第2章 最大の力

さっきのぶつかり合いの中で僕は思った

虎もオオワシほどではないがスピードがある

めいっばいの鋭い熱を当てるのは至難の技だ

近距離で鋭い熱を使えばそれが隙となり格好の的にされる

もっと早く鋭い熱を打つか、もしくは遠距離の攻撃を考えなくては

！！！！

僕は虎のほうを見た

虎はさっきの僕の攻撃で前足に火傷を負った

引きずっているように見える

とりあえず一本の足は封じたわけだが

まだもう一本前足があるし後ろ足は強靱な脚力を持っている

まだまだ気は抜けない

僕は虎を睨みつけた

虎も僕を睨みつける

そしてまた互いに走り出す

今度は僕は正面からではなく虎の側面めがけて走り出した

さっきの怪我した方の足の側だ！！！！

ここからなら前足でいきなり攻撃を仕掛けられることはない

しかしその意図を虎に感ずかれた

虎がサツと向きを変えて僕の正面に出た

そして前足で思いつき僕を殴りつける

僕は吹っ飛ばされた

そしてドサツと地面に倒れる

『まずい・・・体が・・・動かない・・・』

僕は指一本すら動かすことが出来ない状態になっていた

虎の足音が聞こえる

一歩一歩僕に近づいてくるその足音はゆっくりとした歩調だった  
そしてこういう

「主の力・・・そこまでだったか・・・」  
呆れたような声色だ

僕は何も答えられずにいた

自分の弱さにほとほと嫌気が差してきた

さらに虎は言った

「主なら我を満足させるほどの戦いが出来ると思ったが・・・思い  
違いだったようだな」

虎はそういうと踵を返し僕の前から離れようとした

それを見て僕は言った

「なぜ・・・止めを・・・刺さない・・・」

虎はそれを聞いてぴたつと止まりこう言った

「今の主を殺しても我に何の特もなし」

僕は迫力のない声でこういった

「なんだ・・・それ・・・。ただの・・・情か？」

「情とは・・・敵の力を認めてかけるもの、我はそなたの力を認め  
てはいない」

虎が言った

「俺の・・・力を・・・認めて・・・ない・・・だと？」

僕がこう問うと虎は

「主の力の底は見えた、我に敵うものではない。その様なヤツに止  
めを刺す義理は我になし、同様に認める必要もなし」

と、答えた

僕は流石にカチンと来た

虎にこんなこと言われて黙っていられなかった

そしてこういった

「なら・・・俺の力を・・・貴様に・・・見せてやる」

僕は体全身に『熱量増加』の力をためた

僕の体が輝かしいまでに光りだす

僕の周りを囲むように炎が現れた

徐々に大きく、強大になっていく!!

僕はさらに力をためた

するとなんと、出ていた炎がさらに激しく燃え上がりはじめ、周りの岩や地面を溶かしていく!!

そして僕はその力を一気に解放した!!

原子爆弾が破裂したような衝撃と光と音が辺りに広がった

この空間の姿を変えてしまうのではないかというほどの力だった

山も空も解けていくような気がする

力を使っけていて良く分かる

この力の強大さと計り知れぬ威力が!!!

なんだこの感じは、使えば使うほど力がみなぎってくる

体の奥底から温かい光が差してくる

この力はいつたいたいなんだ?!!!!!!

第2章 炎のビーム

爆発がやんだ

僕は立っていた

この戦いに勝利したのだ!!!

僕が立っている!!!!

この地に立っている!!!!

僕は

「オオオオオオオ」

と吠えた

獣のように吠えた

嬉しさのあまり声を発せずには入れなかった

しかしその時、向こうのほうで声がした

立ち込める爆煙の中、一つの影が見える

「前言撤回しよう・・・主の力は本物だ・・・止めを刺す必要くら

いはあつたようだ・・・だがまだ認めるわけにはいかん・・・。まだ・・・まだ我は倒れぬぞ！！！！」

僕は  
『うそだろ？』

と、首を振った

あの攻撃をくらって生きているだと？

爆煙が晴れてきた

虎の姿をハッキリと捉えた

僕はその姿の豹変振りに驚いた

体が金色に輝き、体全体がよろいに覆われ、尾が3またに割れ、さらに前足と後ろ足と尾には黄金の剣のようなものがついている

僕は圧倒された

あまりに輝かしいその姿に

威厳と威圧感が溢れるその姿に

僕は言葉を口に出れなかつた

すると虎が言った

「主は・・・私が倒す・・・、本気で行くぞ！！！！」

虎が瞬時にして消えた！！！！

僕は咄嗟に後ろを向いた

なんと虎がすでに背後に回っていた！！！！

虎が前足についた剣で僕を切り裂こうと前足を振った！！！！

僕はかがんでそれを交わして鋭い熱をその武器にはなつた

しかし全く効果がない！！！！

鋭い熱が当たったはずなのに

虎は何の痛みもないかのようにもう一方の前足で攻撃してきた！！！！

僕はそれをバツクでかわした

しかし後ろから瞬時に来た攻撃は少し当たった

僕は思わず足を止めてしまった

しかしすぐにまた動いて虎との間合いを取った

そして立ち上がり、今度は僕の方から攻撃を仕掛けた

腕全体を炎で包み、虎を殴りつける

虎の鎧に当たった

「ジユウウウ」

と、虎の鎧が解ける音がした

しかし虎はそんなこと気にせず、尾で攻撃してきた！！！！

2本はかわしきれたが一本が僕の肩に深々と刺さった

僕は思わず叫んでひっくり返った

虎はそんな僕を見るや否や僕に飛びついてきた！！！！！！

重量も虎だけに十分ある

僕はさらにひっくり返って

虎の攻撃を思いつきり受けてしまった

後ろに吹っ飛ぶ

背中感覚が消える

そこに何も無いようだ

僕は立ち上がり手で確かめた

『良かった・・・背中はずっとついてるようだ』

しかし手が血まみれになった

本の数秒触っただけでこんなになるなんて・・・

相当出血している！！

僕は思ったやっぱり遠距離でも攻撃できるものがないと・・・

僕は考えた・・・

そして！！！！

一つ策を思いついた！！！！

出来るかどうかはわからない、でも出来たら勝てる確立がぐんと上

がる！！！！

僕は背中から目を虎のほうへとやった

そして思いついた策を実行する

手に力を・・・炎が出るまでの力を一点に集中させる

鋭い熱よりもっと小さい円をイメージして集中させる

そんな僕を見て虎は隙と思ったのか

僕に突っ込んできた

僕は心を落ち着かせた・・・

そして次の瞬間!!!!!!!!!!!!!!

一点に集中させていた力を一気に放出する!!!!!!!!!!  
すると思っただとおり、炎はビームのように一直線に虎のほうへと走  
った!!!!!!

虎は思いもよらぬ攻撃に呆気にとられ、ビームの直撃を前足に受けた  
虎の鎧を貫通して中の身へと浸透していく

虎の前足がビームで串刺しになったかのようになった

虎がガクツとうなだれる前足を折り曲げ倒れこむ

僕はここぞとばかりにさらに力を集中させた

このときの僕は容赦なかった

今度は10本の指すべてに力を集中させる

そして一気に解き放つ!!!!!!!!!!

炎のビームが虎の胸に、腹に、後ろ足に、肩に・・・

無数の場所に直撃した!!!!!!!!!!!!

虎の口から血がどつとあふれ出る

虎の体がピクピクと痙攣しているのが見て取れる

そして・・・・・・・・・・・・・・・・

虎はその場にドサツと倒れた

僕は今度こそ勝ったと確信し、その場にへなへたと座り込んだ

僕も力を使い果たした

しかし虎はまだ死んではいなかった

僕は焦ったが一目で分かった

虎はもう戦える状態ではない

虎が這ってくるようにして僕の元へと来た

這ってきた後にはものすごい量の血が地面に付着している

僕の前まで来た

そしてこう言う

この虎が這ってまで僕に伝えたかった言葉だ





意識が戻ってきた

どうやらまだあの穴の中みたいだ  
あたりが暗くて何も見えない

すると遙か頭上に一点の光が消えた

出口だ!!!!!!

出口がぐいぐい近づいてくる

そして!!!!!!

僕は外の世界に来た!!!!!!

久しぶりの外の世界、風が見にしてみる

僕は感激のあまり涙が出てきた

すると僕の後ろから声がした

「ここ・・・どこだ？」

僕は後ろをむいた

名屋だ!!!!!!

「名屋!!!!!!」

思わず叫んだ

「津式!!!!!!」

名屋も叫んだ

僕らは抱き合った

すると穴からさらに声が聞こえた

「おいおい・・・なにラブラブやってるの」

「久しぶりなんだからいいんじゃないの？」

「草羅!!!!!!加賀!!!!!!」

2人で叫んだ

僕らは4人で抱き合った

ともに喜びを分かち合う

一通り抱き合ったところで名屋が言った

「一体どうなってるんだよ・・・」

「何が？」

僕が聞いた

「だからさ・・・まだ修行の時間って終わってないだろ？何でこんなに早く戻ってきてるんだよ・・・」

と、名屋が言った

それもそうだ、一体どうなっているんだ？

すると草羅も言った

「ああ・・・音楽室から向かって・・・まだ向こうの時間で三日くらいしかたつてないだろ」

僕は考えた

すると突然加賀が

「あっ」

と叫んだ

「なんだよ」

みんなで言う

「今草羅なんて言った？」

加賀が言った

そりゃあ

「まだ帰ってくるには早すぎるって・・・」

草羅が言った

「その前だよ！！！！」

さらに加賀が言った

「音楽室から出て・・・」

たじろぎながら草羅が言った

「それがなんなんだよ！！！！」

名屋がついに怒鳴った

「音楽室から僕らは修行場に向かったはずなのに・・・」

屋上だよね？」

「そつえば・・・」

皆黙った

すると屋上の奥のほうから声がした

「おやおや・・・皆生きて帰ってきたんだ」

僕らはその声の主が誰か瞬時に分かった

荒口だ！！！！

僕は荒口に声をかけようとしたがある声に邪魔された

「おいおいカオス、話しが違っているぞ」

声のした方を僕は見た

するとなんとそこには一番憎き相手が立っていた

なぜ荒口と一緒にいるのか分からないがそんなことを聞くのは後だ

僕らはそいつの姿をまじまじと見た

太っていて顔は常に奇妙な笑みを浮かべている人物

スコルの姿を・・・

第十巻 突如の帰還（後編）

END

第十卷 〱突如の帰還（後編）〱（後書き）

今回も読んでいただいております。ありがとうございます。

話が急展開過ぎる気もしますね・・・

さて、そろそろ最終話が近くなってきた気がします。

あ、津式くん以外の修行シーンはないですが、暇だったら後で「番外編」という形で作るかもしれないので（笑

それでは、次回もどうぞご期待ください。

## 第十一卷 〱 同士討ち（前編）〱

序章

おい・・・

今なんて言った・・・

そんな、名屋・・・名屋

お前まで

お前まで敵になっちまうのかよ・・・

よしてくれよ

そんなの聞きたくもねえよ

第1章 〱 裏切り 〱

「おいおいカオス・・・話が違っぞ・・・」

そういつてスコルが屋上の暗い隅のほうから出てきた

「すみませんスコル様、この者たちの生命力はゴキブリ並みのもの  
のようです」

荒口が答えた

するとスコルは

「言い訳なんていいんだよ、任務失敗は許されんぞ」

と、声を張り上げた

「ええ、承知しておりますとも」

「ならばこやつらをどうする気だね」

スコルが問う

すると荒口は思いもよらぬ言葉を口にした

「ここで殺します」

僕らは互いに見合った

この状況を理解できてないからだ

名屋は荒口に聞いた

「どづいうことなんだよ・・・意味分らないし・・・ってかなんで・・・お前がスコルとそんな親しげに喋ってるんだ？」

荒口は

「見て分らないのか？」

と、軽い口調で答えた

「見て分らないのかって・・・まさか・・・裏切ったのか!!!」

名屋の声が大きくなる

「裏切っただと？・・・オレはシャイターンだぞ、お前らの仲間になるほうがおかしいだろ」

荒口が確信をつく

「そりゃそうだけど・・・」

名屋が言葉にいきづまった

ここでスコルが口を挟んだ

「全く話が長くなりそうだな・・・おいカオス!!!私に向こうで休んでるぞ」

荒口がうなずいた

名屋が

「おい待て!!!」

と、ひき止めようとしたがスコルは行ってしまった

草羅は名屋の代わりに荒口に向き直って言った

「そりゃあ、あんたはシャイターンだからスコルの味方でもおかしくはない、でも今まで助けてくれたりしたのも事実だ。あれも芝居だったとか言うのか？」

「ああ」

荒口がそっけなく答える

草羅は

「お前・・・ほんとうに・・・もうスコル側のものなのか？」  
と、聞いた

「さっきからそう言っているだろうが」

荒口が答える

すると草羅は笑いながら言った

「そりゃあおかしいな！何で敵なら俺らに修行なんかさせて強くさせたんだ？」

（確かにそうだ。殺したい相手を強くしたのではただのバカだ）

「強くさせる・・・か、あの修行はな、お前らを強くさせるために与えたんじゃない。お前らを殺すために与えたんだ。スコル様の命令でな」

荒口が言った

「さっき言つてた任務つてそのこと？」

加賀が聞いた

「そうだ、オレはお前らに過酷な修行を与えて「修行中に死んだ」というお前らに疑われない形で殺そうとしたんだよ」

そういわれると加賀は

「じゃあなんで僕達は今ここにいるわけ？殺したかったんじゃないの？それに殺したかったのなら途中で修行をやめるなんてことしないよね？」

荒口は眉毛をゆがめて

「ああ、それは計算違いだった。お前らがあの修行に耐えてくるとは思わなかった。修行を途中でやめたのはもうお前らが全員死んでいると思つたからだ、だが、本当に計算違いだった」

と、言った

草羅は

「それで今これから俺らを殺そうというのか？」  
と、荒口に迫った

「モチロンだ！！！」

荒口は即答した  
すると名屋が

「お前は今まで行動をとみにしてきた仲間をそんな簡単に殺せるのかよ！？そんなにスコルの命令は大事なのかよ！！！！」



と、大声で言った

この緊迫した空気の中荒口は笑って言った

「確かにな!!!仲間を殺せねえよ!!!だがお前らを仲間だなんて思ったことは一度もないんだよ!!!!!!」

「てめえ!!!!!!」

と、名屋が攻撃を仕掛けようとする

しかし荒口が次にはなった言葉で名屋の動きが止まった

ぼくも漠然とした

「それとスコル様の命令がそんなに大事なものであって?そんなの当たり前だろう!!!それにそのことはお前も良く知っているはずだ!!!!!!そっぴいさつき仲間は殺せないとか言ってたな。この事実を知ったらお前は俺を殺せるかな?」

荒口がおぞましい笑みを浮かべた

「元クォールトIVシャイターンの名屋・・・いや、ギリアさんよお」

第2章 名屋の過去

名屋が・・・シャイターン?

僕らは名屋に視線を向けた

名屋は目を丸くして硬直していた

「本当なのか・・・名屋・・・」

僕は恐る恐る聞いた  
すると名屋は

「いや・・・違う・・・なに言ってるんだよお前ら、オレがシャイターンだって?そんなわけないだろう・・・。おい荒口、お前頭までいかれたのか?」

「いいや、俺は正常だし冗談で言っているつもりもない」

荒口が冷静に答えた

「そんなわけあるか!!!!!!」

名屋が絶叫した

それを聞いた荒口が言った

「お前は記憶がないだけだ」

「記憶にないだと？」

名屋が冷静さを取り戻して言った

「ああそつさ、なにせアレはお前がまだ4〜5歳のときだったからな」

荒口が言った

すると名屋がふきだした

「バカ言つてんじゃねえよお前、4〜5歳？オレがそんなちっこいときにシャイターンだったって言うのかよ」

「ああ」

荒口は答えた

(どうやら大真面目らしい)

しかし名屋はその事実を受け入れようとしない

「ふざけるなよ！！オレがシャイターンだつて？しかも4〜5歳なんてあるわけないだろ！？シャイターンだつたつてことは力もつかえたはずだよな！？でもオレはついこの前アビリティーカンセルがでて力が使えるようになったぞ！！」

と、真つ向から反論する

「それはスコル様が記憶と同時に能力を消したからだ、いや・・・

正確には「奪った」と言ったほうが良いか」

荒口はいたつて冷静だ

「そんなばかな・・・」

名屋がうなだれるような声で言う

その様子を見た荒口がこういった

「信じられないというなら教えてやろう、お前の過去をな」

「俺の過去・・・」

しばらく皆黙った

しかしその後

名屋が話を聞く体勢に入ったので僕らもとりあえず荒口の話の話を聞く

ことにした

「アレは確か10年前・・・スコル様の計画が仕上がってきた頃のことだ」

荒口が過去を振り返って淡々と話し始めた

「スコル様は計画の最終段階であるこの「学校立てこもり事件」について考えているときにあることに気がついた、これは当時のラストフォートレスしか知らないことなんだが、スコル様は我らシャイターンを取り込んで自分の力にしないと時間を移動できないということに気がついたんだ。しかしその時ちょうどV.Iクォールトの席が空いてしまっていてな、スコル様は当時のIフリーモだったザンバスにシャイターン候補を連れて来いと命じたんだ。そしてそのザンバスに連れてこられた者・・・それがお前、「名屋伊吹」だ。無論、スコル様もシャイターン全員も動揺したさ、なにせまだお前はほんのガキだったからな、それからシャイターン達で「名屋伊吹」を仲間として認めるかどうか議論した。しかしそれは思いのほか長引いてな、何ヶ月も何ヶ月も議論を繰り返していった、そしてお前を「仲間として認めない」という結果が色濃くなってきたときに事は起きた、なんとそれまでIセコントEイトが覇者として名をはせていた空間が壊滅したというのだ！！！！モチロンその事件でシャイターン達の頭はいつぱいになり、一人のガキのことなんて構っていられなくなった。しかしその事件を調べていくとな、そのガキを無視出来なくなってきたんだ。調べに調べて俺らが出した結論・・・それは「この事件は『名屋伊吹』という個人の意志で引き起こされた」というものだった。俺らシャイターンはこの真実を受けたその直後に会議室へお前を呼び出した。そしてお前から事情を聞いたんだ。そしてたらお前はなんていったと思っ？」

荒口が一度話を切った

名屋は

「さあ？」

と首をかしげる

「お前は「僕は仲間はずれにされるのは嫌だから・・・力を見てもらえば・・・強いつて証明できれば仲間にしてもらえろと思っただからやったんだ」そうだった。俺らは硬直したよ・・・<sup>セコーン</sup>ⅠⅠが統一していた空間はな、本当にレベルの高いつわものぞろいで5番手くらいのヤツでも<sup>オッターヴオ</sup>ⅠⅠⅠくらいにはなれるという報告まであった。それを一人でしかもその年で壊滅させたとあつてはお前は未恐ろしいとしか言いようがない、しかし強い力を求めてたスコル様にはまたとないチャンスだった。これだけ幼いと鍛えれば鍛えるほど強くなる、まさに可能性は無限大!!! 吸収するに当たってはこれほど格好な獲物はいないだろう。そしてスコル様はお前を<sup>クアールト</sup>ⅠⅠⅠの座につけてありとあらゆる命令を出した、お前を鍛えるためにな。案の定、お前は鍛えれば鍛えるほど強くなった。しかしそれを面白く思わないやつがシャイターンの中にいたんだ。まぎれもない・・・<sup>セコーン</sup>ⅠⅠさ、自分の空間を壊滅させられた上にスコル様にまで気に入られたお前・・・ⅠⅠⅠが恨まないわけがない。でもまあ、<sup>セコーン</sup>ⅠⅠもガキじゃない。スコル様のお気に入りだったお前を殺そうとは思わなかったらしいな、嫌がらせはしていたようだが・・・」

名屋が体勢を崩した

リラックスしたような体勢になり話を聞き続けた

「それから2年後、時が経つにつれ<sup>セコーン</sup>ⅠⅠの嫌がらせもハードになってきてな、とうとうお前は耐え切れなくなった。それを聞いたスコル様は名屋伊吹がシャイターンを抜けてしまうことを恐れて当時の<sup>セコーン</sup>ⅠⅠをシャイターンから追放した、スコル様には<sup>セコーン</sup>ⅠⅠの力も魅力的だったろうがお前の力のほうが上だと確信したんだろうな。もちろん<sup>セコーン</sup>ⅠⅠⅠは抵抗した、『俺は悪くない!!! だんだん調子に乗ってきたあいつが悪いんだ』てな、でもスコル様はそれを聞き入れなかった。お前は<sup>セコーン</sup>ⅠⅠがいる限りシャイターンをやめたいと言いつたがならな。とうとう<sup>セコーン</sup>ⅠⅠⅠは折れてシャイターンをやめた。やめる寸前<sup>セコーン</sup>ⅠⅠⅠはシャイターン全員の前でお前にこういった「絶対お前を殺してやる!!! いつでも気を抜くんじやないぞ!!! オレはどんな手

段を使つても、どんな状況だつてきにしねえ!!! お前を殺す!!!  
「!!!」てな、そして<sup>セコンド</sup>EEは出て行つた。そしていまの<sup>セコンド</sup>EE、スモ  
ールが仲間に加わつた」

荒口は疲れたような表情を見せながら話を続けた

「それからさらに3年後、とうとうその時が来た。お前が任務でこ  
の津式や加賀なんかがいる空間にやつてきて東京を捜査していた時  
のことだ。前の<sup>セコンド</sup>EE、ジードがお前を襲つたんだ!!! お前とジ  
ードは都会のと真ん中で戦闘を開始した。そのとき、お前と一緒にバ  
イストも来ていたそうだが何せお前はランクこそ<sup>クォールト</sup>IVだがそのとき  
の実力はすでに<sup>セコンド</sup>EEくらいはあつたといわれている。故に<sup>セコンド</sup>EE同士  
の戦いにバイストが追いつくわけもなくお前らは姿をくりましたん  
だ。俺らシャイターンは血眼になってお前らを探した、こんなところ  
で俺らの存在に気づかれスコル様の計画が台無しにでもなつたら  
一大事だからな。だがなかなか見つからなかつた………それ  
から2カ月後………中国を探索していた<sup>クイーン</sup>Vの部隊がとうとう  
見つけたんだ、ジードの死体をな。ジードは五体をばらばらに切り  
裂かれてもう誰だか区別がつかない状態になっていたらしい。だが  
唯一残されていたジードの首飾りで本人だと確定した。モチロン、  
ジードの死体の状態にも驚いたが何よりその場所に驚いた、中国と  
いうのはモチロンのことだがその場所は空間が捻じ曲げられて上と  
下との区別が難しいくらい状況だつたんだ。おそらくお前が「物  
質変形」の力を使つたんだろうな。しかし当のお前の姿が何処にも  
なかつた。<sup>セコンド</sup>EEを倒した相手を野放しには出来ない。また俺らの捜  
索は始まつた、今度はすぐに発見できた、というよりお前の方から  
シャイターンの元へと来たんだ。だがその風貌と目つきは豹変して  
いた。まだ幼いのに殺気が見るだけで感じられるほどになっていた。  
だが俺らはほつといた、これで外部に情報が漏れなくなつたからな  
しかし、お前はジードに何かを吹き込まれていた様でシャイターン  
に恨みを持つようになっていた。そして闘技場<sup>フリーモ</sup>にIのザンバスを呼  
び出してスコル様やシャイターン全員の目の前でザンバスを殺した。

まさに一瞬だったよ・・・ザンバスは瞬殺された。お前は空間を一気に捻じ曲げてその空間にザンバスを放り込み、ザンバスごと空間をはじけさせたんだ。ザンバスは跡形も残らず消えた・・・それをみたスコル様は力を持ちすぎたお前を危険視しお前だけ最初に吸収することを決めた。そして今度はスコル様がお前を闘技場に呼んだんだ、この戦いもすぐにケリがついた。お前はザンバスのとくと同じようにスコル様を葬ろうとした。しかしスコル様の『思い込み』の力はそう簡単に倒せるものではない、スコル様はお前の頭に「力を使えなくなる」という強い思い込みを与えた、お前は必死に抵抗した、力の限り・・・気力の限り抵抗した、しかしスコル様には勝てなかった。お前は力を使えなくなってしまったのだ。その気を逃すまいとシャイターンたちで瞬時にお前を取り押さえた、そして・・・吸収を始めた。スコル様は「デイノース」と呼ばれる、力を強制的に引き出す道具を使ってお前の力を吸収した。そして・・・お前はその場で気を失った。スコル様はさらにお前に「自分に記憶は存在しない」という思い込みを与えた、お前は記憶までもを失ったんだ。そしてスコル様はお前をある一般の家庭に引渡し、その家の住民に「名屋伊吹は自分の子供だ」という思い込みを与え「名屋伊吹」から情報が漏れることを阻止した。そして今に至る」

荒口が話を終えた

名屋は相当衝撃を受けたようだ

何分間か言葉を発せずにいる

すこしショックが収まってきたのか名屋が言葉を口にした

「じゃあ・・・オレは・・・殺し屋集団の仲間で・・・今の家族は偽物だつて言うのか？」

「ああ」

荒口がうなずいた

「そんな・・・」

名屋は泣き出した

これでもかというほど泣いた

名屋の泣き声は屋上いっばいに広がり僕らの心までをも悲しくさせていった・・・

第十一巻く 同土討ち (前編) く

END

第十一巻 〱 同士討ち（前編）〱 （後書き）

更新が遅れてすみません。作者にも都合がありまして・・・（作者はちーさんです）

あ、ちなみに編集者は私ジョンですので。

編集者である私は今後の内容を一切知りません。  
以後お見知りおきを。

さて、内容ですが、荒口は完全に戻ってしまったようです。個人的意見では「スコルに再び洗脳された」と思いたいところですが・・・  
それに、名屋の衝撃の真実までもが明らかになってしまいました。  
次回はどうなるのでしょうか！





ただだ！！！！

このスコルの顔はただ事じゃない！！！！

なぜだ、なぜこんなにも怒った顔をしている！！！！

荒口の顔も見てみると・・・

そこには怒りというよりは驚きのまなざしがスコルに向かってのびていた

その視線をたどり、僕はスコルの足に目をやった

するとなんと！！！！！！

そこにあるはずのスコルの片足が消滅していた！！！！

肉も皮も骨の残骸も一滴の血ですらそこには無かった

僕はまさか！！！！

と、思い今度は名屋に目をやった

名屋は床に手をつき、足にゆっくりと力を入れて立ち上がった

そしてスコルのほうを振り返る

僕はその名屋の顔を見て驚いた

そこに、いつものような幼げな顔は無く、代わりに凜とした大人の表情の名屋が立っていた

そして冷ややかにスコルを見つめる

名屋はゆっくりとスコルのほうへ向き直り手を上げて、『物質変形』の力を使った

すると何も無いところからスコルの失われた足が出てきた

僕は思わずうっとなり、思わず口をふさいだ

生身の足をこんな形で見るのは初めてだ

僕だけではない、加賀と草羅も同じように口を押さえていた

片足のスコルは依然、名屋を頑としてにらみつけている

そんな空気の中、名屋が口を開いた

「荒口・・・いや、カオス・・・先に礼を言っとくよ。ありがとう。」

おかげで・・・俺の力はここに帰った！！！！！！

荒口は

「お前の力が戻っただと？そんなことした覚えは無いがな・・・」

とすこしあせった表情を交えながらも落ち着いて答えた

「いや、お前が俺の過去を明かしてくれたおかげだ。俺は今までの記憶がすべて戻った。突然な。俺もどうしてだかわからないがお前の話を聞き終えた後、ふつと記憶が俺の頭を駆け巡った。お前が何かしたんじゃないか？」

「いや、俺は何もしてな……」

そう荒口が言いかけたとき、それをスコルのとんでもなく怒りの混じった声が遮った

「コノヤロー！！！！くそギリア！！！！てめえ！！！！なにしゃがんだ！！！！！！！！！！」

「なにつて……敵の大将の足をもぎ取ったまでだ」

名屋はいたって冷静に答えた。その際にもスコルに冷たく、冷徹なまでの視線を向けている

スコルはそんな名屋を見てさらに言葉をぶつけた

「おまえ……こんなことして、どうなるのか分かっているのか！！！！」

名屋は

「さあな、どうにかできるもんならやってみるよ」

と答えた

するとスコルは

「お前は……俺を……なめすぎている……」

と、何の感情もこもらない声で言った

すると、僕がまばたきをした瞬間に音もなくスコルは名屋に詰め寄り名屋の頭部に人差し指を押し当てていた

(片足なのに……なんて速さだ)

僕は心の中でそうつぶやいた。

名屋は少し驚いた様子だったが

「何をする気か知らないが、指一本じゃ俺は倒せないぞ」と、スコルに挑発をかけた

それを聞いたスコルはさっきとは変わり、冷静に

「殺す気はない、お前少しは頭を使え。今シャイターンたちはあんならのおかげで何名か減っている。そこに強大な力思ったものが現れたらすることは一つだろう?」

と、冷やかに言葉を放った

僕らはその言葉の意味が分からなかった

が、名屋は何かを感じ取ったらしい

瞬時にスコルの指の先から自分の頭部を引き離そうとする

「もう遅い・・・」

スコルがただ一言言った

するとその時!!!

名屋の頭部に押し当てていたスコルの指がとてつもない光を放った  
!!!!!!

今まで静かな暗闇だった屋上が光に包まれていき風が吹き荒れる

風と光で目を開けることができない!!!

僕は思わず目を閉じてしまった

第2章、強大な力、

数秒間、僕は目を開けられずにいた

それでもすこし、光と風がおさまったところで僕はやっとのことで  
目を開けることができた

名屋はスコルの足元で倒れていた

「名屋!!!!!!」

草羅が叫んだ

そこに加賀が

「落ち着いて、草羅。息をしているよまだ死んでない。気を失っただけみたい」

と、優しく声をかけた

草羅は名屋の胸が上下するのを目で確認し冷静さを取り戻した

そして

「ありがとな」

と、加賀にいった

加賀はにこつと笑って向き直った

名屋は依然、スコルの足元で気を失ったままだった  
それを見たスコルは

「おい！！きさま！！おきねえか！！！」

と、名屋の腹を思いつき蹴り飛ばした

一瞬草羅がピクツと反応したがそれ以外は何もしなかった  
名屋は

「う・・・」

と、声を漏らした

そしてスコルの前にムクツと立ち上がる

僕らはホツとため息をついた

でもその安心もつかの間だった

僕らは名屋がスコルめがけて力を使うのを見たらすぐにスコルに対して戦闘を開始するつもりだったが、

しかしなんと名屋の攻撃の矛先は僕らに向かったのだ！！！！！！

名屋がすばやくこちらに駆け出してくる

僕らはあつげにとられていたがすぐに身の危険を察知して四方に回避した

僕と草羅と加賀は三角形の形になりその中心に名屋がいる

「なにやってるんだよ名屋！！お前の敵は俺らじゃないだろ！！！」

草羅が焦りの声で言った

しかし名屋は答えずに一目散に草羅に攻撃を仕掛けた

草羅はそれを何とか交わして力を使おうとした

しかし心の優しい草羅が友に対して力を仕えるわけもなくチャンス  
を逃してしまった

それは逆に名屋のチャンスとなり名屋は持っていたナイフで草羅の  
胸を切り裂こうとした

しかし、スコルの吹いた口笛の音を聞きすんでのところでナイフを  
止めた

スコルはニヤニヤと笑いもう一度今度は短く口笛を鳴らした  
「どうなってるんだ？」

僕は思わず言葉を口に出した  
するとスコルが大声で笑い始めた

「ハハハハハハ！！！！どうだ！！！！これが俺の力さ！！！！」

「お前の・・・ちからだと？」

草羅がスコルに問う

「ああ・・・ククク」

スコルがまだ笑いの余韻を残しながら言った

草羅はまたスコルに聞いた

「どうということだ！！！！」

「ハハハ、俺は今、このギリアに『お前は俺の仲間だ。俺の命令に従ってやつらを倒せ』と頭の中で思い込ませたのさ」

スコルがまた笑った今度はあざ笑うかのように  
ぼくは

「思い込みの力でそこまでのことができるもんか！！！！！！」

と、大声でスコルに言い張った

スコルは

「じゃあこの今のギリアの行動をどう説明するんだ？」

と、言い返してきた

「それは・・・」

僕は思わず言葉に詰まった

だが反論せずに入られなかった

頭では分かっている

しかし、心が名屋がスコルの見方になったことを受け付けられないのだ  
そんな僕を見かねたスコルが

「じゃあ証拠を見せてやろう」

と、いつてスツと草羅の頭を指差した

僕はまさか！！！！

と、思い







「隣の兄ちゃんなら、それに気づいているんじゃないかねえか？」  
と言った

それを聞いて加賀がうつむいている僕のほうを向き  
何かに気づいていると感じ、僕に歩み寄って来て肩をガシツとつか  
みこつ言った

「気づいてるのか？津式・・・何が起きたんだ！！！」

と、僕までをもにらみつけながら言った

僕はそれに答えた

「スコルの力は思い込みの力・・・。それは仲間ではないものをも  
仲間だと認識させることができる強力なものだった・・・。つてこ  
とは、対象となるものに死の概念を思い込ませたら・・・。」

僕は最後まで言わなかった。言えなかった

しかし、加賀は僕の言いたいことを悟ってくれて代わりに言った

「その対象者は・・・『死ぬ』、最もむごい死に方で・・・。」

僕は思わず顔をそらした

加賀と真正面から向き合ったのでは涙が流せない

加賀も加賀でこれでもかと言うくらい悔しい表情をしていた

スコルは口をゆがませながら

面白いものでも見るような目つきでニヤニヤしていた

そんなスコルを見た加賀は

「スコル・・・僕はお前を許さない」

と、凄みのある声で言った

こんな表情をしている加賀は僕でも見たことがない

それを見たスコルは急にまじめになって

「ずいぶんとでかい口をたたくな」

と、脅すように言った

加賀はそれには答えずとスコルをにらみ続けた

スコルは加賀から少し目をそらしながら

「おまえ、さっきのを見てなかったのか？お前を殺すことなどたやす  
いことなんだぞ」

と言った

加賀は

「お前の目的が僕らの力を吸収することなら、お前はもう僕らを殺せない」

と、スコルに迫った

しかしまたもスコルは笑みを浮かべながら

「今までどおりならな」

と、そっけなく答えた

どういう意味だ？と、加賀がスコルに視線を投げた

それを見て

「お前らはカオスの修行で少しなりとも成長したようだ。さらにギリアの力も覚醒した。今残ってるお前と津式の力なら1人だけでも足りる。」

と、スコルが言った

「ってことは、僕らどっちかを殺すのか？」

と、僕が聞いた

もちろん「YES」という言葉が返ってくると思っていたが

スコルの返事は意外なものだった

「いや、今はこのまま生かすつもりでいる。もちろんどちらか一人は吸収させてもらうがな。しかし俺は最初に言った『この中の一人を殺してから雑用までの仕事をこなしてもらおう』と、そのことを忘れてもらっては困る」

確かにこの学校にくるときにそんなことを言っていた

しかしそれが大真面目に言ったものとは思ってなかった。なので意外だった

しかし僕はほっとした

このまま行けば2人とともにあえずは生きていけそうだし、しかしその希望は加賀が次にはなった言葉で夢となった

第4章 最も戦いたくない相手

「ふざけるな！！！！！」

加賀の声が屋上いっぱいに響きわたった

スコルはもちろんのことだが僕も意表を突かれて思わず目を丸く見開いた

そんななか加賀がまた、声高らかに言った

「お前の奴隷になるようなら死んだほうがまだ！！！！！」  
僕は

（なんてこと言うんだお前は！！！！！！）

と、心の中で加賀を毒づいた

しかしもう時は戻せない

スコルはさらにニヤニヤしながら

「面白いことを言うね、君は。じゃあお望みどおり殺してやるか」  
と、加賀の頭を指差した

僕は慌てて

「やめろ！！！」

と、叫んだ

しかし加賀が

「津式！！！」

と、叫び返して僕をギロツと睨んだので  
動かなかった

スコルは

「美しき友情愛だね。」

と、いった

その時、スコルが何かに気づいたように顔を輝かせた

「そうだ！！！！このまま殺すより面白い方法がある」  
と、言った

スコルはまたもや笑みを浮かべて

「高みの見物と行こう」

と、言っ指に力をためていった  
指が今度は赤い光を放った

そしてまたもや光がすべてを包み込む

僕は手で目を覆った

そうしたせいなのか、僕は数分間頭が真っ白になった

しかしその宙ぶらりんな状態は長くは続かなかった

隣から、加賀のどす黒い声が耳を突いたのだ！！

僕は加賀を見た

加賀は苦しそうにもがいていた

体に変化はないが本当に苦しそうだったので僕は加賀に近づいていた  
った

しかし、加賀まで後数十センチというところで加賀は両手を大きく  
動かし

歩み寄る僕を振り払った。

あんなに仲が良かった加賀にこんなことされてはショックを受けざるを得ない

しかし、今はそんな場合ではない！！！！

僕はスコルに

「何をしたんだ！？」

と、言った

するとスコルは

「名屋・・・ギリアにしたことに近いかな」

と、言った

「またお前の仲間になるといふ思い込みをさせたのか！！！」

今度は大声で言った

「そうだな・・・『思い込み』というより一種の『呪い』かな？」

「呪い・・・」

僕は言葉を復唱した

「そうだ、呪いだ。ギリアの場合は肉体と精神両方に「俺は仲間、お前らは敵」といふ思い込みをさせた。だからやつの行動には躊躇がない。しかし今回は肉体のほうだけにその思い込みをさせた。つまり、頭では分かっているも体が言うことをきかず、仲間であるお

前を攻撃してしまうということさ。もつとも、そのうち精神も支配されるがな。それでも加賀裕一が苦しんでることに変わりはない。唯一こいつを助けられるとすれば殺すことだな。できれば精神は正常なままの状態のときに……。さあ戦え！！津式光！！！！」

スコルは高らかに言った

僕は悩みに悩んだ

加賀を傷つけるなんてできない

でもあいつが苦しんでいるなら助けてやりたい  
でも殺すなんてできるわけがない

そんな時、加賀が

「ウオオオオオ」

と、叫んで僕に攻撃を仕掛けてきた！！！！

肉体強化の力で手の筋肉を何倍にも膨らませて殴りかかってくる

僕は吹っ切れずにただただ攻撃をかわし続けていた

僕がかわすたびに床やフェンスが派手な音を立てて崩れ落ちていく  
その轟音にまぎれながらも加賀の苦しそうな声が辺りを包む

加賀はたまにためらうような……。呪われた体に抵抗するようなし  
ぐさを見せる

それは攻撃するにはまさに絶好のスキだが当然僕がそのスキを突  
けるわけもない

気付けば僕の頬には一筋の涙が流れ落ちていた

それにつられるかのように何滴も何滴も涙がこぼれ落ちていく

加賀は依然として苦痛な声を上げて、僕に攻撃を仕掛ける

唯一変わっているとすれば声が徐々に徐々に痛みを増してきてるか  
のような声が変わっているということだ。

この僕でさえも加賀が精神までもをだんだんと食われていくのが伺  
えた

スコルは

「さあさあ津式光！！！！早くそいつを殺っちまわないとそいつ自信  
が朽ちていくぜ！！！！」

と、高笑いでもするかのような口調で言葉を放った  
その言葉は僕の耳にしっかりと届いていた。その事実も頭では分か  
っていた

しかしなかなか行動に移せない

もしかしたら本当にさっさと殺したほうが加賀にとっても楽なのか  
もしれない

しかし、たとえ加賀が楽になっても僕は苦しい

自分の苦しみが怖くて・・・何より友達を殺し、殺人者になるのが  
怖くて動けない

その間にも加賀はこれでもかというくらいの声で叫んで攻撃し続け  
てきた

そしてだんだんとその攻撃に躊躇がなくなる

「加賀！！加賀！！！！やめろよ・・・やめてくれ！！！！」

僕はひたすらに叫んだ

しかしその声は加賀には届かない。

加賀の肉体強化の力はとんでもないほど成長していた

最初は筋力だけが上がっていたものの、精神が食われていくにつれ  
筋力だけでなく体つきそのもの自体が変化してきた

胸筋は膨れ上がり、鋼より硬くなる

腹筋や背筋や足の筋肉までもが強化され、動きも俊敏になってくる  
もしかしたらこの能力は最強なのかもしれない

何せひとつの力で攻撃力、防御力、機動性が強化されるのだ

戦いにおいて、これほど強力な力はないだろう

加賀はさらに力を増幅させて僕に向ってきた

僕は身を守るために力を発動させた

加賀の力がここまで来ると、僕も生身ではかわしきれない

僕は炎を防御のためだけに使った

攻撃には一切力を使わない

しかし、加賀の攻撃を炎で受ければ受けるほど加賀の手や足にやけ  
どを負わせていく

加賀は自分の意思では体を動かせない

だからいくら熱くて痛くても攻撃をやめることができない  
加賀は僕の炎が当たるたびに苦しそうな声を上げた

僕はもうこれ以上耐えられなかった

いつその炎で自分の首を焼き払うか？

それか炎のビームで自分の五体を切り裂くか？

どちらにせよ『己が死ぬ』という選択肢だった

加賀を殺そうなんて選択肢は無論なかった

しかし、僕は弱かった

自分で死のうにも怖くて死ねない

加賀の攻撃に当たってしまえば楽に死ねるがそれも怖い  
もうどうしようもなかった

そんなことをしているうちに、僕は最悪の時を迎えた

第5章 悲しき戦い

加賀が動きを止めた

僕ははっとなり加賀を見た

体には何の異常もない

しかし目がどんどん血走った目になっていた

加賀は自分の目をもぎとるかのように押さえつけた  
そして

「津式・・・津式・・・にげ・・・ろおおオオオオ！！！！」  
と大声で叫んだ

僕の目は涙でいっぱいだった

しかし感傷に浸ってる場合ではない！！！！

加賀の目の血管が充血し白目が完全にどす黒い赤に変わった  
もう、加賀に感情はなかった・・・

加賀が一気に攻撃を仕掛けてきた

もう何の躊躇もない、精神が完全に墜ちたのだ！！！！  
スコルのため息が横からわずかに聞こえた

かと思うと僕の腹部に激痛が走った

加賀がものすごいスピードで走ってきて僕の腹を思いっきり殴ったのだ!!!

僕は何メートルか飛ばされフェンスに激突した  
ガシャーンという大きな音がした

そしてさらに加賀は僕に攻撃を畳み掛ける

僕の腹に顔に背中に首に・・・

いろいろなところを殴ったり蹴ったりしてくる

加賀の筋力は今は半端のないものになっている

殴られるたび、蹴られるたびに骨がぎしぎしという音を立てる

もう何本かは折れている

このままでは死んでしまう!!!

僕は思い切つて手に炎を集中させ加賀に向けてはなった!!!

炎はビームとなり、加賀の肩を貫いた

加賀がうっとなる

僕は必死だった

我を忘れ、加賀に次々と攻撃を仕掛ける

加賀の肉が、皮膚が炎によって溶かされていく

その光景はまさに地獄絵図だった

加賀はあまりの痛みに大声で叫んだ

その声で僕はふと我に帰った

僕は自分がしているおぞましい光景を見て立ちすくみ、へたり込んでしまった

加賀にとつてはまたとないチャンスだ

加賀が痛みには耐えながら思いっきり蹴飛ばした

またもやフェンスに激突する

今度は当たり所が悪く、足が動かなくなってしまった

僕はその場から動けずに、死の恐怖に打ちのめされたただただ呆然と  
していた

そんな僕の前に加賀が立った



そして僕の頭を粉々に砕くべく、筋肉の膨れ上がったその腕を振りかざす

僕は加賀の顔をひたと見据えた

そこに、昔の心優しい加賀の姿はなかった

しかし、加賀との思い出が走馬灯のように頭をよぎる

加賀が一気に手を振り下ろした!!!

僕は思いつきり目を瞑った

「グシャ」

身の毛のよだつ音がした

時が・・・止まった・・・

数秒後、ポタンとしくが一滴落ちてきた

そしてさらに今度は放水でもしているかのようにポトポトとそのしずくが僕の顔に落ちて来た

ん？

待てよ・・・

僕の顔!?

砕かれたはずの僕の顔

そこにしずくなんて落ちてくるわけがない!!!

僕は恐る恐る目を開いた

と、同時に僕は目をカツと見開いた

加賀はなんと、自分の腕に思いつきり噛み付きその腕を止めていたのだ!!!

加賀のうでは加賀の歯から逃れようと、ぐるんぐるんと回っていたそのたびに血が噴水のように飛び散る

僕は

「加賀!!!!!!」

と叫んだ

加賀は自らの腕を必死で押さえ込んでいた

そして、自分の腕のけんを噛み千切った!!!!!!

加賀の腕が力なく垂れた

そして加賀は血にまみれた口で

「津式！！！！俺を殺せ！！！！！」

と大声で叫んだ

スコルは身を乗り出して見入っている

「そんな・・・」

僕はもちろんためらった

しかし

「俺の左手が右手を補おうとして力を発動させる前に！！！！俺を殺すんだ！！！！頼む！！！！！！はやくやってくれ！！！！！」

僕は首を縦には振らなかった

加賀は恨みがましい目つきで僕をにらんだ

そしてまた目が血走ってゆく・・・

加賀は飲み込まれる自分を抑えようと自分のあらゆるところに噛み付いた

痛みで逃れる気なのだろうか？

加賀の服が血で染まってゆく・・・

加賀は最後の力を振り絞っていった

「津式！！！！！！早くしやがれ！！！！！！！」

僕の目は涙でいっぱいになった

前が良く見えない・・・

気が突いたら僕は首を縦に振っていた

それを見ると加賀は僕のすべてを包み込むような優しい目で僕を見据えた

加賀の目にも涙が浮かんでいた

僕は

「加賀！！！！！」

と叫んで炎をナイフ状にして加賀の方へと走っていった

「津式！！！！！」

加賀も叫んだ

僕の手には、肉を切り裂く感触が走った



第十一巻 〱 同土討ち（後編）〱（後書き）

本当に長い間更新が出来ずにすみませんでした。

この長い間には色々あったもので・・・

学校行事や作者的都合など色々重なってしまっ・・・

さて、ネバービリーブもそろそろクライマックスへと向かっていきます。

もう津式くんの仲間は0人となってしまいました。

この後の津式くんや名屋、荒口、斉木、久杉、そしてスコルはどうなるのか！！！！

次回、ご期待ください。

最終巻 　　時空移動（タイムトラベル）（前編）

序章

この機械で・・・

スコルは時間を支配する気なのか・・・

良くこんなものを屋上に作ったものだ

でも今の僕はそんなものには感心しない

光を失ったうつろな目を

ただただ、再会した仲間に向けるのだった

第1章　再会

僕は上に乗っている加賀を押しわけムクツと起き上がった

涙は枯れ、もうでない

僕はその目で死んだ友の顔をまじまじと見た

頭から上を見ている分にはまだ生きているような気がする

今にも起き上がってきてスコルを倒そうと僕と必死に戦ってくれそ

うだ

僕が悲しみにうちひねれているのをスコルは意外にも邪魔しなかった

口をつむぎ、僕の悲しみが一段らくするまで待つてくれているようだ

なぜそんな事をしてくれるのかは謎だが僕は深く考えなかった

考えられる余裕がなかった

僕は加賀の頭をひざに乗せた

そしてギュツと抱きしめる

涙は出ない

声も出ない

ただ静かに加賀を抱きしめた

自分の手で殺めたともを抱くことで罪滅ぼしのつもりなのだろうか？

自分でやっていてわからないが、何かしらしてないと頭がおかしく

なりそうだ

そんな悲しみが落ち着くまでには相当かかった

でもスコルが待つていてくれたおかげで気持ちにゆとりができた  
僕は加賀を床にゆっくりと寝かせて

スコルのほうを向いた

それを見たスコルは僕にゆっくり歩み寄ってきて

「さあ、こつちにくるんだ」

と、手を引つ張った

僕には抵抗する気力がなかったため、されるがままに連れて行かれた  
スコルは僕を屋上の奥のほうへと連れて行った

ここには月明かりがとどかない

故に真つ暗だった

そこに、一つのドアが現れた

どうやら屋上の上に家らしきものが建っているらしい

どうやって作ったのかは謎だ

僕はそのドアを開けて中に入った

そこには驚くべき光景が広がっていた

その家のような空間はまるで4次元空間でとても広いものになって  
いた

その奥に見えるのはなにやらないような装置だった

これでもかと言うくらい大きな装置の前に、一人が入れそうなく  
らいのカプセルのようなものがあつた

もちろんその装置にも驚かせられたが何よりその装置の前にシャイ  
ターンたち全員が集結していたのに驚いた

まさにここは敵アジトで敵の巢窟というわけだ

僕は悲しみの上に恐怖を覚えた

さすがに敵全員を一気に見ると足がすくむ

しかも僕の隣には敵の大将がいる

これで恐怖するなというほうが無理な話だ

そんな恐怖と悲しみが入り混じってわけの分からない感情になって  
いる僕に言葉が向けられた

「津式！！！！！！」

どこかで聞き覚えのある声の主はすぐに分かった  
斉木だ！！！！！！！！

久杉と一緒に敵方へと行ってしまった斉木が僕の目の前に立っていた  
斉木は僕に飛びついた  
そして

「津式・・・津式・・・」

と、何度も何度も言った  
その後ろでまた声が出た

「あんた、とうとうホモになった訳？」

僕はその声の主を目で捉えて一言言った

「やあカノン」

カノンはまんざらでもない様子で顔をそらした

斉木は僕から離れて言った

「ほかのみんなは？」

僕は今までのことをフツとすべて思い出してうつむいた  
そして首を横に振る

「そっか・・・」

斉木は後ろを向いた

おそらく涙を流しているのだろう

カノンは驚きの表情をしていたがその顔を見ていた僕に気付いてす  
ぐに表情を戻し

「なによ」

とでも言いそうな顔で僕をにらんだ

僕はとつさにカノンから目を離れた

そんな時、スコルが口を開いた

「おい、おしゃべりはその辺にしとけ、さあもつと奥に入るんだ」  
僕らは言われるがままに奥のほうへと歩いていった

第2章 時空移動装置

建物は意外と奥行きがあり、装置は見えているのになかなかその場所にたどり着かない

それだけとんでもない大きさの装置だということだ

装置の元へと歩いていく途中に斉木がいろいろ話してくれた

斉木たちはついていった後、僕らのことが気になって何度も会いに来ようとしてくれていたらしい

だけどそれはシャイターンたちに止められた

それに、今までにも何回かスコルは力の吸収を行っていたらしい

そのたびに斉木が力で直しては復活させていた

復活させるといつてもまた力が元に戻るわけではない

力が抜き取られたことに代わりはなく、力を抜き取られたものは

スローターかオウディウスにされるらしく、斉木は幾度か治療するのを拒んだが

いつもカノンが人質にとられて治さざるを得なかったそうだ

僕も僕でおきたことを話した

荒口とであったこと、しかしその荒口はシャイターンで敵になってしまったということ

ついでに名屋ももとシャイターンだったこと

修行のこと、スコルを倒そうとしたこと、それとみんなが死んでしまった経緯 e t c .

・

僕の話聞いて、斉木の表情が明るくなることはなかった

損なのは当たり前だが、話していて自分がすごした時間がものすごいことになっていて

自分で改めて驚いた

そんな事をしていっているうちに時空移動装置の目の前に来ていた近場で見ると改めてでかい！！！！

パイプオルガンのように壁に付けられて作られたようだ

だが、パイプオルガンなんかの大きさの比じゃない

全長30mはあるだろうか？とにかくでかい！！！！



僕が装置に見入ってる中、シャイターンたちも続々とやってきた  
するとスコルが

「よし、全員そろったようだな……。さあ！！配置につけ！！！！  
！！」

と、大声で言った

シャイターンたちはそれぞれの場所へと向かい、大きな円になった  
僕は何処にいれば良いのか分からずあたふたしていた  
すると斉木が

「津式はここだよ」

と、教えてくれた

僕は斉木に教えられた位置に行った

(僕の隣には荒口がいた)

すると突然、なぜか体が震えだした！！！！

おそらくここにきて、吸収されるといふことの恐怖をはじめと感じ  
たのだろう

自分でもドンくささに嫌気がさす

そんな僕に気付いてか、斉木がささやいた

「そんな怖がらなくて良いよ、ちゃんと俺が治すから」

僕はその言葉を心のよりどころとして何とか落ち着いた

僕は周りを見渡した

こう見ると、シャイターンたちもかつこよく見える

というより、普通の人間に見える

まあなかには人間離れた格好の者もいるが

大半は人間そのものだ

シャイターンたちもあたりを見渡していて何人かと目が合った

そらすものや睨むものもいるが軽く微笑んだり手を振ってくれるも  
のもいた

そんなシャイターンの意外な動きに少々戸惑ったが

それを悟られないようにできるだけ平然を装った

そこにスコルの声が入ってきた

「ではそろそろはじめるぞ！！準備は良いか？」

全員コクツとうなずいた

それを見るとスコルは少し笑って円の中心へと行った

そして

「では、はじめよう」

と、言った

スコルは懐から10又ある熊手のようなもの（あれがディノグというものか？）を出して呪文のようなものを唱えた

ここに初めて来た時だった呪文と同じく何を言っているかは分からない

しかし、明らかに何かが反応していた

僕らのいる床に突然光の線が現れ、5角形と星型が交ざったようなよく本で言う「魔方陣」のようなものが現れた

そして、スコルが

「われ、このものたちの力を譲り受ける」

と、言った

それと同時に熊手のようなものの先端がグングン伸びて、シャイターンと僕のそれぞれの胸に張り付いた、というよりも刺さった！！

！！

多少の痛みはあったがそれほどでもなかった・・・

しかし！！！！

突如激痛が体を駆け巡った！！！！

僕は思わず

「グワツ！！！！」

と、声を出してしまった

シャイターンたちも苦しそうにもがいたり叫んだりしている

力を吸われていくというのは気持ち悪いものだ

自分の大切なものを失ったような気分がする

最初は僕の胸に伸びてきたものは青白い光を放っていたがだんだん赤みを帯びてきた

そのときくらいから徐々に徐々にくるしみが増してきた

どンドン息遣いが荒くなるそして中にはとうとう血を吐くものも出た  
僕も僕で、僕に備わっていた特別な力だけでなく生気までもをすわ  
れていく感じを覚えていた

と、思うと一気に痛みが増し、耐えられなくなった

僕はもだえ苦しんだ何度も何度も血を吐く

シャイターンたちもみな同じ現象が起きていた

それを見ていた齊木が叫んだ

「スコル様！！！！それ以上やったらみんなが本当に死んでしま  
いますよ！！！！！」

スコルは

「だからどうした！！！！！」

と言いつ返した

シャイターンたちは驚きの表情をしていた

熊手のようなものは完全な赤の光を放っている

シャイターンの中の一人がドサツと、床に崩れ落ち動かなくなった

まさか！！！！！！死んだのか！？！？！？

僕は心底怖くなって胸のものを力任せに切り離そうとした

しかし、手が触れる瞬間にそれはものすごい光を放って僕を拒み触  
れることができなかった

齊木は

「やめてください！！！！！」

とだけ叫んでいた

シャイターンたちもパニックってじたばたじたばたしていた

そんななか、一人、又一人と息を引き取っていく

それはもう大騒ぎ！！！！！！

全員必死に胸のものを取ろうとする

しかし誰一人取れるものはいない

そんな事をしているうちにとうとう僕以外全員が息を引き取った！  
！！

僕は恐怖のあまり体全体を震わせていた  
そして、体中にこれでもかというくらい痛みが走った！！！！！！  
もう何も聞こえないし見えない  
斉木の声も、赤い光も  
僕は大声で叫んだ？（自分では聞こえないから叫んでいるかどうか  
も分からない）  
体中の感覚がなくなっていく・・・

第3章 記憶の中で

頭が・・・真っ白になった・・・

僕はその真っ白な世界で何も考えず

ただただ記憶をよみがえらせていた

その記憶をたどっていくと、ある人物が僕のほうへと歩いてきた

僕はその人物が誰だが良く分からなかった

何しろこんなうつろな世界だ。分かるほうが難しい

その人物は僕に声をかけた

（どこかで聞いたことのある声だ）

「ここで何をしている？」

僕は答えられなかった

声が出ない・・・

「ここはお前がきていいところじゃないよ」

僕は心の中で

どういうことだ？

と聞いた

その意思是伝わったらしい

「ここは終わった世界・・・。実界の住民が来てはいけなるところ

なんだ」

終わった世界？

なんのことだろう・・・

「ここはお前らの言う天国というやつか」

てんごくだつて？

なら・・・僕は死んだのか？

「死んではいない・・・、ただ死にかけている」

死にかけている・・・？

あの後どうなつたんだ？

「答えられない」

天国つてあんたはだれなんだ？

「答えられない」

僕はどうすれば戻れる？

「ただ・・・生きたいと念じる」

生きる・・・

「そつだ、生きるんだ!!!」

生きる・・・生きる・・・

僕は生き続ける!!!!!!

僕は心のそこから深く念じた

目をギュツと閉める

ぼくはただただ念じ続けた

すると、風が・・・空気が肌に当たる感触がした

その空気に乗せられてきたのかさっきの人物が誰かフツと思い出した

僕は目を開けた

すると、そこにはさっきに人物の背中が見えた

僕からどんどん遠ざかっていく・・・

待て、待ってくれ!!!!

僕は声にならない叫びを發した

ただひたすらに

待ってくれ!!!!!!

僕は思い切つて名を呼んだ

田辺!!!!!!!!!!!!!!

すると、意識が完全に実界へと戻ってきた

僕はゆっくりと目を開けた

そこには荒口が横たわっていた  
だが僕はすぐには飛びつかなかった  
飛びつく元気がなかった

僕はもう一度目を閉じて考えた  
なんで田辺は・・・僕の意識の中に・・・？

最終巻タイムトラベル 時空移動（前編）

END

最終巻 〱時空移動(タイムトラベル) (前編) 〱(後書き)

作者はハイペースでこの巻を書き上げたそうです。おかげで編集するこつちが大変でした(笑)

さて、ネバービリーブももう最終巻!あと1巻で終わってしまます!!

いきなり田辺がでてきたのは作者曰く「出したかったから」だそうです。

個人的にはまだ終わってほしくないのですが・・・

次回、ネバービリーブついに完結!

どうぞご期待ください!!!

最終巻 〽時空移動(タイムトラベル) (後編) 〽

〽序章〽

体が・・・

透き通るように消えていく

不思議な感覚だ

自分で自分の体がなくなるのが分かる

仲間の声がどんどん近づいてくる

あれから・・・

スコルが来てからロクなことがなかった

暗いことばかりだった

でも今は徐々に暖かく、朗らかな気持ちだ

第1章 〽荒口の遺言〽

「津式・・・、津式!!!!!!」

力を吸われて意識が朦朧とする中、その意識の中で声がした

まるで頭に直接声が入ってきているかのようだ

「津式!!!津式!!!!!!」

声は僕をずっと呼び続けた

この声には聞き覚えがあった

前まで僕と一緒にいた人物・・・荒口の声だ!!!!!!

「あら・・・ぐち・・・」

僕はささやいた

そしてふと、僕は今までの荒口の数々の行いを思い出した

そして

「荒口!!!!!!」

今度は憎しみをこめて言葉を放った

荒口は

「落ちて着け津式、今までのことは悪かった。でも今はそんな場合じ



やないんだ。はやく・・・早くしないと！！！！！！」  
と、せかすように言った

しかし僕はそんな荒口を受け付けようとしな

「悪かっただと？そんな簡単な言葉で終わらすな！！！！お前のせいで・・・加賀、草羅・・・名屋・・・みんなが死んだんだぞ！！！！！！俺はお前を許さない！！！！」

荒口は数秒黙った

そして、声を低くさせ、落ち着いていった

「すべてを話そう」

「すべてだと？」

僕ははまだ反発していた

「お前は忘れてている・・・俺の能力は透視・・・俺はこれでも一応シャイターン、しかもラストフォートレスの一員だ。未来を見通すことも・・・俺にはできる。しかしこれから先すべてが分かるだけじゃない。というより見られるが分からない・・・。意味がわからねえだろうな。一から説明するとだな、未来・・・つまり『運命』の道は何本もあるんだ。普通、運命の道は数十本ある。しかもそれは複雑に枝分かれしててどの道を行くかは人それぞれだ。だから一つ一つの道を透視することはできてもその人がどの道に行くかまでは分からないんだ。でもある程度なら分かる。一本の道を選ぶと、それは大抵、数年はまっすぐな道でその後また枝分かれする、そのまっすぐな期間だけは俺の透視の能力で見ることが出来る。お前を裏切ったときはまさにそのときだった。だから『つらい修行をさせて死なないとは思わなかった』なんてことはありえないのさ」

荒口はアバウトではあるが大体のことを教えてくれた

言葉の意味が分からずあんまり理解できていないがなんとなくなら分かった

僕は言った

「つまりは・・・死んでないと分かっている・・・僕らを修行から出したのか？」

荒口はうなずいた

「なぜそんなことを？」

「あのまま行けばお前らは確実に死んでいた」

荒口は言った

「じゃあ・・・僕らを助けたのか？」

僕は恐る恐る聞いた

荒口はまたもやうなずいた

「そ・・・そんな都合のいいこと・・・でもよ、結果的にこうしてみんな死んでるんだぞ！！未来が見えるならそれも分かっただろう？どっち道死ぬなら・・・修行の場で死んだほうが良かったじゃないか！！そうすればスコルの野望もそこまでだったんだし・・・」

僕は焦りながらも確実に芯の通ったことを言った

「ああ・・・たしかにな、どっちの道でもお前らは死んでいた、修行の場で死んでいればスコルの野望も終わった。でもな、お前らはどうなる？その道を選んだ場合、お前らは死んだままで終わりだ」

僕はわけが分からず首をかしげた

「なら・・・この道なら・・・俺らは生き返れるのか？」

僕は目を丸くして聞いた

「ああ、それにまだお前は死んでいない。外から見たらただ気を失ってるだけだ」

荒口は答えた

そしてさらに言う

「津式・・・お前は・・・未来を変えたいか？」

僕は力づよくうなずいた

すると、いままで声だけだったのが突然映像が現れ

荒口はポケットからあるものを取り出した

それは黒いビーダマくらいの大きさの玉だった

「それは？」

僕は聞いた

「消滅の玉だ」

荒口は答えた

「消滅の玉？」

「ああそうだ。これはバイストの血から作ったもので、術師の体に埋め込むと、術師が力を使ったまさにそのときにこの玉の力が発動して内部から消滅していく仕掛けになっている。これを過去のスコルの体内に埋め込むんだ」

荒口はそういつて僕に手渡した

「過去のスコルって・・・どういうことだ？」

「お前は・・・外の世界だと2年前の中学生1年のときにスコルに会ってるんだよ」

（このこと外との空間には時差があるらしく、この空間で今までの過ごしてきた時間は1ヶ月くらいだが外では1年はたっているらしい。故に外では僕はもう3年生で2年前というと1年生ということになる）

「僕が中学一年生のときに・・・」

僕はつぶやくように言った

荒口は

「お前が中1のときの夏休み、家族や親戚と鎌倉へ旅行に行っただろっ？そのとき行った鶴岡八幡宮、15：26のときに鳥居のとこですれ違ってるんだよ」

と、僕がスコルと出会った場所を告げた

僕は

「すれ違っただって・・・それだけかよ。それ、会っただって言わなかね？」

と、いった

荒口はそんな僕を無視して続けた

「スコルはかなり抜け目がなくてな、その時しか普段の位置が確認されてないんだ。だからこれからお前は過去の時代へといつてスコルにその玉を埋め込め！！」

「埋め込んだらどうなるんだ？」

僕は聞き返した

「お前勘が悪いな。過去のスコルにこれを埋め込めばスコルが仲間集めするために力を使うときに消滅するということだ。そうすればこの未来はなかったことになり、こんな悲惨な運命をお前はたどらなくて済んだことになる。過去を変えて未来を変えろというのはいくらも聞いたことだ」

荒口が答え、さらに続ける

「だがお前が過去の時間にいられるのには限度がある。せいぜい3時間、もって3時間半ってとこだな」

僕は『消滅の玉』というものをひたと見据えた

この何の変哲も無いただの玉に僕の未来を変えるほどの力があるとは思えない

が、とりあえず、荒口の話に鵜呑みにしといた。

そして僕は最も聞きたかった質問をした

「過去に行くって事はあの装置をつかってだよ？あの装置はスコルが今陣取っているんだろう？ってことはスコルを倒さなきゃいけない。でも今の僕には力が無い。どうするんだ？」

荒口は少し迷いながらもこういった

「それは・・・心配ない。俺が今もってるすべての力をお前にやる。そうすればお前の炎の力だけでなく俺の透視の能力もつくはずだ。

あと、生気もな」

「生気って・・・それじゃ荒口が死・・・」

そういいかけた僕を荒口は止めた

そしてやわらかい笑みを浮かべる

どうやらそれは覚悟のうしろしい

次に、荒口はポケットから手帳のようなものを取り出した

「それは過去に行って時間があったら暇つぶしに書いてあることを読めばいい。今は見るなよ」

そう言い終えると荒口の映像が徐々に薄くなっていた

「そろそろか・・・」

僕はわけが分からず聞いた

「いったい・・・何がそろそろなの？」

「もう時間が無いってことさ、さあ！！最後に俺の今持つてるだけの力をお前に注ぐ、準備はいいな」

僕はうなずいた

すると、その時！！！！

荒口の体がまばゆい光を放って僕に力がみなぎってきた

「津式、お前らと過ごした日々は短かったけど、結構楽しかったぜ」  
そういつて荒口は消えた

第2章 最後の戦い

僕は思いまぶたをやったのことで開いた

そしてムクツと起き上がる

スコルは装置のカプセルの中に入ろうとしていた

（どうやらあのカプセルに入ることタイムスリップができるらしい）

まだこちらには気付いていないようだ

僕はゆっくりと立ち上がってスコルのほうへと歩いていった

スコルはおぞましいまでの笑みを浮かべて進んでいった

そこでふと、僕の足音に気付く

スコルはバツと振り返った

「やあスコル君」

僕は言った

「なぜ・・・なぜお前は生きている」

目を丸くしてスコルが言った

「友が・・・荒口が助けてくれたんだ」

僕はうつむきながら言った

「まさか・・・カオスカ・・・余計なことを、いつかは裏切るだろうと思っていたがよりによってこんなときに・・・」



炎の「威力」ではなく、「明るさ」を増幅させたのさ、光は闇があるからこそ生まれる。闇を消せばおのずと光も消えていつてしまう」

「な・・・な・・・」

スコルは絶句していた

「光ですべてを包み込もうなんて、到底無理なことさ」

スコルはなおも硬直していた

しかしふと我に返ると

「ああああ！！！！たく、破られちまったよ・・・、まあしゃあないか。どうやらお前は、眼の色を見る限り透視の能力を使っているようだ。カオスから力でも分けてもらったのか？そうだろうな。じやなきやお前みたいなガキに手間取るわけもない。久しぶりに俺も全力で行こうかな？」

と、本気の戦闘を覚悟した顔で言った

「僕は最初からそのつもりだっ・・・」

と、その時！！！！スコルの体がまばゆい光を放った！！！！

僕はスコルの体を直視できずに、とりあえず自分の周りに炎の壁を作った

いったい何が起きているんだ？

今までの光の量とは比べ物にならない大きさの光だ！！！！

数分間その輝きは続いた

この間、僕は完全に目を閉じていた

ここで攻撃されたら一巻の終わりだ

けれども幸い、攻撃されることはなかった

数分後、光が徐々に消えてきた

僕はやっとのことで眼を開いた

するとそこには、豹変したスコルの体があった

体中の筋肉は膨れ上がり、目は真っ赤に血走って体のあちこちから刃のようなものが飛び出している。

その姿はもはや人ではなかった・・・まさに怪物

僕がその姿に呆気にとられている中スコルが言った

「この思い込みの力はなにも敵だけにするものじゃない。自分に強くなるという思い込みをさせれば体もその姿となる」  
僕は

「ごっつくなりやがって・・・」  
と、呟いた

それが聞こえたのか聞こえてないのか

スコルは突如として鋭い眼光を僕に向け  
ウオオオオと、叫んだ

声からしても人間とは思えない

「行くぞオオオオオ」

スコルが叫んでものすごいスピードで突っ込んできた

僕も覚悟を決めてこぶしを握りしめそのこぶしに炎の力を集中させた  
いよいよ戦闘開始だ！！！！！！

第3章　VSスコル

スコルの頭に生えた角のようになってる刃と

僕の炎を宿らせた拳がすさまじい音を立ててぶつかった

お互いに「力」は互角だった

二人ともピクリとも動かない

しかし「持久力」では相手のが上だ。

このままではいずれ僕がくし刺しにされてしまう

この状況を脱するべく、僕は透視の能力を使って力の入れ方を少し  
右にずらした

すると角がものすごいスピードで僕の右手を滑るように後ろのほう  
へと飛んで行った

コンクリートの壁にスコルの巨体がぶつかる

コンクリートの壁はまるでプリンのようにあっという間に碎けた

スコルはコンクリートの壁を何枚も何枚も突き破って

フェンスのところまでようやく止まった。

スコルが僕をカッと睨む



僕は多少その眼に恐怖したがすぐに我に返って目の前の敵に集中した  
スコルが今度は体を回転させて突き出ている刃で僕を切り刻もうと  
してきた

あれをまともに食らったら生きていられる保証はない！！！！  
止めるにしても触れた瞬間に炎ごと手が切られてしまう！！！！  
ならば！！！！

と、僕は10本の指を突き出し  
その指に細く鋭い炎を集中させた  
そして一気にその力を解放する・・・

10本の炎のビームがスコルの体めがけて一直線に走った  
それに気づいたスコルが体をよじって回避しようとした  
しかし、光と同じ速度の炎のビームだ

それも10本も来てはすべてをかわせるはずがない！！！！  
僕は勝利とはまではないかないものの、大打撃を負わせられることを  
確信した

しかしあるうことかスコルは回転をやめ、両手に力を込めだした！！！！

そしてスコルの両手が光を放つ  
すると、その光を浴びた途端

もう少してスコルに当たるといところで炎のビームが消えた！！！！  
僕は驚きを隠せずに数秒棒立ちになってしまった  
その瞬間を逃さずにスコルが僕に突っ込んできた

僕はとつさに手を前に出し、炎を出そうとした  
しかし

「遅いわぁ！！！！！！」  
と、スコルが叫んで

その声が耳に届いたかと思うと突然脇腹に激痛を感じた  
みると、脇腹にスコルの手のひらから突き出した刃が深々と刺さっ  
ていた

スコルは

「流石、歴戦重ねてきて透視の能力ももったやつだな。ど真ん中貫いてやるうと思っただら咄嗟に少し左によけやがったわ。でも、まあ、かわしきれぬ攻撃じゃあなかったな」

そう言つてスコルが手を引いた

それと同時に大量の血がしぶきを上げた

僕は床に崩れ落ちた

そしてスコルを見上げる

それを見たスコルは

「お？ 『なんでビームが消えたんだ？』とでも聞いたそんな顔だな。いいさ、最後だもんな、言つてやるよ。お前もわかつている通り、俺の力は俺の体から出される光を見たやつに思い込みをさせるといふ力だ」

まさか!!!

と思い僕は目を丸くした

「おつ、感づいたみたいだな。そう、俺の手が光つたのももちろん思い込みの力の光、それを見たお前の脳はこう命令したんだよ。炎のビームを消せ、ってな」

僕はかおをゆがめて、スコルを睨んだ

「おお怖え。そんな顔しなさんな」

ふざけたスコルの口調に僕はさらに怒りを隠しきれずに声を出そうとした。

しかし声を出そうとすると脇腹に激痛が走ったのでやめた

かわりにもつともつと睨みつけてやった

スコルは笑いながら

「さあ、おしゃべりはここまで。そろそろとどめを刺してやるうではないか。自分の技で死ぬがいい」

そう言つてスコルは10本の指に力を集中させた

僕は透視の能力でどういった技を出そうとしているのか即座に分かったが信じられなかった。

スコルが出そうとしている技、「炎のビーム」だ

第4章 覚醒：そして決着

スコルの指が光りだす

そこには間違いなく炎のビームの力が宿っていた

まさに絶体絶命・・・

僕は目をそつと閉じて心を落ち着かせた

この状況だ、落ち着かせるなんて無理がある

しかし、死という大きな屈辱を受け入れるにはそれ相応の心のゆとりがある

徐々に光が強くなってきた

そして！！！！

「あばよ」

冷やかにはなつたスコルの言葉と同時に僕の体を炎のビームが貫いた  
衝撃で僕の体は一瞬宙に浮いた

そして頭からゆっくりと地面に触れていき

仰向けの体制で床に寝そべった

スコルはそれを確認すると踵かかとを返してカプセルへと向かって行った

僕を倒したことに喜びもせず憐れむこともしない

最初から僕を倒すのが当たり前だったかの様に乱れない歩調で歩いて行った

しかしその歩調もつかの間、その歩みは突然ストップした

「甘いよ、スコル・・・。俺がやられる幻覚でも見たか？」

スコルは自分の喉元に炎の刃を確認して目を丸く見開いた

「おい、・・・これはどういう・・・」

どうやら驚きを隠せないようだ

それはそうだ、ほんの数秒前に自分が殺した相手に今度はその自分が死の選択を強いられているのだから

僕は得意げに

「透視の能力を持つやつが自分の技でやられると思うか？自分の技なんてもう完全に見切ってるんだ」

と、言葉を浴びせた

スコルはまだ驚いた様子でひたすら体をこわばらせていた  
言葉を発せる状態じゃないと思つて僕は話を続けた

「炎のビームは貫通力、つまりたての衝撃にはこの上なく強い。でも横の衝撃にはめつぽう弱くてね、それがたつた一つの弱点なんだ。真正面から俺の力をぶつけたんじゃ全く意味がない。でも横から俺も炎のビームを発動させれば破ることなんて容易なことさ」

「それが……わかつて……いた……として……も、あの距離だ……。あんな……。一瞬でそんな……。こ  
と、できる……。わけが……。ない!!!」

スコルが、言葉途切れ途切れに言った

「それもそうなんだが、出来ちゃったものはしょうがない。俺も実は結構驚いててね」

僕は笑いながら言った

「そんなこと……。そんなことで……。殺されて……。たま  
るかああああ!!!」

スコルが威勢よく怒鳴つて僕の手を振りほどいた

「はあ!!!おどろいたよ、まだそんな力が残つてたなんて」

上がり調子で言う僕の言葉を聞いてスコルがまた声を荒げた

「俺は……。絶対に勝つんだ!!!!!!!」

スコルがまた思い込みの力の光を放った

僕はその光のすべてを炎で包み込み、一瞬で消してやった

スコルがまたしても目を丸くする

「残念だけどスコル、どうやら君はもう僕には勝てないようだよ」

僕は今までのスコルのように笑いながら言った

「な……。な……」

スコルは絶望した顔で絶句した

僕は

「どうだい、スコル、殺される側の気分はさ。今までお前が他人に与えてきた恐怖が少しはわかったか？」

と、言った

それを聞いたスコルは「うるさい、うるさい」と何度か言った後に「おれは・・・俺は・・・殺されない。俺は常に殺す側なんだよ！！！！」

と、今までで一番強力と思われる光を放った

僕は目をかつと見開き

全身に最高の密度の炎を張り巡らせた

そしてあたり一面の光を包み込んで同化していく・・・

そして、一気に包み込んだ光を受け流してカツ消す！！！！！！！！

あたりはまた一面の闇に戻った

そして僕はスコルに飛びつき炎の刃でスコルの腹を焼き切った！！！！

最高の高温で焼き切った腹からは血も蒸発して飛び散らない

ただただ赤い不気味な蒸気が立ちのぼった

スコルの目が白目をむき始める

「お前：なぜ・・・そんな力を・・・」

風前のもしびの命のスコルが力を振り絞っていった

ぼくは

「一回死を見た人間が、天才的な力を持つといった事例はいくつかあるようだよ。それをあえて言うなら『覚醒』・・・かな？」

と、言った

「覚醒・・・俺には一生無理そうだな・・・」

それが最後のスコルの言葉だった

それを言い終えるとすぐに床にドサツと、崩れ落ちた

僕は開放していた力をスツと体の奥底に戻した

そして一回深呼吸する

とりあえず最も倒さなければならぬ相手、スコルを下した

この場にみんながいたらどういう反応をしただろうか？

飛び上がって喜んだらどうか、それとも今までのことを思い出し涙を流しただろうか

なににせよ、倒したことには大いなる喜びを感じていただろう  
でも今の僕は違った

一番倒したかったはずの敵を倒したのに・・・  
何かやりきれない気持ちが残った

この感情はいつたい何なのだろう  
喜びでないことは確かだ、しかし、当然悲しみもない

「僕は・・・」

何を言おうとしたわけじゃなかったが口から言葉がこぼれた・・・  
僕は空を見上げてもう一度深く深呼吸した

「よし!!」

自分に喝をいれて僕はカプセルへと向かった

コクーンの形をしたカプセルを前に僕は一度立ち止まってあたりを  
見渡した

ほとんど死体しかないがこの時代での最後の景色となるものだ

僕はすっかりその光景を目に焼き付けた

そして・・・カプセルの中へと僕は入った・・・

第5章〈タイムトラベル〉

「ここは・・・どこだ？」

はつきりしない意識の中で僕は思った

電車の音、クレーラーの音、うるさい女子高生や他の人間の話し声・・・

どうやら僕は電車の中にいるようだ

だんだん意識がはつきりしてきた

僕は電車の最後尾の車両に乗っていた

あたりを見渡すと、そこには平凡な日常の流れがうかがえた

(最も、僕ただ一人はその時間の流れに逆らっているが・・・)

え、次は鎌倉、鎌倉へお降りの際は忘れものにご注意ください。

お出口は右側です

車内アナウンスが流れた

僕は慌てて立ち上がり、車窓前に立った

ブシュー

ドアが開いた

僕はほかの乗客と一緒にになって鎌倉で下車した  
どうやらちゃんとタイムトラベルできたようだ

それにしてもなんか変な気分だ

自分はちゃんとここにいるのを感じる感じがしない

いてはいけない時間に無理やり入っているんだからしょうがないが  
本当に変な気分だ

ホームから出て僕は鶴岡八幡宮行きのバスに乗り込んだ

そして、鶴岡八幡宮の大きな鳥居の前に到着した

僕はバスから降りて鳥居のよこで立ち止まった

(ここならそのうちスコルも通るだろう)

ところがあと少しで時間だというのにスコルが現れる気配は一向に  
しなかった

(本当にここに来るのか?)

そう疑問を抱くようになった

僕は実際にここに来た時の自分の行動を思い返してみた

けれど、これといって思い当たる節はなかった

僕は鳥居からつながる本堂へと向かう大きな道の前に立った

何となく眺めていただけだが咄嗟に思ったことがあった

(待てよ、すれ違った時にこの消滅の玉を埋め込むのであればそれ  
なりに近い距離であるということだ。この大きな道でそんな距離で  
すれ違うなんてまずないんじゃないか?)

その時、僕は僕自身の記憶の断片を見た

そこには古い銅像や絵画、彫刻などがずらりと並んでいた

まるで……

……

僕ははっとなった

そうだ!!! そういえば!!!

まずい、もう時間がない、間に合ってくれ!!!

僕はそんな気持ちを抱きながらおもむろに走り出した

そして大きな道を登って行ってわき道にそれる

確か・・・確かこの辺に!!!!!!

道のわきにたくさん生えている木々をかき分けて向かった先

それは・・・ 美術館

そう、僕は家族とここに来た時に本堂近くで

「光と音の美術展」

という看板を見てそこに行ったのだ

15:26と言ったらそこにいたはずだ

僕は昔の僕を美術館で探しまわった

そして、とうとう見つけた!!!!

2年前の僕、家族と楽しげに笑って美術品を楽しむ僕

それを見ているとなぜだか目から水のしづきが流れ出てきた

「あれ、おかしいな・・・。なんで、涙が・・・なんでおれ、泣

いてるんだよ」

そう呟いた

止めようとしても次々とあふれ出てくる

今、僕の目の前にある光景

もう二度と僕が手にすることのできない幸せ

その光景に僕はほっとしたのかもしれない

最終章（完結）

僕はその光景を眺めながらもスコルの姿を探した

そして!!!!時は来た・・・

15:26 -

美術館の時計がその時を刻んだ

僕はちょうど次の美術品を見るのに並んでいるところだった

そして美術展を見終わって出てきた人物

間違いない!!!!スコルだ!!!!!!

僕は一瞬で前に出てスコルの腕をつかんだ



スコルがそれに気づいて怪訝な顔をする

僕はそんなことお構いなしに炎でスコルの腕の皮を焼き切って穴を作り消滅の玉を埋め込む。そして周りの肉を溶かして接着する

これだけの動作を一瞬でこなした

僕も成長したようだ。一瞬の激痛にスコルは「うっ」とうめいたが、僕から勢いよく腕を離す

なんだこのガキ

とでもいいたそうな顔をしてスコルは立ち去って行った

僕もここに長居すると家族に気づかれかねない。

僕もまた、一瞬にしてその場から立ち去った

それから1時間後、僕は自分の家に戻ってきていた  
やっぱり最期を迎えるのであれば自分の家がいい

(時間が過ぎるとどうなるかは荒口も言わなかったがおそらく消滅してなくなるのであろう)

僕はこっそりと家にはいって自分の部屋にはいった

「もうここにも来れないんだな・・・」

時は5時ちよつと、外もそろそろ薄暗くなってきた

僕はポケットに手をつ突っ込んで荒口から渡された手帳を取り出した  
そしてパラパラとめくる

するとそこには、今までの僕の体験したこととこれから起こるであろうことが書かれていた

僕はとりあえずそれを最初から読み始めた

まず、スコルたちがここに突然やってきたこと

それから殺しあいの宣言、スローターやオウディウスになった僕たちの友

幾人もの友達との出会い、そして共闘、さらに友の死

思いがけない裏切り

敵の渦中に吞まれた友

シャイターの存在、そして激戦

シャイターンだったと言われた友

そしてスコルとの激戦に勝利

そしてタイムトラベル、それから・・・

これから起こること

自分の消滅・・・

いろんなことが深く、みんなの感情や行動が深く、鮮明に描かれていた

こう読んでみるとかなり波乱万丈な人生だったといえる

というか、これ以上のものはないだろう

ここで僕は自分の足が消えかけていることに気付いた

「そろそろか・・・」

僕は手帳をそつと横に置いて自分の最後に浸った

まどから外の景色を眺める

とうとうこの世界ともお別れなのだ

最後に自分の家に帰ってこれてよかった

ただいまとは言えなかったけど・・・

それでもうれしい

どんどん消えていく部分が上に来てとうとうのど元まで来た

足などの感覚はとうにない

死んでいつているのになぜか僕はとても明るく、気持ちのいい気分だった

死んでいった仲間の声が近付いてくる

「津式！！！！津式！！！！」

みんなが僕の名前をコールしてくれている

あの世へと迎え入れてくれているのだろうか？

どンドン、どンドン声が近付いていつて・・・

僕は・・・消えた。

最終卷  
↳ 時空移動タイムトラベル  
(後編)  
↳  
E  
N  
D

最終巻 〳時空移動(タイムトラベル) (後編)〳 (後書き)

ついにネバービリーブも完結です。

編集者として、最後読んでてちよっと涙が・・・(笑

いやー

もう編集が出来ないんですね

面倒くさかったけど、なかなか楽しい作業でしたよ。

エピローグも出しますので、その際には、作者さまの感想もお聞き  
したいと思います。

今までご愛読してくださった皆様、本当にありがとうございました  
！！

## エピソード

僕の名前は津式光（みんなにはなぜか「ちー」と呼ばれている）中学二年生だ！！！！

ある日の学校帰りの時、僕は友達の名屋伊吹（通称ジョン）に

「津式！！！！お前さ、小説とか書く気ない？」

と、言われた

僕は

「書く書く！！！！！！」

と、全面的にOKした

何故なら僕は学校の文章の選手に選ばれたりして作文には少し自信があつたし、何しろ物語を書いてみたいという思いが強くあつたらだ！！！！

まさに絶好のチャンス！！！！

僕は名屋からその話を詳しく聞いた

すると、インターネット上には「小説家になろう」というサイトがあつてそこで書いてほしいというのだ

僕は

「じゃあ書いたらとりあえずお前にメールで見せるから待ってて」

と、返した

「おう」

と、名屋はかえして「じゃあ俺こつちだから」と、自分の家へと帰って行った

（編集者注：私の家は、地元中学校から約400mのところにあつて、「ちー」と帰るのは200m位です）

僕は家に帰ってさつそく小説を書くこととした

しかし、ここで重大なことを僕は忘れていた

何を書くか決めていない！！！！！！！！！！

いったい何をか書こうか僕は迷った

そこで、僕はあることを思い出した

そうだ、そういえばここに……

と、僕はおもむろに机の引き出しを開けて

ある、一つの手帳を出した

これは1年前、鎌倉旅行から帰ってくると僕には覚えがないのになぜか床に落ちていたものだ

そこにはあり得ないことがたくさん書いてあつて、見つけた時は何の興味も示さずとりあえず引出しにしまっておいたのだ

でも今見るとこの話……なにか他人の書いたような……というか、他人の発想だという気がしない

そうだ!!!!!!

と思つて僕はパソコンを立ち上げた

「これなら、小説にしたら面白そうだ!!!!!!」

と、思つて僕はその手帳をもとに小説を書くことにした

ひどく残酷でねじれ曲がつた、とんでもなく突飛なこの話の書き出しはこんなのでどうだろうか？

「友達は本当に信用できるものなのか……」

ネバービリーブ 完

## エピローグ（後書き）

お初にお目にかかります

ジョン&ちーのちーです

ネバービリーブを最後まで愛読していただき誠にありがとうございました  
ました

みなさん、このネバービリーブの世界観を十分に最後まで満喫できたでしょうか？

最初、僕は学校で起きるいろいろな怪事件を津式くんが解決していくという推理小説を書くつもりだったのですが、どこでどう間違ったのか・・・、全面的なSF小説になってしまいました（笑

しかし、結構この作業は楽しくて、自分で書いていながらどのように津式くんとその周りの友達が成長していくのかとてもわくわくしながら書いていました。

私がこの物語を最後まで書いていけたのもみなさんの支えがあったることだと実感しています。

次の作品は気が向いたら出すつもりです。

これからも私たち二人共々、頑張っていきますのでどうぞよろしく  
お願い致します

> 追記<

ジョン&ちーのジョンです。ネバービリーブを最後まで読んでくださってありがとうございます。

現在私たちは「DARIF」という小説を書いています。高校生ということもあって更新頻度は少ないですが、ぜひ見てください。

あと、最後までご愛読くださった皆様、これからのジョン&ちーの作品作りの参考とさせていただきますので感想・アドバイスを書いてくれると幸いです。

最後まで読んでくださって本当にありがとうございました！！

2009年8月12日



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5495f/>

---

ネバービリーブ

2011年10月5日16時47分発行